
ライドガール

ひがら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライドガール

【Nコード】

N0571R

【作者名】

ひがら

【あらすじ】

細々と家族で経営してきたランドルム牧だが、近年は馬が売れず、ついに廃業を考えるまでに追い込まれてしまった。

ランドルム牧の娘リウは、これからも牧場を続けていくために、愛馬バルメルトウと 天馬競 への挑戦を始める。

三人三馬で組を作り、速さを競うこの競技で勝利すれば、牧の名はあがり、勝ち馬からの収入が見込める。

しかし、リウの幼なじみで名門イシャーマ牧の息子カズートも、名馬をそろえた自分の組で 天馬競 への出場が決まっていた。

カズートに反発心を抱くノア牧のシャルス、そして風変わりながら馬にかけては一流の腕を持つランダットという仲間を得て、リウは

天馬競 での勝利を目指す。

草原を駆ける馬に魅せられた少女の挑戦と恋の物語。

一 駆ける

早く。早く、早く、早く。

心の中で祈りながら見つめる早春の大地に、陽炎にも似たかすかな土煙が現われた。リウはとび色の目をさらに大きく見開いた。斑毛の馬が、若草に覆われた稜線を越えて懸命に駆けてくる。

「早く！」

リウは祈りを声に出し、胡桃色の髪を押し込んだ鍔広帽をしっかりとかぶり直した。

マントの襟もとに巻いたくたくたの風防布カーチに、履き古したブーツ。そんな出で立ちのリウを十三歳の小柄な少年と思う者はいても、十七歳の娘だと見抜く者は多くはない。

出番を察した馬が、鞍下で軽やかに足踏みをはじめた。

リウはその首を平手で軽く叩いてやる。

「バルム、行くよ」

リウは首の風防布を鼻の上まで押し上げた。大地を駆ける準備は整った。

口端に泡を浮かべた斑毛の馬がやってくる。帽子と風防布で目しか見えない乗手が腕を伸ばす。その手に握られているのは、端に色あざやかな幾本もの細布を結んだ旗棒だ。

リウも懸命に手を伸ばす。まだ遠い。旗棒には届かない。わたしの腕が男くらい長ければ。そんな願いがちらりとよぎるが、女、それもどちらかといえば小柄な生まれつきを、いまさら変えられるわけもない。与えられたものを嘆くよりも、それをどう使うかだ。リウは低く作るのが癖になった声を乗手にかけた。

「ご苦労さま！」

震えはじめた手に旗棒を握ると同時、リウは愛馬バルメルトウの

腹を蹴った。まっすぐ行く手を見据える。

今日のために念入りに梳いたバルメルトウの漆黒の体は、この中継地に来るまでの風と土埃とで、いまは輝きを失っている。だが、その下の筋肉の見事さは決して損なわれることはない。馬は力強く駆けてゆく。

旗棒を背中側のベルトのすきまに刺し、愛馬の疾走の邪魔にならないように鐙の上に立ち上がりながら、リウは顔をゆがめる。

びゅうびゅうと体にぶつかって、鞍からリウを引きはがそうとする風のせいではない。

チエクの町が主催する今回の キノ・ソウル 天馬競 には、二十一組六十三騎が出走した。

三頭の馬と三人の人がひとつの組となつて速さを競うこの競技はどこでもすることは変わらない。日が十分に昇ったころに町を出発する一走騎は六リーグの距離を駆け、昼ごろに第一の中継地で二走騎に旗棒を渡す。二走騎も同じように六リーグを走り、そして第二の中継地で旗棒を受けた三走騎がまた六リーグを走り、計六時間かけて町の広場へ戻る。

だが、もちろんすべての組がその時間で走るわけではない。

すでに日は傾いて、十九組がこの中継地を出発している。まだ来ない一組は手前の沼地で馬の脚を傷めて棄権したと別の組の乗手が伝えており、係員が様子を見に行った。

リウたちは文句なしの最下位だった。

最後まで最善を尽くそうとする心に、先に行く馬があげる土煙すら見えないむなしさが立ちこめていく。

リウは風防布の下で唇を噛みしめた。

町並の手前、地毛なのか土埃なのか、白びた馬が半ば歩くように走っている。リウはバルメルトウの首をぱんと叩いた。

原野を六リーグ駆けてきたリウの愛馬は、なお力を失っていないかった。その脚に伸びが加わり、くたびれきった馬と乗手の姿がぐん

ぐんと近づいた。バルメルトウは漆黒の風のようにその傍らを走りすぎ、そのまま音高くチェクの町の石畳を駆け抜けた。

だが、広場の飾りつけはすではずされかかっていた。天馬競を見物する観客よりも、片付けの人間のほうが多かった。彼らはリウたちの姿に妙な同情と感心を露わにした。

「お、まだ戻ってきたのがいるぜ」

「ひよろひよろの馬だなあ。乗手がちびとはいえ、よく無事に走り通したもんだよ」

笑われるほうがまだましだ。そんな思いを噛みしめながら、リウはバルメルトウの首をまた叩いた。馬を元気づけるといふより、自分自身を鼓舞するためだった。リウの馬は頑丈な骨としなやかで強い筋肉を持っていたが、馬体は牝馬並に華奢に見え、漆黒の毛はもつさりと厚く、脚も不釣り合いに長い印象を与えて、見栄えは決してよくはなかった。

広場で待っていた係員は、リウが鞍を下りるより早く、声をかけてきた。

「ランダルム組かい？」

風防布をひきさげるリウに、係員はさつさと水色のリボンを押しつけた。

「完走おめでとう、十九位だ。また来年、チェクの天馬競への参加を待っているよ」

一騎は抜いた。だが、十九位だろうが二十位だろうが、リウにとつては同じことだった。

一位、せめて二位までなら意味がある。副賞もさることながら、一位の金系か二位の銀系のリボンを二本手に入れた組は、秋の大^{キリノノウル}天馬競に出走する権利を得るからだ。そこで五位までに入って天馬の称号を受けることはもちろん、出走そのこと自体が、この国で馬に関わるすべての者にとって最大の名誉と見なされている。

しかし、金系銀系の入らないリボンは、ただ三騎が完走したというにすぎない。

専門に馬を育てているわけでもない人間が集まって出走した組なら、完走だけでも十分な名誉と土産話になるかもしれない。だが、リウにとってはそうではなかった。

「……ありがとうございます」

それでも係員にリウは礼を述べ、旗棒を差し出した。ちょうどそこへ二十位の馬が入り、係員はあわただしく旗棒を受け取ってリウのそばを離れた。

リウはおとなしく待っていたバルメルトウの鼻面をそつとなでた。「すぐ、水をあげるからね。体を拭いて、それからもちろんご飯もあげるよ」

あたたかな鼻面に頬を寄せる。

「お疲れさま……ごめん、バルム」

無造作に髪を束ね、宿の厩舎で馬の世話をしていたリウは、人の気配に振り向いた。

昨日、同じ組として 天馬競 を走ったふたりの男がそろっていた。

「おはよう」

昼過ぎだったが、まだ起きて間もないに違いない相手に、リウはそうあいさつする。

「この子たちなら、ちゃんと体を拭いて櫛もかけといたよ。飼葉食いもよかったし」

二頭の馬が、飼主の気配に気づいて馬房から顔を出した。

明け方近くにくたびれた顔で戻ってきて、不機嫌そうに食事をがつがつ食べてから爆睡していたふたりの男に代わり、朝からずっとリウが彼らの馬の世話をしている。

安宿には客の馬の担当などいない。新しい替藁があるだけましなほうで、昨夜バルメルトウの世話をしたのもリウ自身だった。終えるころにはすっかり夜になっていて、夕食を口にする気力もなく、リウは自分の髪を梳かしもせずに宿のベッドに倒れこんだ。だが、

十分に眠ったと思える前に、彼らの到着で起こされた。

彼らも疲れは抜けきってないのだろう。不機嫌そうな顔で、いきなり言った。

「礼金はなしかい？」

天馬競 に出走する組の内訳は、すべてが気心知れた三人というわけではない。三頭の馬と仲間を集められなかった者同士が、幸運を祈ってその場で組むこともままある。その際、期待薄な者と組む見返りとして、報酬を求める者もいる。

見栄えの悪い馬と女の乗手。組む相手としては最悪の条件であるリウには、そうした助っ人気分の者しか見つからなかった。

「礼金なんてとつくの昔、あなたたちが休む前に払ったじゃない。忘れた？」

「おれたちは完走したんだぜ。色をつけてくれたっていいんじゃないか」

「あんな最下位で旗棒を渡しておいて、よくそんなずずうしいことが言えるね」

「いいじゃねえか、もう廃業するんだろ」

「……なに、それ？」

「中継地で、親切な奴が教えてくれたぜ」

「ランドルム牧ってところは、牧だなんて名ばかりで、牧童どころか持ち馬もろくにいなえ。天馬競 にやっそこ出られるのが、そのひよろいだけってな」

リウは息をついた。

「トラブ地方でも知ってる人がいるなんて。うちの牧って、案外と有名なんだ」

「そりやそうだろうよ、ろくな馬も乗手もいなえってのに 天馬競 に出てくるんだもんな。普通はできねえぜ、恥ずかしくて」

「……そう、うちは牧なんて名ばかりで、廃業寸前です。だから約束以上の礼金なんて払えません、今回はご苦労さまでした」

しかしふたりは引き下がらない。

「他の町の 天馬競 にも出たんだろ」

「思い出作りに行ける金はあるってことだろうがよ。この完走はい思い出になつたら」

「そんなお金なんてないよ。あつたら廃業寸前になるわけないじゃない」

「うそつけ！」

「ないつたらない。ここの宿代払つたら、財布には一銅貨だつてないもの。うそだと思うなら、タールーズ地方のうちの牧まで来てよ。うわさのとおり牧童なんてひとりもいなくて、馬もたったの五頭きり、おまけに去年水が出て、低地は池になつてるの」

皮肉な微笑がリウの唇の端をかすめる。

「わからない？ だからなんとしてでも 天馬競 に勝つしかないんだってこと」

ふたりの男は顔を見合わせた。

「……わかつたよ」

「よかつた、ありがとう」

にこりとしたリウに目もくれず、男たちは馬を馬房から引き出し、出ていった。

リウはバルメルトウの鼻面をなでた。

「さあ困つたね、バルム。わたしたちも、帰るしかなくなつちやつた」

十

チエクの町を発ち、いよいよ今夜どうするかを決めなければならなくなつてきたころ。草原に伸びる白い道の先に、リウは七、八頭ほどの馬群を見つけた。

一本の引き綱につないだ馬群の周りを馬に乗った牧童が囲む光景は珍しくはないが、さらに移動馬房と呼ぶべき大型馬車まである。これ一台の値段で普通の家が建てられるほど贅沢な物だった。そん

な代物が必要となるほどの高級馬を扱っ牧はごく限られている。

「……まさか、イシャーマ牧？」

こんなときに、こんなところで　　リウは唇を噛む。

「だけど、道はずっと同じだし……」

足は単騎のこちらが速い。普通にしていればそのうちに追いついてしまっはずで、そうでなければ逆におかしい。様子をうかがう馬泥棒の一味と疑われかねない。

「　　バルム、ちよつと早いけど、今日はこのあたりで泊まろうか」
少しでも距離を稼いで、さっさと家に帰りたところだが、リウはそう決断した。

街道を左にはずれた草原に、夜露をしのぐ助けになっくれそうな太枝を張り出した木が立っている。落ちている枯枝で焚火をして毛織りのマントと毛布があれば、ひと晩くらいしのげるだろう。リウはバルメルトウの頭を向けて草原に乗り入れようとした。

だが、その前に駆けてくる馬の蹄の音が迫ってきた。待ってください、と声がかかる。

「女性……の方、ですよね」

牧童は、幅広帽と風防布でほとんど隠れたリウの顔をのぞきこんだ。

「若さまから、あなたを連れてくるよう言いつかっています。ご足労いただけませんか」

丁重な態度は、牧童というよりも従者と呼ぶほうがふさわしい。けれどもまったくうれしい招待ではなかった。リウは息をついた。

「若さまって、イシャーマ牧の誰？　長男次男三男は独立して若じやなくなっただに仕たって、四男、五男、六男までいたはずだけど」
「カズート若さまです」

ごくつぶしの五男坊、というなつかしい揶揄はリウの口の中にとどまっって、牧童の耳には届かなかった。リウは顔を覆った風防布を引き下げた。

「……そっか、帰っってきたんだ」

リウはひとつ深呼吸すると、バルメルトウの腹を軽く蹴った。

大型馬車の窓はすでに開いていた。リウは口をきつと引き結んでその窓を見つめた。

黒髪を風になぶらせ、一年前より少し痩せた顔が、一年前と同じようににやりと笑った。

「よう。どこかで見たような馬だと思っただらやっぱりおまえか。その格好も相変わらずだな、つか前よりひどくなってるぞ」

イシャーマ牧は、馬の生産が盛んな北部だけでなく国中にその名を知られた大牧で、王家にも関わりがある。その筆頭経営者がカズートの父親だった。

同じタールーズ地方の同業者ではあるが、あまりに規模が違いすぎて、リウの家とのつきあいはまったくない。しかし子供のころから遠乗り好きだった五男のカズートだけは、ちよくちよくランダルム牧までやっては水を求め、ついでに年の近いリウにからつとした憎まれ口を叩いていった。

相手は大牧の御曹司ではあったが、おとなしくする筋合いもなければ、性分でもない。リウも遠慮なく言いかえすことにしていた。

彼が急に南部へ行ってしまったこの一年は会ってなかったが、それまで一〇年もやりあつてきた昔なじみである。まして先に以前のようにならなかつたのはカズートだ。リウも以前のように言い返す。

「そつちこそ、目つきの悪さはちつとも直ってないね！」

「そんなふうと言つのはおまえくらいで、世間じゃ精悍な目もつて言つらしいぜ」

「南部人はお世辞が上手つていうもんね。で、なんの用？」

「冷たいやつだな。久しぶりに会つたんだから、ちよつと話でもと思つたんだよ。おまえのところ、近ごろどうなんだ。今日はこんなところまで商談か？」

「……ん。まあ、そんな感じかな」

一族の仕事は実際の馬の世話よりも商談というイシャーマ牧だが、五男のカズートだけは馬専門で、経営にはほとんど関わっていないか

つたはずだった。しかし、十八歳になつてついに本来の一族の仕事についたのだらう。カズートの首にあるのは幾重にも折られた絹のスクーフで、目的は風よけや防寒などではなく装飾であることは明らかだった。

リウが知っていた以前の彼からは想像もつかない姿だったが、意外にじっくり似合っている。そんな彼からリウは目をそらせる。

「そつちこそ、商談？」

「ああ、売ってきた。去年の白天馬」

「へえ」

一瞬喉をつまらせた自分を悟られたくなくて、リウはいつも以上に低い声を出した。

大天馬競 で五位までに入った馬たちには、金・銀・青・赤・白の天馬の称号が贈られる。称号馬はその牧の誇りであり、取引されるのはもっぱらその血をひいた仔馬だが、まれに称号馬が売られるときには俗に「王冠も買えるほど」と言われる高値がつく。

「去年のイシャーマの馬は、白だったっけ」

「最低でも青は獲れたはずだって、親父はくやしがつてたけどな。

今年は大丈夫だろうから、もう白は要らないんだとさ」

リウは震えるか裏返るかしような声を無理やり押さえつけた。

「そんな大事なお使いをまかされるなんて、少しはイシャーマの間ぼくなつたんだ」

「まあ、な」

「昔なじみとしては、おめでとつくらい言つといてあげるよ。それじゃあね」

リウは軽く帽子に手をかけると、バルメルトウの手綱を引いて馬車から離れようとした。

「待てよ」

カズートが窓から身を乗り出した。

「その格好じゃ、どうせろくな宿に泊まらないんだろ。ちよつどい
いから一緒に来いよ」

「遠慮しとく。気詰まり」

「そんな柄かよ。誘ったんだし、おごるぞ」

カズートの口ぶりはあくまでもさりげなかったが、自分のからっぽの財布を見透かされた気がして、リウの声は少しだけ硬くなった。「借りを作るつもりはないよ。いいってば」

「昔なじみだろ。久しぶりにうちの馬の話、聞きたくないか？」

悟られないよう、リウはわずかに唇を噛む。以前は単純な好奇心でカズートの話を聞いたが、いまはもつと切実な理由がある。どうやったら 天馬競 に勝つ馬を育てられるのか、参考になる話があるかもしれない。わたしがしっかりしていればいいんだ、とリウは自分に言い聞かせた。

「……それは聞きたい。だけどご飯もいらないし、眠るのも馬房でいいからね！」

カズートが町に先行させた牧童にとらせていたのは、最上級の宿だった。リウには見当もつかない宿代は厩舎にも反映されているようで、ゆつたりと広く、清潔に乾き、替藁もふんだんにある上に、厩舎担当の者もいる。

とはいえ、カズートの連れのつもりはないリウは、担当者にまかせるつもりもなかった。

「どこまで意地っ張りなんだよ」

馬房の入口の柱にもたれて腕組みをするカズートをちらりと見て、リウはすぐにバルメルトウの足もとの藁を整える作業に戻った。

「お金がないんだから当然のこと。最初に言ったよ。ご飯はいらない、馬房で眠るって」

「匂いがつくぞ」

「牧の娘に、いまさら」

「踏んづけられるぞ」

「バルムはそんなことしないよ」

「それは馬のほうが気をつかってるってことだろうが。かわいいそう

だろ」

リウは立ち上がって馬房から出、カズートを軽くにらんだ。

「だったら馬房の外で眠る。それなら文句ないね？」

「ある。そもそも 天馬競 を走った後に厩舎で眠ろうってやつがいるか。疲れてるだろ」

「平気だよ。それに今日は野宿のつもりだったから、屋根と壁があるところで眠れるだけで十分ありがたいよ。イシャーマ牧の話もたくさん聞けたし」

「おれの話は屋根と壁のおまけか？」

カズートの抗議にリウは思わず笑った。

「あ、ごめんごめん。だけど本当に面白かったよ。どんな牝にどんな牡をかけあわせるといい仔が産まれるかとか、冬も雪の中に出しっぱなしにして鍛えるとか」

「参考になったか？」

「……イシャーマとうちとじゃ、やっぱり規模も馬の質も違いすぎるよ。参考なんて」

「知つとくに越したことはないだろ」

「まあね……白状しちゃうと、売ってきたっていう白天馬は見てみたかったな。どんな馬ならそれくらいになれるのか」

カズートは腕を組み直して、バルメルトウに目をやった。

「さっきの 天馬競 で勝ちを狙ってるって話だけだな。あれ、本気か？」

「ああ もちろん本気だけど？」

「こいつでか」

「もちろん」

口では強気に返したものの、バルメルトウを見るカズートの目にどんな表情が浮かぶか、不安がわきあがる。

彼の馬を見る目を、リウは無視できない。カズートが馬好きであることはよく知っていたし、まして大牧の御曹司だ。その目は、当たり前前に 大天馬競 に出るような駿馬を日々間近に見てきている。

リウは無意識にバルメルトウの首をなでた。

「天馬競 で勝てば、副賞の賞品を売ったお金だけじゃなくて、バルムの種付料も期待できるでしょ。このままじゃ廃業しかないんだもの、最後の勝負に出たってわけ」

馬が思うように売れず、いい牡馬の高い種付料が払えなくなり、ますます仔馬が売れず。ランドルム牧は廃業へと行き着く先細りの道を一直線にたどっている。しかも去年の冬の初めには、牧の低地に水まで嘔き出て、牧草も見込めない。

これしかない、とリウは改めて自分に言い聞かせる。天馬競 で勝ち、大天馬競 も狙える馬だと認められれば、その仔を欲しがる者はきつと出てくる。大天馬競 に関心のない馬飼いななどいなのだから。

バルメルトウは生まれたときから不格好で、リウの父の「また売れない馬か」というため息が、その誕生祝이었다。

馬車や乗用の馬は、なによりも見栄えが重視される。多頭立て馬車に使う馬など、毛色、体格はもちろん、顔や脚先に入る白斑までそろえたがる客がいるくらいだ。

バルメルトウは元気で健康な仔馬だったが、やはり買手がつかなかった。配達馬車用の頑丈な小馬を探していた洗濯業者ですら「すぐに折れそうな脚だ」と顔をしかめた。

しかしリウは、バルメルトウが牧を一日中走りまわっても息切れもしなければ汗もかかないことに気づいていた。先に生まれた仲間たちの誰も、この脚ばかりがひよる長い馬が走り出したら影を踏むことすらできなかった。

大天馬競 に代表されるように、馬の価値を見栄えより脚力に置く世界もある。本来ランドルム牧には縁遠い世界だったが、リウはカズートを通じてその空気を知っていた。

無駄飯食いだとつぶそうとした父との大喧嘩の末、リウはバルメルトウを自分の馬とし、調教をはじめた。ただの乗馬用の調教ではないことに父はすぐに気づき、かぶりを振った。

それまで十日に一度は顔を見せていたカズートがふっとり現われなくなり、風のうわさに南部に行ったと聞いたのは、ちょうどそのころだった。

初めてバルメルトウをじっくり見るカズートの評価を、リウは冷静な顔を作って待った。

「負ける勝負に挑戦したって意味はないぞ」

リウは脚の横で両手を握った。それでもなんとか表情だけは懸命にとりつくろう。

「バルムじゃ勝てないってこと？」

「そうじゃない」

カズートはバルメルトウに声をかけながら柵をくぐり、馬房に入って馬体に手を置いた。

「……やっぱりな。おまえが入れ込むくらいだから、ただの馬じゃないとは思った。骨も筋肉も見かけよりはるかにしっかりしてるし、鼓動も力強い。いい馬だ」

そんな言葉も真つ先の否定の後ではむなしく響くだけだった。リウの声はついとがった。

「でも天馬を狙えるほどじゃないんでしょ」

「忘れてるんじゃないのか。天馬は三頭そろってなるんだぜ」

バルメルトウを優しく叩いて、カズートは振り向いた。

「おまえ、こいつ以外にいるのか？」

「いないけど、でも他の小さい牧の馬とか、助っ人とか」

「そうだな、どこの競技でも必ずうるついでるな。助っ人仕事で謝礼にありつこうってやつらが。たしかにあいつらにだって走る理由はある。謝礼はもちろん、なにかの間違いで勝ったりすれば、あいつらの得にもなるからな。だがな」

「なに？」

「走る気がある、走ることができただけじゃ、勝負までは行けないんだぜ」

カズートは真顔だった。いつものようにリウをからかっているの

ではない。その顔にも声にも、天馬競、そして大天馬競を知っている大牧の人間の重みがある。

視線が勝手にカズートから逃げそうになり、リウはそんな自分にいらだった。

「ん、そうかもね。だけどわたしはその条件でやるしかないんだ。無神経に、人のなけなしの希望までつぶさないでよ」

と笑顔を作って、無理やりに冗談にしよう。

「……無神経で悪かったな」

「いまに始まったことじゃないけどね。人のことは気にしないで、もう部屋に戻りなよ」

カズートはため息をついた。

「部屋ならおまえの分もとってあるんだが、これも無神経ってことになるのか？」

「昔なじみなんだし、わたしの考えそうなことくらいわからない？」

「……借りは作らない、か」

「そういうこと」

「わかったよ」

と言いつつ、馬房を出たカズートはなにげなく下手からなにか投げってきた。

小さな弧を描いて胸にぶつかりそうになったそれを反射的に受け止めて、リウは両手の中におさまった物を見た。

「……鍵？」

「うちの馬車のだ。馬房の横に、夜番用の簡易ベッドがある。もう馬はいないから、いまは空いてる。ここよりはました」

眉をあげたリウが言い返すより早く、カズートが言ってくる。

「空き馬車くらいで貸しだなんて思わないから、これくらいはさせる。意地張って馬房で寝てる大ばかが昔なじみかと思うと、こっちまで寝つきが悪くなる」

「……ん、ありがとう」

「おっ」

カズートは、去年最後にランダルム牧に来たときと同じように、
背中をむけて手をひらひらさせながら厩舎を出て行った。

二 天馬の牧

ランダルフ牧に戻ったリウを迎えたのは、父の皮肉と母のため息だった。天馬競の結果など聞かれもしなかった。

リウも報告はしなかった。バルメルトウを休ませ、それから数日のあいだ、残っていた他の馬たちの世話に集中した。両親にこれ以上苦情を言わせるつもりはなかった。馬房の掃除をし、馬たちの体を拭き、櫛を入れ、ほつたらかしにしたお詫びにたてがみもきれいに梳いて編んでやった。仕上げに金槌と釘も持ち出して、厩舎の屋根の修理もした。

「あー、さすがに疲れた」

リウはバルメルトウの馬房の前に座って去年の干林檎を嚙った。と、顔のすぐ横に黒い鼻面が突き出てくる。

「おまえは疲れなんてとれたよね、バルム」

リウはもぐもぐと物欲しげな口もとをなでてやり、林檎の残りをやった。

「わたしも、カズートのおかげでゆっくり眠ってこられたからよかったよ。そうでなかったら、さすがに戻ってきた最初の日は動けなかったと思うもの。小言を言われる日が一日減ってくれただけでも助かるよね」

リウは喉をのけぞらせて顔を上に向けた。

「……バルム、どうしようか？」

別れ際、カズートはイシャーマ牧に来て天馬を見るよう誘ってくれた。一昨年の青天馬の種付があり、しかも相手は何年も前に牧から初めて出した銀天馬とのことだった。

今日がその日になる。

リウはこれまで一度もイシャーマ牧に行ったことはない。イシャ

「マ牧が作るのは軍や貴族、国王が使う高級馬で、常に 大天馬競での勝利を目指す大牧である。軽量荷馬、せいぜい馬車馬か乗用馬として買われていく程度の馬しか作っていないランドルム牧とは、同じ牧とはいってもまったく違う。たとえ見たところでしようがなかった。」

だが 天馬競 で勝たねば廃業、バルメルトウの命すら危ういまは違う。実際に 大天馬競 に勝利した天馬を見るだけでも、なにかの参考にはなるかもしれない。

「……でもな」

牧童同然の服に綿の風防布。以前は実家をまったく感じさせなかったカズートの、いまの絹スカーフ姿がちらついた。

「気が進まないんだよね……そこまでカズートに甘えていいのかなって思うし、それに」

天馬競 に実際に出るようになって、リウは改めて勝つことの難しさを知った。だからこそ、やすやすと勝利を手に行っているイシヤーマ牧とその馬を見ることは

「……怖い、んだ」

リウはため息とともに自分の感情を認めた。

「そんなことじゃいけないって、わかってる、わかっているよ。だけど、わたしじゃ絶対に無理なんだって思い知らされることになっちゃったらって思うと」

これまで牧で生きてきたリウは、自分の世界を守る手段を 天馬競 以外に持っていない。そのわずかな可能性すらつぶされてしまつては、抗う気力すら失ってしまう。

そのとき、リウはランドルム牧の廃業を呆然と眺めることしかできなくなる。柔らかかにうねる緑の稜線、北の丘の上の二本の木、草の間を流れる水路、そうした風景の中を駆ける馬たちの姿。これまでリウの世界だったものが失われていくさまを。

バルメルトウが、リウの胡桃色の髪に鼻先をくっつけ、前脚で地面をかいた。

「なに、遊びに行きたいの？　じゃあちよつとあたりを回ってこようか」

リウは立ち上がり、人の心が読めるかのような愛馬の頬をなでた。「……そうだよ、もやもやしてるときは、走ってくるのが一番だよね！」

バルメルトウを引き出して馬具をつけていると、一頭立ての小型馬車が道をやってきた。

ひとりだけ乗っている御者もリウに気がついた。彼は馬の尻を打って速度をあげ、そして驚いて目を丸くしたりリウの前で止まった。

「カズート。どうしたの？」

やはり絹のスカーフをつけていたカズートは、あきれ顔でリウを見下ろした。

「どうしたのって、ごあいさつだな。迎えに来てやったんだよ。見たいんだろ、天馬」

「そんな、いいよ　でも、なんで馬車で？　馬車なんて遅すぎるって嫌ってたくせに」

「うちのやつらにバルメルトウを見せたくなくて来ないのかと思っただんだ」

「バルムを？」

「うちも今度のフラシコの　天馬競　に出るって言っただろ。ここから近いし、おまえも出場を考えてんのかと思ってさ」

そもそも出られるかどうかもわからない馬を、イシャーマ牧の間が意識するはずがない。リウ自身もまったくそんなことなど思い浮かばなかった。が、　天馬競　で勝つためにはまずこういう弱気がいけないのだと、勢い込んでうなずいてみせる。

「そう！　競争相手だもんね」

カズートはぶっきらぼうにうなずいた。

「じゃああいつから馬具をはずしてやれよ。帰りも送ってやるから」

「え、ちよつと待って！　ありがたいけど、本当にいいってば。午後も仕事があるし」

「だったらおれからも頼んでやる」

カズートはひらりと馬車から飛び降りると、リウの家へと大股に歩き出した。

「あ、カズート！」

運悪くちょうど父が家から出てきた。カズートを見た途端、その眉が跳ね上がる。

「こ、これはこれは！ 久しぶり いや、お久しぶりですな！」

リウは思いきり顔をそむけた。けれども一瞬遅く、ねばっこいような笑顔になって両腕を広げる父の姿は見えてしまった。

「今日は馬車ですか、優雅ですな。さ、どうぞどうぞ、むさくるしい家ですが」

友好的な態度も親切な言葉も、これまでにはなかったものだ。以前の父は大牧の御曹司のカズートが小さな牧をばかにしに来ていると受け止めている節があり、彼を見かけると急いで牧の奥へと逃げて、決して顔を合わせないようにしていた。

「さあ、どうぞ。北部に戻ってきたのでしたら、また前のように遊びに来てください」

やはり父もリウと同じように、本当は廃業などしたくないのかも知れない。そのために努力するつもりもあるのかもしれない。だがそれはリウが絶対に認められない努力だった。

「父さん、やめてよ！」

真っ赤になった顔はそむけたまま、リウは叫んだ。

のぼった血が、父への怒りのためか、あるいはカズートへの恥ずかしさのためかはわからない。ともかくリウはこの場から逃げ出したい気分でいっぱいだった。カズートが振り向く気配を感じても、リウはまだ顔をそちらに向けられないでいた。

「行こう、カズート！」

リウはバルメルトウに飛び乗ると、馬首を道へとめぐるせた。腹を軽く蹴ると、忠実なリウの馬は勢いよく走り出した。

なだらかにうねる大地を絨毯のような青草が覆い、そのところどころにこんもりと林がうずくまっている。そんな北部丘陵地帯の景色は、ランダルム牧と変わらない。

だが、

「……これが、牧なんだ……」

バルメルトウの鞍上で、リウは呆然とつぶやいた。

勢いで来てしまったイシャーマ牧は、ひたすら広がった。はるか地平の先までがその敷地だという。家や畑、柵といった人工物がなにもなく、一見したところ無人の野としか思えない。しかし牧草は青々と茂り、それでいて白土を露わにした道はきちんと整えられていて、人の手が加わっていることは間違いなかった。

「牧なのに、馬がない……」

隣の馬車のカズートがあっさり応える。

「ここには若馬が二〇頭くらいいるだけだから、あの林の影になつてるんじゃないか」

「あんたんちの馬って、何頭いるの？」

「さあ、正確なところはな。五〇〇頭よりはいるか。一〇〇〇頭まではいかないにしても」

来なければよかった、という思いがむくりと頭をもたげた。リウはありつたけの意地をかきあつめて、それを押さえつけた。

「ため息も出ないよ。うちとは違いすぎて」

と、カズートに笑ってみせたが、ちよつとばかり口端がひきつった気がした。

「まだここは入口だ。あの丘を越えるぞ」

丘を越えた下り坂の先には、柵で仕切られたいくつかの牧と厩舎があり、近くに長屋と白木の家が並んでいた。丘の上からはおもちゃの家のように見えたそれらは、近づいてみると近くの町の公会堂よりも堂々とリウの前にそびえ立っていた。

馬車を止めたカズートに、ブーツを履いた少年がすぐさま駆け寄ってきた。

「お帰りなさいませ、カズート若さま」

カズートはじろりと横目にリウを見た。

そのまなざしが投げかける無音の言葉はわかっている。リウは大真面目な顔で答えた。

「ご心配なく、からかいませんとも、カズート若さま。だって当たり前のことじゃない、カズート若さまが自分の家の人にカズート若さまって呼ばれるのは」

「……やめる」

カズートはむすつとしたまま、少年に馬車を片付けておくように言いつけた。

「あと、こっちの馬の世話もだ。気をつかってやれよ」

「かしこまりました、カズート若さま！」

少年にバルメルトウの手綱を預け、リウはさっさと歩き出していたカズートに並んだ。

カズートはリウより頭ひとつ近く背が高い。しかも手脚の長い体つきで、歩幅も広く、速い。リウは少し急ぎ足になる。ほとんど背が変わらなかつた昔が遠く思い出された。

「ちゃんと呼んでもらえてるってことは、ごくつぶしの五男坊ってわけでもないんだね」

「そんなふうに言うのはおまえだけだって、ずっと言ってんだろ」

「だって、しょっちゅううちに来てたから。家にいづらいのかわつて心配してたんだよ　ちょっぴりね」

カズートが眉をあげた。

「そんな気持ちがちよっぴりでもあつたなんて驚きだな。人を見ればごくつぶしだの暇人だの目つきが悪いだの、好き勝手言ってくれてたやつが」

「変わり者だの馬ばかだの男おんなだの、好き勝手言ってくれてたのはそっちも同じ。それに、残りは本当のことじゃない。うちで暇つぶしてたのも、あんたの目つきが悪いのも」

リウは行く手を見ながら答える。

「だから、ちよっぴり心配してたのも本当。一年前いつもどおりに帰っておいて、それつきり急に来なくなっちゃったし。もしかして、ついに家を追い出されたのかもって思ってる」

「いろいろあつて長引いたんだよ」

「なに？ 商談？」

「だからいろいろだよ」

「そう……まあ追い出されてなくてよかったよ。あ、種付相手つてあの子？」

カズートにさらに尋ねることはせず、リウは行く手の柵の近くにいる馬に駆け寄った。

立派な馬格の黄褐色の馬で、目の前をひらひら舞っている蝶に興味があるのか、じっとしたまま鼻先だけを伸ばしている。体格とは裏腹に、見るからにのんきそうな馬だった。

「馬違いだ。大体、そいつは牝だぞ」

「だね。ふふ、でもかわいい子だな。あんな変な顔しちゃって」

「面白そうなやつだよ。おれだったらもらつとくんだが」

「誰かが売りに来た馬なの？」

「こいつの母馬に、四番目の兄貴の持ち馬をつけたんだ。牝だったらむこうの牧に残して、牝だったら買い上げる約束だったんだが、兄貴じゃたぶん　まあいい、行くぞ」

「ん」

あつ、という小さな声がした。この馬を連れに来たらしい。引き綱を手にした褐色の髪の青年が、リウを見つめている。

そんな青年を見たリウも表情を消した。

「……なんだ？」

カズートが目を細めて聞いた。

リウはぎこちなく笑った。

「ん、知り合い。こんなところで会うと思ってなかったから。久しぶり、シャルス」

「ああ、久しぶりだね、リウ」

ぎこちない表情は、相手も変わらなかつた。

「……どうするんだ？ 旧交をあたためたいなら、そうしてもらってかまわないぜ」

カズートは歩き出した。

「天馬を見に行くよ、もちろん」

リウはあわてて後を追った。

それでも自分の背中を見つめる青年の視線は、痛いほどわかってきた。

青天馬となつた牝馬は美しかった。揺れるたてがみは透きとおるようで、牝馬らしい繊細さと天馬の称号にふさわしい力強さが、輝く馬体に違和感なく溶け合っていた。

「……この子はお嬢さまだね。この大牧の大事なお嬢さま」

リウはため息をついた。

「それに、すごい美人。圧倒されそう」

カズートがやりとする。

「ま、たしかにこいつには手をかけてるからな。朝のおめかしの時間なんか、どうせ顔を洗って終わりのおまえより絶対長いぜ」

「言い返す気もしないよ。専任の牧童がいるの？」

「こいつにかかりつきりになつてるのがひとり、他の馬も一緒に見る補佐が三人かな」

「はー……もうお姫さまだね」

「今回のがうまくついたら、本物のお姫さま行きだ」

「王様にあげるの？」

「いや、南部の伯爵だ。四番目の兄貴がその姫と婚約してるんだ」
雲の上の世界を垣間見た気がして、リウはまたため息をついた。

柵の周囲に男たちが集まってきた。皆一様にブーツを履いているが、その服装はさまざまで、磨き上げた新品から乾いた馬糞がこびりついた古靴まで、ブーツもいろいろあった。

その中心にいた恰幅のいい若い男が、こちらを見た。

「なんだ、カズート。出かけたんじゃなかったのかい」
ひとりだけ明らかに金額の違う身なりだった。

「こいつを迎えに行つてたんだよ」

男の顔がリウに向いた。無邪気さを装った鋭い目が、全身を露骨に眺めた。

無言の疑問に答えようと、リウはあいさつした。

「はじめまして。ランドルム牧のリウです」

「ああ！ カズートの友達の、あの」

男はわざとらしい声をあげた。

「まったくおまえは、悪趣味な上に考えなしなやつだな、カズート。仮にも若い女性に馬の種付を見せるなんて信じられないよ」

「見せるのは天馬のほうだ。どうせ奥の牧には入れてくれないだろ、ダールグ兄貴は」

「当たり前じゃないか、部外者なんか入れてなにかあつたらどうするんだ。これは僕の婚約者への大事な贈り物なんだぞ」

「やっぱり、とリウは内心納得する。

南部の伯爵姫と婚約したというカズートの兄だった。しかし弟と似ていると言えるのは上背と黒髪くらいで、同じ切れ長の目もとも雰囲気がつたく違う。

「ふうん、だから種付で出してきたところをねらったのか。友達に天馬を見せたいなら、こそこそ人の隙をうかがわないで、堂々自分で勝ち取つてからにしたらどうなんだい」

「それじゃ遅いんだよ。こいつが出るのは、今年の 天馬競 だからな」

「この子が 天馬競 だつて!？」

ダールグは芝居がかった仕草でリウを真つ向から指さした。

「ああわかった、思い出作りに出るんだろ。まさかきみ、勝てると思つてないよね？」

「……勝つつもりですけど」

「え、なんだつて？ 聞こえなかったよ」

だから、トリウはもつと大きな声を出そうと息を吸いこむ。

と、カズートが割って入った。

「いいだろ、人のことはどうだって。ダールグ兄貴は自分の仕事を
してるよ」

「おまえの友達だと思って、親切で言っただけであげてるんだよ。天馬
競 に女が出たってただの無駄じゃないか。完走できたらお慰み、
けがをしないうちにやめておくほうがいいよ」

「完走なら、こいつはもうしてるぜ」

「なんてことだ、経験があるのかい！ カズート、馬好きな友達を
絶望の海に突き落としたいのなら、幸運がまだついてくれてい
るいまのうちに、やめさせておかないといけないよ。そんなことは
おまえにはよくわかっていと思うけどね」

するとカズートは口をぐつと引き結んだ。眉間が狭まり、細めら
れた目がきつくなった。

「ダールグ若さま。準備ができました」
年配の牧童がひかえめに声をかけてきた。

わかったというように牧童に指を立ててみせ、ダールグは薄く笑
った。

「まあ、こうして来てしまったんだから、見ていけばいいさ。どう
ぞごゆつくり。おまえも今年の参考にするといいよ、カズート」

そう言い残して、彼は待っている牧童たちのほうへと歩いていっ
た。

仲のいい兄弟には到底思えなかった。リウはカズートの横顔をう
かがった。

「……もしかして、無理させちゃった？」

「気にしなくていい。あんなことを言っちゃいるが、実際は兄貴の
持ち馬ってわけじゃない。兄貴はただ、あの馬の管理を一昨年から
まかされてるだけだ」

「でも、ごめん……天馬を見たいなんて、変なこと言っちゃって」
「だから気にしなくていい。ほら、来たぞ」

芦毛の銀天馬が連れてこられた。勝ち得た称号にふさわしく、毛色は渋い銀灰色となっている。肉付きのいい勇壮な馬体は、たくましさそのものといった様子だった。

牝馬の尻尾が手際よくくくられ、当て馬が入れられ、そして種付が始まった。

牧童たちの声と馬の荒い呼吸が飛び交う激しい行為を、リウはぼんやり眺めた。

その隣で、カズートはそわそわとあちこちを見やったり、指で柵を叩いたりしていた。

「あー、そろそろ行くか？」

「そうだね、もう終わりそうだし」

リウはぼんやりしたまま答えた。

「当て馬にくすぐられて女の子はすっかりその気だし、男の子も種付け上手みたいだもんね。あ、ほら、終わった。ほんと上手。毛も銀色で、男の子っていうより素敵なおじさまって感じかな。女の扱いはなんて慣れきってるっていうか」

「……あのな。なにか言う前にもう少し自分の年と性別を考えると」

「牧の娘になに言ってるんの。種付くらい」

リウは柵から離れ、ため息をついた。

「反応悪いな。お気に召さなかったのか？」

「まさか、そんなこと」

リウは振り返り、牧童たちを従えるようにして奥の牧へと帰っていく銀天馬を見送った。

「やっぱりすごいね、天馬って。天馬競を走ってたところは体もしぼってあって、もっと精悍な感じだったんだろうし」

手を組んで伸びをする。そのまま見上げた空が青い。

「あんな馬と競らなきゃいけないんだなって思ったら、さすがに気が遠くなってるさ」

リウはじつと空を見る。吸いこまれそうな青、そして風に流れる雲の白。そのあいだに本物の天馬の姿を見ることができたら、銀天

馬の面影をぬぐえるかもしれない。このままバルメルトウのところへ戻ったらなにを考えてしまうのか、リウは自分で自分が怖くなる。「まだ夕暮れまで余裕はあるな。うちでひと息入れてくか？」

カズートの声がした。リウは親指で家のほうを示す彼の姿を見たように思った。

「ん……そうだね、じゃちよつとだけ」

瞼の裏に焼きついてしまった銀天馬の姿を少しでも薄らげたくて、リウはありがたく招待を受けることにした。

通された白木壁の家の居間は、ここと隣の続き間だけでリウの家ほどもありそうだった。

リウはおそろおそろ華奢な猫足のソファに座った。

カズートはむかいの寝椅子に無造作に腰を下ろし、メイドの少女になにやら言いつけた。

壁の飾り棚には 天馬競 を完走した者に与えられるリボンが飾られている。そのすべてに金系銀系が見える。

しかし、リウの目はすぐに、続き間に置かれたもつと大きな飾り棚に吸い寄せられた。ここからでは中は見えないが見当はつく。

「ああ、あれな」

カズートが身軽に立ち上がる。アーチの下を通って続き間に行くのと、リウを手招いた。

リウは呼ばれた犬のような素直さで従った。

「わ、やっぱり！」

もはやリボンなどという言葉では物足りなかった。中央に宝石が飾られた金銀の布は 大天馬競 完走の勲章だった。

「どうせならこっちだろ」

カズートが示した別の飾り棚には、両手で持てそうなくらいの、馬の青銅像が並べて置いてある。像の首には色あざやかな細い布がかかっている。色は四種類、銀、青、赤、白。

「うわあ……これって 大天馬競 の」

「ああ」

興奮でかえってぼんやりしながら、それでもリウは頭の一部で冷静に計算する。

天馬競 のリボンの数より 大天馬競 のリボンは少なく、この像はさらに少ない。イシャーマ牧のような大牧ですら、楽々と勝利にたどりつけているわけではないのだ。そのことは、それぞれの勝利の証の数がはっきりと物語っている。

しかし、そうした事実は少しも気を安らがせてくれない。それに比べて、と思考はついそこにたどり着く。馬はバルメルトウ一頭だけ、組む相手もない自分が勝利をつかむなど、本当にできるのだろうか。

昔なじみを視界の端に感じながら、リウは飾り棚を見つめたまま口をひらく。

「わたし、天馬競 で勝ちたいんだ。自分でも無謀だつてわかってる。でも、それでも勝たなきゃいけないんだ。どうすれば少しでも勝ちに近づけるか、打つ手はあるかな？」

短い、けれども深い沈黙のあと、やっとカズートの声が出た。

「おまえは、組を作るだけの馬も人もそろえてない。勝つための一番最初の条件もまだ満たしてない。打つ手もなにも、それ以前だ」
視線はそのままに、リウは唇を噛んだ。覚悟はしていても、はっきりずばりと言われることは、やはり心にこたえた。胸のあたりがすつつと冷え、逆に頭は熱くなる。

「……やっぱり、そこからか」

「ああ。まずは馬、それからちゃんとした三人を集めないとな」
「人も？」

「天馬競 の始まりは、騎士たちへの試練だ。馬と人が一体となって乗り越え、自らの能力を証す挑戦だった。いまだつて、ただ馬につかまっていれば勝てるってものじゃない。自分の馬をよく知った、勝つ気のある乗手が要る。おまえ、心当たりがあるのか？」

リウは胸もとにこぶしをあてて、さらに強く握り込んだ。

「…… 大天馬競 は、秋だから」

かつてとは違い、現在の 天馬競 は各地の町が主催しており、月二回ほどある。理屈では 大天馬競 まであと一〇回は出走できる。リウはあえて楽観的に考える。

「だから、これからでもちゃんとした組を作れたら」

「つてちよつと待て。おまえ、ただ 天馬競 で勝ちたいだけじゃないのかよ？」

「……ん、そのつもりだったよ。だけどいまは 大天馬競 に出たい」

リウはさびついた扉のようにのろのろとカズートに顔をむけた。

「さつき、銀天馬を見せてもらって思ったんだ。あれだけ見栄えのいい馬なら 天馬競 の勝利だけでも種付けしたがる人はいるかもしれない。でもバルムは違う。だから、そこらのきれいな馬より強い心臓と脚を持った馬なんだって、もつとはつきりわからせないと動かないカズートの表情に、かえって救われた気がした。だからリウはさらに言った。

「それに、あの子はこのイシャーマ牧の馬だけど、バルムは 天馬競 にだって出たことのないランドルム牧の馬なんだよ。どこの牧の馬か、たつたそれだけのことで、ばかにする人はばかにする。いま言ったじゃない、能力を証す挑戦だって。バルムには誰にでもわかる証が要る。それがないと、バルムも、それにうちの牧も」

そのとき、メイドが戻ってきた。

「え、えつと、そちらにお運びするほうがいいですか？」

続き間にいるふたりの姿に、困ったように立ち止まっている。

「ああ、そこに置いといてくれ」

メイドの少女は危なっかしい手つきで銀盆をテーブルに置き、落ち着かない様子でエプロンの前で両手を組み合わせた。

「あ、あの、他にご用はございませんか」

「いや」

「あ、あの、でも」

あどけない頬がくしゃりとゆがむ。

「 やっぱりカズート若さまは怒ってらっしやるんですね！」
「 は？」

「あたしが今朝、思いっきりスープをひっかけちゃったから！でもあたし、そんなことなんてする気はなくなつて、ただうっかり指がすべつちやつただけで……はつきりお叱りになってください、そうやって黙っていつまでも怒られてるほうが怖いです！」

いつのまにか、組み合わせた両手が胸の前まであがっている。

疲れたような吐息が聞こえた。リウはちらりと昔なじみを見上げ、小さく笑った。

「怒ってはないみたいだよ？」

「えっ？」

メイドはリウとカズートを見比べた。

「勤めだしたの、最近？ あのね、こいつ、目つきが悪くて見た目は割と怖いけど、中身は意外とそうでもないから」

リウはカズートの脇腹を肘でつついた。

「自覚して気をつけなよ。黙ってたら怒ってるみたいなんだからね、あんたの場合」

「ほつとけ。よけいなお世話だ」

「わ、どの口でそんなこと！ 無駄に元気だとか狭い家は落ち着くとか、いつだってよけいなこと言つて喧嘩売ってきたくせに」

「おまえがいちいち曲解してんだよ。大体それを言つたら、いきなり初対面で強盗扱いした上に、人の目つきがどうだこうだと喧嘩を高値で売ってきたのはおまえだろ」

「もしかして本当に自覚ないの？ やつてきたのがどこの強盗かと思つたつて無理ないよ」

「自覚もなにも、あのときのおれはたったの八歳だぞ？」

「この目つきの悪さなら子供だつてわからないつて思つたの」

「ぼんぼんと言ひ合うリウとカズートのやりとりを、メイドはぼんんと口をあけて眺めていた。

「あ、ごめんね。だけどわかった？ 本当はこんな感じのやつなんだ。だからそんなに怖がらないでいてやって。カズート、こっそり傷ついちゃうから」

「あ、は、はいっ！」

メイドは勢いよくうなずいて出ていった。

「……最後まで滅茶苦茶なでまかせを吹きこむな」

「でまかせじゃないし。大体、家の人とうまくやれないで仕事なんかできないでしょ」

「なんだそれ」

「……だから、気をつかってあげたんだよ！」

「よせよ、柄にもない」

「そんなこと言って。カズートだって柄にもなく、わたしに気がつかってくれてるじゃない。こんなふうに呼んで天馬を見せてくれたり」

「なりゆきだ」

「照れない照れない。大丈夫だよ、わかってる。なんかそうなるよね、昔なじみって。久しぶりに会ったら、ちょっと親切にしてみたくなったりして」

カズートは居間に戻ると、メイドが持ってきたカップを取り上げ、立ったまますすった。

「お行儀悪いよー、若さま」

リウも居間のソファに戻った。メイドが持ってきてくれたのはコーヒーだった。受け皿ごとカップを持ち上げると、こうばしい香りがリウの鼻先をくすぐった。

「うーん、これこれ」

リウが買い物をするジヨスリーの町の店には、コーヒー豆は二週に一度ほどしか入らない。リウはこの香りが好きだったが、なにしろ品薄な上に高額で滅多に買えなかった。

「コーヒーって、淹れるときもいいよね。ネルにお湯が入ったときに、ふわんて香りが」

「あのな」

だしぬけにカズートは話を遮った。その声にはひんやりしたなにかが忍んでいた。

「……な、なに？」

リウは思わずカップを置いた。

カズートは自分のカップをにらむように見つめている。

「たしかにおれは、おまえに天馬を見せたかった。自分なりの親切のつもりでもあった。それでもおまえは、おれのしたことが親切だとは思わないだろうよ」

「どうして。そんなことないよ。とても親切にしてもらえたって思ってる」

「おれは、おまえがやめるって言い出さないかと期待したんだ」

「え？」

「なのにおまえは、かえって 大天馬競 まで目指そうとしはじめた。おれも悪かった。下手な小細工なんてしないで、最初からはつきり言えばよかったんだ」

「ちよつと待っ」

言い終わる前に、カズートの声のリウの言葉を冷たく消す。

「おまえが 天馬競 に勝つのは無理だ」

リウは反射的に立ち上がった。

カズートがカップから視線をあげた。

「断言できる。競技場をうるついでるような助っ人に 天馬競 を一緒に勝てるやつはいない。小金目当てでなければ、他の組が全部棄権する可能性もないじゃないと考えるような能天気だけだ。牧を続けたいなら、もっと有意義な金の使い方をしろ」

ひと言ひと言が胸を切り刻む。リウはぐつと唇を噛みしめてカズートをにらみつける。言葉よりもなお鋭いその眼光に負けないよう、自分も懸命に目に力を込めて。

「そんなの、もうさんざん考えたよ。どうしたら牧を続けられるか、眠れなくなるくらいいろいろなことを考えたんだよ。だから教えてよ。」

天馬競 以外、どんな手があるの？」

カズートはむすつとした顔のまま応えない。

「ほら、やっぱり思いつけないじゃない」

リウはうつすらと笑う。

「無茶なのはわかってる。だけどこのままじゃうちの牧は、どうしたって廃業なんだもの。馬を売って、小さな農場に作り替えてやってくしかないんだもの」

「そうしたっていいだろ。よければ馬はおれが買う。ここなら見に来れるだろ」

リウはなけなしの笑みすら引つ込めた。

「天馬を見せてくれてありがとう、感謝する。だけど借りなんか作りたくないって、あと何回言えればいい？」

カズートはすばやく一瞬目をつぶった。まばたきのようなその仕草のあと、彼の目はますます鋭さを増した。

「わかった、じゃあこれも言う。おれにはおまえが思ってるよりまだ金があるんだ。親父や兄貴に頼まなくても、おまえのところの馬くらい、全部おれ個人の判断で動かせる金だけで引き取れる。こんなのは貸してもなんでもない」

「……この前、馬車に寝かせてくれたのと同じってわけ」

「そうだ。考えてみる、仔犬を拾ったはいいが、親に飼えないと言われた借家の子がいるとするだろ。そしておまえには牧の敷地と家がある。その子から仔犬をもらってやって、牧に遊びに来ればいいと言ってやって、それで貸しがあると思うか？」

「……わたしは無力な子供ってわけ」

「この場合はな」

「そうだね、子供ならどうしようって泣いて誰かの助けを待っただけかもね。だけどわたしは子供じゃないよ。そんなのはいやだ。たとえだめでも、最後まで自分でなんとかしたい」

「心意気は見上げたもんだ。だがな、本当にそれでいいのか？」

「」

「たとえだめでも、って言ったな。だめなんだよ、それじゃ。やるだけやってだめなら満足なのか？ 無駄に金をつかうことでバルメルトウまで手放すことになっても、それで」

カズートは容赦ない。リウは視線をそらせたが、それでも言葉は終わってくれない。

「わかるつもりではいる。バルメルトウがおれの馬なら、きっと同じように感じたと思う」

びくりとリウの肩がひきつる。

「あいつなら天馬になれるかもしれない。そう思って、どれだけ無理をしても挑戦させたくなっただろうな。あいつさえ走ればなんとかなるなんて、甘ったるい奇跡を信じて」

「違う！」

リウは思わず声をあげる。

「それに、夢を見てるあいだは、他のことは見なくてすむ」

「ちが」

「当たり前だよな。自分の馬が天馬になるのは、馬飼いにあって最高の夢だ」

リウはうつむき、唇を噛む。

「だがな、夢を見てるだけじゃ、絶対に天馬は獲れない。いまだつておれに、組む馬や人を貸すよう頼み込む覚悟もないじゃないか」
カズートがカップを置いた音がやけに響く。

「……頼めるわけじゃないじゃない。だって今年もイシャーマ牧は出るんでしょ」

「出る。今年の組はおれが管理することになってる」

カズートも 天馬競 に出る リウの心はさらに冷える。

「だったらなおさら、そんなこと頼めっこない」

「じゃあ勝てないな」

半ばは抗い、半ばは祈るような気持ちで、リウは顔をあげる。

「……昔なじみでも、こういう気持ちまではわかってもらえないんだね」

カズートは見下ろすようにリウを見つめ返した。

「おれに借りを作りたくないって、おまえの気持ちはわかるつもりだ。ただ、そんな綺麗事じゃ勝てない。あれもこれもと欲張ることはできない。そういう話だ」

目つきが悪いとさんざんからかってきたその顔に、リウは初めてかすかな恐怖を感じた。

送っていくというカズートの申し出を、リウは断わった。それで彼はついてきた。

「ほんと、いいから。大丈夫だから」

リウは早足に歩きながら、もう何度目かの断わりを口にした。自然と彼から目をそらせてしまう自分の弱さが情けなかった。

「もう日も落ちかけてるのに、そういうわけに行くか。いいから送らせろ」

リウの精いっぱい早足にも、カズートは楽々についてくる。

「貸しがどうの借りがどうのって、みみっちいことを気にするようになったよな。どうせなら種馬も一緒に連れてこいって、前は平気で言っただくせに」

そんなふたりの違いがいらだたく、また少し悲しくて、リウはさらに足を速める。

「一〇歳やそこらの子供ならまだしも、この年でそんなばかなこと言ってられないよ」

「ちゃんとした年だっていうなら、送らせるのも礼儀だろ」

「牧の娘ならひとりで帰るのなんて普通だよ。迷子を捜しに行ったりとかするし」

「それは牧の中での話だろうが」

ふりきれないと悟って、リウは足を止めた。目をそむけたがる自分自身に見えない鞭を入れ、まっすぐにカズートを見上げる。

「カズートも変わったよね。この一年、どんなお姫さまたちとつきあってたの？」

思いがけず、カズートはわずかにひるんだ。

「そうだよ、ずっと南部へ行ってたんだもんね。ひらひらの傘をさしたお姫さまたちばかりと話してて、このあたりの娘がどんなだったか、忘れちゃったんじゃない？」

「……近所だっただけでおまえとひとくりにされたら、文句言うやつが出てくるぞ」

「とにかく、わたしは誰かについてきてもらわなきゃ道も歩けないようなお姫さまじゃないってこと。バルムだっているんだし」

リウは再び歩き出した。

その先に、傾いてきた日に影を伸ばして、黄褐色の馬を引いた青年がいた。

リウの足はまた止まった。

追いかけてきたカズートも立ち止まった。ちらりとリウを見やると、青年に声をかけた。

「シャルス、どうした？」

青年はリウを見つめてからカズートに視線を移し、淡く微笑んだ。

「こんな間抜けた馬はいらないそうです」

「……そうか、残念だな。ダールグ兄貴は好みがやかましいんだ。

おれだっいたらこの馬は買うんだが。でも口出しするなって、兄貴がまたうるさいか……」

「気持ちだけで十分です。それに、たしかにユーリシスは間抜けたところのある馬ですから。人も仲間も馬房の壁も一度も蹴ったことがないのはまだしも、隣の馬に横から飼葉をとられても黙って見ているようなやつです。なにより脚が遅くて」

「そうなのか？ そいつはキラムの仔だろ？」

「ダールグさんの言うとおり、うちの牧の母馬の血が悪かったんでしょっ」

シャルスはさらに淡く微笑んだ。

「もう帰るのか？」

「一目できっぱり断われましたから。粘ってみても無駄でしょう」

「じゃあ、悪いがこいつをランダルム牧まで送って行ってやっ
てくれないか」

シャルスはゆっくりりまばたき、リウを見た。

リウはかっとなって声を高くした。

「いって何度も言ってるじゃない！」

「知り合いなんだから。それにノア牧なら途中まで道は一緒だ。いい
か？」

カズートが最後の言葉をかけた相手は、明らかにリウではなくて
シャルスだった。

「は、はあ……」

「だったらまかせた。頼む」

言うなりカズートはくるりときびすを返して、さっさと戻ってい
ってしまった。

その背を見送ったりリウとシャルスの視線が、互いにためらいなが
ら、それでもようやくぶつかった。

「行こうか、リウ」

シャルスが言った。

三 挑戦の意味

「収穫祭は半年、いや五か月前か……なんだかもっと昔みたいな気がするね」

目の前で揺れるバルメルトウのたてがみを見つめながら、リウは隣の馬車からのシャルスの声を聞いていた。

「きみがすっかり変わったからかな。収穫祭で仔馬のしっぽみたいな髪で踊っていたきみとは、別人みたいだ」

「シャルスは変わらないね。仔馬のしっぽって言い方もそのまんま」
「はは。たしかに僕は、褒め言葉もうまくないままだ」

少しばかり沈黙があった。

「……やっぱり 天馬競 に出ているんだそうだね。僕がいなくて
も」

「それしかないもの」

同地方同業のノア牧に息子がいるという話くらいは、リウも聞き知ってはいた。そして去年の秋のタールーズの収穫祭で、リウは初めて彼に会った。

収穫祭では男女が組むダンスがある。その年リウはシャルスと同じ組になった。言葉を交わし、ともに踊り、また言葉を交わし。ダンスの後には草競馬に出るといふ彼の応援にリウは行き、声援を送った。シャルスは見事に勝ち、リウに手を振った。

横顔に彼の視線を感じる。

「そうかな。今日きみにまた会えて、とても驚いたよ」

「驚いたのはこっちも。まさか会うなんて思わなかったもの。イシヤーマ牧の馬をつけてたなんて話、全然しなかったじゃない」

「有名だったからね。ランドルム牧にイシヤーマの五男が出入りしていたって話は」

リウは視線は動かさずにまばたいた。

「……有名、なんだ」

「タールーズどころか北部一、二の大牧と、失礼だけれど農場とたいては変わらない小さな牧だよ。うわさにならないわけがない。知らないのはきみとカズートさんくらいだよ。実際にきみと話してみても、所詮うわさかと思っただけだけれど、そんなことはなかったみたいだね」

リウは眉間に陰をただよわせて、シャルスに顔を向ける。

「どういう意味？」

今度はシャルスのほうが行く手を向いて、リウに整った横顔を見せている。

「去年のきみは、イシャーマ牧に行ったことはないと言っていたよ」

「そう、今日が初めて。わたしが 天馬競 に出てるって知ったから、カズートが天馬を見せてくれただけ。天馬を牧の外には出せないもの、わたしが行くしかないじゃない」

「そうだね、天馬を見せるなんて滅多にないことだ。随分と大きな好意だよ。特別としか思えない、ね」

「……そう。わたしたちって、そういううわさになってたんだ」

「なにしろ大牧の御曹司が足繁く通っていたのは、特別なものなんてなにもない小さな牧だったからね。ただ御曹司と同じ年ごろの娘がいるというだけの」

「本当に子供のころからのことなの？ それにカズートはずっと南部に行つてて、一年もうちには来てなかった。なのにそんな話になるの？」

「振つたとか振られたとか、もちろんいろんなうわさがずっとあったよ。いまでもね」

リウは背中を冷たい手でなでられたような気分になった。

「……簡単な話なのに。カズートは遠乗りが好きで、うちは一休みするのにちょうどいい場所にあつて、お互い牧の子供だったから友達になつて。たったそれだけのことなのに」

「けど実際、彼はきみに天馬を見せている。僕はもう何度もイヤーマ牧に行っているけれど、決して与えられることのなかった恩寵だ」

「恩寵って、そんな言い方しないで。カズートがそんなつもりだったら、わたしは今日だって来てない。それにカズートは、わたしに天馬競をやめさせたかったからって」

「わからないかな。これを恩寵と感じなくてすんでいるだけ、きみは恵まれているんだよ」

カズートからしたらなんでもない友情のつもりでも。そしてリウがありがたくそれを受けただけのつもりでも。周囲からしたらそれは特別なことになってしまう。

リウはぎゅっと口を結んだ。うっかり天馬を見たいなどと口走ってしまったことを改めて後悔した。

シャルスの横顔に淡い微笑が浮かんだ。

「うわさときみと、どちらを信じたらいいのか、僕はずっと迷いつづけていた。そしてきみから天馬競に出てくれるよう頼まれたとき、僕は結局うわさを信じてしまった」

その手首が返り、ぴしりと軽く馬車馬を追い立てる。無駄のない腕の動きも、気を抜いた馬のわずかな気配を見逃さない鋭敏さも、馬をよく知った者にしか不可能な技だった。リウが天馬競を目指す仲間になってほしいと願った、去年のままの手並みだった。

「今日まで僕は、自分を情けない男だと責めてきたんだ。僕に伸ばされたきみの手を、別の手は他の男がつかまえているかもしれないといううわさだけで振り捨てたんだから」

シャルスの静かな声が続く。

「けどイヤーマ牧に行くようになったのなら、心配する必要なんてなかったようだね」

「シャルス」

「いや、勘違いしないでほしいんだ。きみを責めているわけじゃない。牧の男がふたりいて、きみは頼りになるほうのひとりを選んだ。

ただそれだけの、当たり前の話さ」

からからと回る馬車の車輪と馬たちの蹄の音はよどみなくつづいている。だが、ふたりの人間は物音ひとつ立てなかった。

道の上に落ちた影は次第に伸び、やがてランダルム牧の丘の木が見えてきた。

それまで続いた長い沈黙をリウは破った。

「ありがとう。ここならちゃんとうちの牧まで送ったってことになるから」

リウはまっすぐシャルスを見つめた。

「あなたがそんなことを考えてたなんて、わたし、全然知らなかった。いろいろ話したつもりだったのに、わたしたちってなんにも話してなかったんだね」

「僕は臆病者だからね。きみに、ありのままの自分の姿なんて、とても話せなかった」

シャルスは微笑んだ。

「イシャーマ牧からしたらうちの牧なんて、自分自身の小指より簡単に好きにできるものだ。その機嫌を取るのに精いっぱい、正直きみに頼まれるまで、自分の力で 天馬競 に出るなんて考えたこともなかったよ。そんなちっぽけな存在が実際の僕なんだ」

「あそこと比べたらどこだってちっぽけだよ。ノア牧だって小さな牧じゃないのに」

「それでも内実は、すでにイシャーマ傘下のようなものさ。イシャーマ牧がつきあいはやめたと言ってくるだけで、もううちはどうしようもなくなる。あそこの馬をつけられなくなれば、それだけで馬の値打ちが下がるからね 考えるだけで頭が痛くなるよ。これでも父の共同経営者になったときには、もっと堂々とやっていくつもりでいたんだけれどね」

シャルスは振り返り、馬車につないだ黄褐色の馬を見た。

「一生懸命育てた馬を間抜けと罵られて、イシャーマの馬には釣り合わない駄馬しかいないと嘲笑われても、愛想笑いでうなずくだけ

でなにひとつ言い返せない。それが僕と僕の牧だ」

笑顔と呼ぶには冷ややかすぎるシャルスの表情は、リウの知らない顔だった。

リウはじつとそんな彼を見つめ、そして唇を噛んだ。

甘ったるい奇跡、夢だと言った、カズートの言葉が頭の中に響いている。

そうかもしれない。なにかもから目を背けて、心地よい夢を見ただけなのかもしれない。だけど、それでも、わたしはやっぱりあきらめたくない。覚悟が足りないというなら、それだって持つてみせる。リウはバルメルトウからすべりおりた。

「シャルス」

御者台の彼を見上げる。

「もう一度、去年と同じお願いをさせて。わたしと一緒に 天馬競に出る」

シャルスはわずかに眉をあげた。

「天馬競 に勝つ意味がある者同士として。お願い。わたしと天馬競 に出る」

シャルスの表情の下にあるものをとらえようと、リウは目をこらす。勝利の可能性とイシャーマ牧への不満とを天秤にかけたかどうか、そしてどちら側を重いと見たか。

「わたしの望みはひとつだけ。バルメルトウが天馬になれば、それでいい」

すでにあらゆるものを持つているカズートには、リウは返せるものを持っていない。だからなにも頼めない。だがシャルスは違う。イシャーマ牧に頼るしかないいまの自分を嫌う彼になら、まだ返せるものがある。

「そのためなら、どんな条件でも呑む」

シャルスは静かに聞き返した。

「どんな条件でも？」

「出てくれるなら、どんな条件でも」

シャルスの気持ちが変わらずに 天馬競 に傾いたように見えた。だからリウは彼の次の言葉、彼が出す条件を予測して心構えをした。複数年のバルメルトウの種付優先権利どころか、ノア牧への貸出自体すら考えた。

たった一頭の種馬を貸し出してしまえば、ランドルム牧には種付料は入らない。貸出先からの礼金が入るだけだ。それでもリウはかまわなかった。天馬競 で勝つためなら、シャルスという乗手が協力してくれるためなら、すべての言い分を聞く覚悟を決めた。

「……僕は小さな存在だ。 天馬競 に出ると言っても、せいぜい身の程知らずだと笑われるくらいで、イシャーマ牧はなにも思わないだろう。それでも僕なりの誇りはある」

静かだが低いはっきりとした声で、彼は言った。

「きみは、 天馬競 に勝つまでイシャーマ牧の友達に会わないでいられるかい」

予想外の条件だった。リウは応えることも忘れて、呆然とまばたいた。

「きみがどうしても出ると言うなら、彼はきつと助けようとするだろう。だけど僕は、自分の勝負にイシャーマの助けなんて借りたくない。この条件を呑めないなら、僕は断わる」

リウの心をカズートの面影がよぎっていく。大牧の御曹司とはとても思えない姿が、くやしきまでに見事な乗りこなし方が、からかうときには少しだけ柔らかくなる目もとが。追憶の中の彼は次々と変わっていき、絹のスカーフをつけたいまの姿へとたどり着く。

「……わかった。それがあなたの条件なら、カズートには会わない」シャルスはじっと、リウの心の底までさらうような目で見つめている。

「できるのかい」

「わたしだつて借りは作りたくないもの。もともと助けなんて借りるつもりはなかったよ」

「わかった」

一緒に 天馬競 に勝とう、とシャルスは微笑んだ。

十

バルメルトウがぱくりと髪を噛んだ。

「わ、こら！」

牧の柵の前で座り込んでいたリウが声をあげると、柵越しに首を伸ばしたバルメルトウはすぐに口を離し、笑うようにぶるつと鼻を鳴らした。

リウは、バルメルトウに乱された髪を両手でかき上げ、頭を振った。

どうしたの、と言うように、バルメルトウがちょんちょんと鼻先で肩をつついてくる。

「ん、お金があとどれくらい使えるかをね、ちょっと」

馬に答えながら、リウはそろえて曲げた両膝をかかえて息をつく。どう考えても、余裕などまったくない。

天馬競 開催地までの旅費や滞在費を、野宿と前日到着と空きっ腹で極力抑えるにしても、三人目として出てもらう助っ人への礼金まではひねりだせない。仕事でも見つければいいのだが、そう都合よくいくとも思えない。そもそもランドルム牧にはまだ馬がいる。それらの世話をしてからさらに働くことは難しかった。

「相談……するしかないね。バルム、遊んでるところを悪いけど、ノア牧まで行こう」

バルメルトウは喜んで頭を上下に振った。

馬具を取りに歩き出したリウの目に、見覚えのある馬車が入った。その御者をはつきり見てしまふ前に、リウは顔をそむけて厩舎に逃げ込んだ。壁に背をつけて唇を噛みしめる。

「なに逃げてんだよ？ なんか見られたくないことでもしてたのか？」

「冗談と受け取ったらしいいつもどおりのカズートの声に、リウは

泣きそうになった。

「ごめん、会えない！」

彼に聞こえるようにというよりは、自分のそんな気持ちに負けなように、精いっぱい声を張り上げる。

「今年一年は会わないから！ 悪いけど帰って！」

張り上げたせいでいまにも裏返しそうな自分の声に、リウはぞつとした。高すぎる。もっと低く、カズートに負けなくらい低い声を出せばいいと、心の底から願う。

「は？ 一年？ どういうことだ？」

それでも声を出さないわけにはいかない。

「わたし、やっぱり 天馬競 に出るから！ だから会うわけにはいかないの！」

「……あのな。出るなら出るで、利用できるものはしろって言っただろ」

「なにも返せないのに、そんなに甘えられないよ！ お願いだから放つといて！ 大体カズートだって出るんじゃない！」

「だから乗手になってやるなんて言っていないだろ。おまえ、意地っ張りにも限度があるぞ」

カズートの声が不穏な気配を帯びてくる。

優しいから ぎゅっと、リウは背に回した手を握る。口が悪くて、目つきも悪くて。だけどカズートは優しいから。昔なじみの苦労を見ているだけなんてことはできないから。

けれども、そんな彼に甘えることなどできない。

「お情けなんてかけないで！」

リウは叫んだ。

「わかってるよ、わたしがいま喉から手が出るくらい欲しいものなんて、カズートからしたらたいしたものじゃないって。貸しだとも思わないでくれてやれるものなんだって。だけど、だから、絶対にもらいたくない！」

だめ、と思う自分より早く、勢いづいてしまった口が動く。

「わたしに本気で『カズート若さま』って呼ばせたいの!？」

自分がなにを言ったか悟った直後、リウは呆然とした。自分の大きな息づかいだけが聞こえ、上下に揺れる肩をぼんやり感じていた。だから、長すぎる沈黙に気づいたのはかなり後になってからだった。

カズートが帰ってしまったのではないかと、リウは壁から背を離して窓を見やった。けれども、窓から見える道に、いつまでたっても馬車は現われなかった。

カズートはまだ外に立っている。見なくてもわかる。いい乗手の証である昔からの姿勢のよさに、いつのまにか首もとに絹のスカーフをつけ加えた、いまの姿で。

けれどもリウはこれ以上の言葉を持たない。無理になにか言おうとすれば、さらにとんでもないことを口走ってしまいそうで、リウは懸命に息苦しい沈黙に耐えた。この我慢比べにだけは負けるわけにはいかなかった。

「……わかったよ」

やっと沈黙を破った彼の口調は平坦で、なんの感情も読み取れない。

リウの体はびくりと震えた。口から言葉がこぼれかけた。違う、わたしはただ。

鋭く鞭が鳴った。車輪が回り、馬車が去っていく音がした。

リウは厩舎の壁に背中をあずけ、そのままずると座り込んだ。

十

自分の分の馬の世話と厩舎の掃除を終えると、もう昼近かった。あわただしく昼食をすませたリウは荷馬車を引っ張り出して、近くのジョスリーの町へ買い出しにむかった。

ジョスリーは北部のどこにもある田舎町で、草原の道が北東と北西の二股に分かれたところに開けている。目抜き通りには平石が

敷き詰められ、両脇にも石造りの建物が並び、各種の店が入っている。

適当な場所に荷馬車を止めて飛び降りると、リウはその中のひとつ、イスラの店のドアを開けた。リウがまだ子供のころから老婆だった店主のイスラは、カウンターのむこうでしなびた手をあげてみせるあいだも、同じく老婆の客と早口のおしゃべりを続けていた。

彼女の店は雑貨を扱っている。リウは棚に積まれた布地にむかっていた。先日生まれた仔馬用の馬服にできる布がさらに値を下げていなか、慎重にメモ書きと照らし合わせていく。

「……あの、リウさんですよね？」

おずおずとした声に、リウは振り向いた。

やっぱり、と両手を合わせたのは、質素だがござっぱりとした服の少女だった。一昔前の型の帽子をかぶって、ふっくらしたあごの下できゅつと幅広のリボンを結んでいる。

「この前はありがとうございました！ おかげでお仕事もあまり怖くなくなりました」

少女の言葉とイスラの店にわずかに残る香りが、頭の中でつながった。

「ああ イシャーマ牧の」

あるときコーヒーを出してくれたメイドだった。

少女はうれしそうに白い歯をのぞかせてうなずいた。イシャーマ牧でのお仕着せ姿はもっと幼い雰囲気だったが、こうしてみると十三、四歳くらいにはなっているらしい。

「はい、メイドをしています、ローナです」

「こんにちは、ローナ。おつかい？」

いいえ、とローナはかぶりを振って、帽子からこぼれる亜麻色のお下げを揺らした。

「昨日と今日お休みなんで、うちに帰ってきたんです。この近くなんですよ」

「え、そうなの？」

「はい。えっと、ご存じですか？ プルノズ農場です」

昔は牧だったのだと、父の思い出話に聞いていた農場だった。自分のすぐ足もとにもぽっかり口を開けている廃業という穴を否応なく思い出させられ、リウは一瞬返事が遅れた。

その間にローナが申し出た。

「あの、もしお時間があつたら、お茶でもいかがですか？ 遠くじやないですし」

え、というリウのとまどいを、断わられる前触れと思ったらしい。ローナは顔を赤くし、咳き込むような勢いで話し出した。

「あたし、リウさんにはほんとに感謝してるんです！ あたしなんか、イシャーマ牧みたいに立派なところで働けるわけないってずっと思つてて、旦那さまも奥さまも若さまたちも、それに他の使用人も、なんだかみんな怖くつて、それでよけいに失敗ばかりで！ だけどあのあとカズート若さまが、リウさんはあんなふうに言つたけれど絶対に本気にするんじゃないって、すっごく真剣な顔で言つてきて、あたし、それがもうおかしくつて」

勢いばかりがあふれていて、ローナの話は要領を得ない。自分でもわかつているのか、ローナはあせつたようにますます早口になつていく。

「あの、それで、それからあたし、すうつと気が楽になつて、お仕事もなんだか楽しくなつてきて！ だから、それで、みんなみんなリウさんのおかげだつて！」

とりあえず、あふれんばかりの感謝の気持ちだけは伝わってきた。「そう、よかつた。だけど気にしないで。わたしはただ昔なじみで、カズートが誤解されやすい顔をしてるのはよく知ってるってただだから」

「でもあたし、本当に助かつて！」

ぽつちやりと柔らかなローナの両手が、リウの手をつかまえる。

「だから、ぜひ、よかつたら！」

よかつたらと口では言っているが、断わりでもしたらこの場で泣

かれそうな勢이었다。

「あ、ありがとう……それじゃあ、ちょっとだけ」

「はい！」

ローナの手が、さらにきつくリウの手を握りしめた。

町を北東に出て、丘をひとつ越えたところにあるプルノズ農場は、農場と呼ぶのとはばかられるほどごんまりとしていた。黒っぽい石垣のむこうに、低い林檎の木と母屋と納屋とその横の狭い畑、それで全部だ。その背後に広がるかつては馬が駆けていたであろうなだらかな丘陵は、いまは深い草むらが風に波打っている。

ローナはリウの荷馬車から降りると、石垣の継ぎ目の扉を開けてリウが通るのを待ち、そろそろと閉めて慎重に門をかけた。

「羊だけはまだ何頭かいるんです」

そんなローナの言葉どおり、もともと草地から生えているような羊たちの間を抜けて、リウは母屋の前に荷馬車を止めた。ローナがまた荷馬車から降りた。

「よかつたら、ここでいかがですか？」

ローナは母屋のポーチデッキを示した。頑丈そうな板間には簡素な長椅子が置かれてあって、たしかにちょっとしたお茶には十分そつだった。

「ありがとう。そうだね、今日は気持ちのいい日だし」

そもそも長居するつもりもない。リウは素直にうなずき、長椅子に座った。

仕度をしてきますね、とローナは家の中に入った。

壁のすぐむこうに台所があるのだろう。窓が開いた後、楽しげなおしゃべりにも似たかちゃかちゃと陶器が触れ合う音が聞こえてくる。

ちよつとくすぐつたい心持ちになりながら、リウはのんびりとした羊たちを眺めた。

男は、そんな牧歌的な景色の中に突然現われた。

「お？」

好き勝手な方向に散った赤毛に、細い顔。シャツを瘦せた胸もとまであけて、両手の親指をベルトにひっかけている。

あまりに男の出現が突然で、リウは驚くより前にとまどった。

「客？」

男はリウに尋ねたが、返事を待つ気配もなく、横を向いてあくびをした。

年齢も正体もよくわからない男だった。贅肉のかけらもない体や顔には少年の面影が濃いのが、顎先に生えた不精髭はそれなりの年齢に思わせる。ローナの兄にしては農場で働いている雰囲気がなく、といていかがわしい場所で酒と賭博にいれあげているといった崩れた気配もない。ただここにいるとでもいったふうの、不思議な空気をまとっている。

こつも突然現われたということは、おそらく母屋の裏にいたのだろう。少なくとも自分よりは年上でローナに近い人間には違いなと、リウはひとまず結論づけた。

「はい。あの、お茶に呼んでもらいました」

「あ、そ。ローナ、帰ってきてんだ？」

「家の中にいると思いますけど」

「ふうん」

男も家の中に入っていった。

すぐにローナの甲高い声が聞こえてきた。

「やめてよ、それはリウさんの分！ 父ちゃんの分はちゃんとほかにあるってば！」

リウはぱちくりとまばたいた。

「……父ちゃん？」

「もう、ほんつとにすみません！ 父ちゃんが失礼をして……」

真っ赤な顔で謝るローナのむこうで、彼女の父だという男は長椅子の上に両膝を立てて座り、他人事のような横顔で茶をすすっている。

る。

「う、ううん、別に……」

「変わってるんです。もう三十二にもなるのに、すつごく子供みたいで」

ローナの赤い顔はまだ元に戻らない。

「昔っからこうなんです。死んだ母ちゃんも、父ちゃんは猫みたいなもんだから、いるっただけで満足しなきゃいけないって。そうしたら鼠の一匹くらい獲ってきてくれるって」

目の前の娘にいいように言われる若い父親は、ふわあと顔の半分を口にしてあくびをした。たしかに赤縞猫にどこか似ている。

ローナがお茶をふるまいながら語ったところによると、彼はある日ふらりとプルノズ農場に現われ、ランダットと名乗って居着いてしまったらしい。そのうち農場の娘と結ばれ、ローナが生まれた。

三年前にその母が、そして今年に入って祖父が死んで、農場を続けられないと判断したローナは、つてをたどってイシャーマ牧へ働きに出たということだった。

「父ちゃんも、いるときはいろいろやってくれるんですけど、ときどきふらつとどっかへ行っちゃうから。あたしひとり羊と畑なんて、とても無理だし」

と、ローナは十三歳の少女にしては大人すぎるため息をついた。

どう言葉を返せばいいのかわからなくて、リウの相づちはあいまいな音にとどまった。

「だけど、とローナは体をかがませて声をひそめる。

「父ちゃん、帰ってくるときにはお金を持ってくるんですよ」

「お金を？」

「どうしたのって聞いても、絶対教えてくれないんです。鼠、って言うだけで。あたしもう、どっかで悪いことしてるんじゃないかって心配で心配で、保安官さんの奥さんにこっそり聞いてみたんです。だけど泥棒とか強盗とか、そういう悪い人はいないって」

「そうだね、このあたりでそんな話は聞かないな」

「だから大丈夫かなとも思うんですけど」

「ん、変わってるかもしれないけど、全然悪い人には見えないよ」

「だけど、父ちゃんがちゃんと働いてお給金をもらうところなんて、想像できなくって」

ローナはまたリウが答えにくいことを言つと、吐息をつきながら振り向いた。と、すぐに声を張り上げる。

「ああもう父ちゃん！ ひとりで全部食べちゃだめ！」

ローナはランダットの手から小さなパンケーキを積んだ皿を奪い取つた。

「お、そうなの？ だつておまえら、さつきから全然食べないから」

「お話してただけ！ 父ちゃん、子供みたいなことやめてよ、恥ずかしいんだから！」

「蜂蜜、要る？」

「要る！」

手から手へと移動した小さな壺は、ランダットが渡したのかローナが奪つたのか、難しいところだった。

「ほんとにごめんなさい。あの、どうぞ」

ますます顔を赤くして、パンケーキをすすめてくるローナの姿に、リウはくすりとした。

「でも、いいな」

「はい？ なんですか？」

「ん、ローナとお父さんが」

「どつどこがですか！ あたし、もつと落ち着いてて大人っぽい父ちゃんがいいです！」

「だけどうちの親となんて、こんな楽しい感じにはならないよ。いまは特に、わたしのやることには反対だから」

いただきます、とリウはパンケーキを口に運んだ。昔はリウも粉まみれになりながらパンケーキを焼いて両親にふるまったが、いまはそんなこともなくなっている。

「まあ、わたしに反対するのは、父さんや母さんだけじゃないんだ

けどね」

「それ、カズート若さまのことですか？」

「……なんか言ってた？」

「いえ、特には。ただ若さま、最近ますますぶすつとしてるから

あ、すみません、これ若さまには内緒にしてください！」

「もちろん……そつか。カズート、そうなんだ」

「ええ、そうなんですよ。だからリウさんと喧嘩したのかわかって
つて」

喧嘩なんていいものじゃない、とリウは目を伏せた。昔なじみを
一方的に傷つけてしまったという苦い思いが胸の底で疼いた。

「それに、もともとみんな心配してたんですよ。カズート若さまっ
て馬が好きで、乗るのも上手で、昔から牧の人に人気があっただ
すよね？　なのに南部から帰ってきたら様子が変わってて、今年ま
かされた馬も、管理はしてるけどあんまり興味ないみたいだつて」

「……　天馬競　に出す馬？」

「はい。また冬には皆さん南部に行くみたいですから、ダールグ若
さまのほうがやきもきしてるんです。イシャーマ牧が勝たないと、
婚約したお姫さまに格好がつかないって」

「あはは。カズートもちろんと仕事しないとイケないね」

リウは無理に愛想笑いを浮かべた。

それをそのまま受け取ったのか、ローナは力強くうなずいた。

「そうですね、よかったですらリウさんからなにか言ってあげてくださ
い。みんな、本当に心配してるんですよ。あんなのカズート若さま
じゃないみたいだつて」

リウの愛想笑いが崩れそうになった、そのとき。

悲鳴のような甲高いいななきがあがり、ごとりと重い不吉な物音
がした。

大蛇にしたたかに刺されたか、あるいは鼻先をかすめた蜂かなに
かに驚いてしまったらしい。すぐに辞去するつもりで荷馬車につな
いだまま待たせていた馬が、大きく前脚を跳ね上げている。後ろの

荷馬車までもが持ちあがり、ふたつの車輪が浮きかけている。

「危ない！」

荷馬車の重量で体勢をくずせば、馬はあっというまに倒れる。けがをせずにはすまない。

馬をなだめに走ろうとしたリウよりも、さらに早く。

「お」

赤毛の頭が手すりを跳び越えた。

走った勢いそのままに、すばやく片手でたてがみをつかんだ細身の体が、直立しかかった馬の背に飛び乗った。すかさず両の脛で馬の胸をはさんで立ち上がる。荷馬車用の長い手綱を引くと同時、おびえきつてぺたりと伏せられた馬の耳に静かな声でささやきかける。目の前で起きた一連の出来事を、リウはただ見守ることしかできなかった。

馬がゆっくり前脚を下ろした。ぶるつと頭を振り、荒い鼻息をつくと、いらいらと片脚で地面をひっかいた。

ランダットは平らに戻った背に軽やかに腰を下ろし、馬の首を優しく叩いてやっている。まだパンケーキの残りを頬張ったままささやきつづける不思議な言葉は、もしかしたら馬の言葉なのかもしれない。馬はじつと耳を傾けている。

「父ちゃん」

ローナの目はすっかり丸くなっていた。

十

風が吹きわたる北部の緑の丘陵地帯は、詩人たちに草の海にも例えられる。

そのただ中を、バルメルトウは規則正しい歩調でゆったりと駆けていく。

ひとたび 天馬競 ともなれば、道ばかりを走るわけではない。

天馬競 で定められているのは、出発地、中継地、終着地だけだ。

通常は一フアラ　一〇分の一リーグごとに目印となる競路柱が立てられているが、それに沿って走らねばならないという決まりはなく、また競路柱そのものが本来の道からはずれていることもある。バルメルトウを自然のままの地表に慣らすためにも、リウは普段からできるかぎり道以外の場所を通らせるようにしていた。

一時間ほど走りつづけて、さすがにバルメルトウが汗をかきだしたころ、ノア牧の入口が見えてきた。胸の高さの門扉は閉じられている。リウは道に戻り、バルメルトウに体勢を整えさせてからもう一度駆け出させ、門扉をひと息に飛び越えた。

そっくりで見分けのつかない犬たちのさわがしい出迎えのあと、馬に乗って牧を見回っていたらしいシャルスが姿を現わした。

「見えたよ。普通に門を開けてくればいいのに」

と馬上のシャルスは苦笑したが、リウは表情をくずさない。

「天馬競　ではなにかがあるかわからないから。いざというとき、困るのはバルムだもの」

「歴戦の勇者のような心がけだね」

シャルスの苦笑がいつもの微笑に変わった。

「牧へ行こうか。バルメルトウも歩かせてやるほうがよさそうだ」
バルメルトウは汗をかいている。いきなり足を止めて休ませても、筋肉によくない。しばらく歩かせて筋肉をほぐし、少しずつ体温を下げていってやらなければならぬ。

「ん、お願い」

リウがバルメルトウから降りる間に、シャルスは自分の馬を厩舎に戻し、毛布をもってきてバルメルトウにかけた。リウはその手綱を引いて、シャルスと牧へと歩き出した。

「今日はどうしたんだい」

「三人目について相談しようと思って」

一〇歩分ほど、シャルスは返事をしなかった。それから顔をリウに向けた。

「なにか、よくないことでも？」

「え？」

「さつきから、ずっと怖い顔をしているよ」

リウは一瞬固まったあと、ぎこちなく微笑んだ。

「……お金、ないもの」

「必要なのかい」

「三人目になつてほしい人がいるの。その人に払う礼金が要るですよ」

「誰？」

「プルノズ農場のランダットさん」

シャルスは、物静かな顔立ちにふさわしく、片方の眉だけをぴくりと動かした。

「あのいつもぶらぶらしている赤毛の人？」

「そう、その人」

「あの人が馬に乗ったところなんて、見たことがないな」

「わたしは見たよ。昨日プルノズ農場に行ったとき、うちの馬車馬が暴れたの。あの人が、立ち上がった馬に飛び乗って、あっという間になだめちゃった」

「それはすごいな……」

リウはバルメルトウの手綱を握る手に力をこめる。

「そのときにぴんと来たの。あの人が、たぶん 天馬競 の助っ人をしてるって」

「勘？」

「馬の乗手って、それもとても上手な人って、なんとなくわからない？」

それは細身でしなやかな体躯かもしれず、そこにぴんと一本すじを通したようなまっすぐな背かもしれない。あるいは、尻込みを知らないまなざしかもしれない。

天馬競 出走など考えられない小さな牧、それも女に生まれついてはいても、リウはそうした天性の乗手をよく知っている。天から資質を贈られた少年がどんなふうにも一人前の乗手になっていくか、

つぶさに見てきたのだ　カズートという昔なじみを。

ぐいと後ろに引き戻したバルメルトウの頭の動きで、リウは自分が知らないうちに手綱をきつく引きすぎていたことを知った。ごめん、とふりむいてバルメルトウに謝る。

バルメルトウは離れた大きな両眼をじっとリウに向けて応えた。深い色に輝くその目は、リウの心のうちをすっかり知っているかのようだった。

大丈夫、となんとなくうなずき返して、リウはまた前を向いた。

「それに、ときどきどこかに出かけてお金を持ってくるって。間違いないと思わない？」

シャルスはわずかに表情を硬くした。

「……たしかイシャーマ牧に新しく入ったメイドは、プルノズ農場の子だったね」

「そう、ローナ。ほら、この前イシャーマ牧に行ったときに会って、昨日、偶然ジョスリイの町でも会って。それで家に招いてくれたの」「じゃあ、ランダットもイシャーマ牧に関係が」

「そんなことない。ローナだってランダットさんが馬に乗るなんて知らなかったんだよ」

それから、トリウは眉間に力をこめる。

「約束どおりにしたから。イシャーマ牧のことはもう気にしないで」「どういうこと？」

「カズートに、もう会えないからうちにも来ないようになって、ちゃんと言った。だから、この話はこれでおしまい」

「……わかったよ」

同じ言葉でも、シャルスのそれはカズートとはまったく違った。彼は優しくうなずくと、それから微笑した。

「ランダットに会ってみたいな。その上で話がまとまるようなら、礼金はまかせてくれ」

「ん、悪いけど、半額貸しとして」

「僕を引き込んでおいて、まだわかってないのかい？　これはもう

僕の戦いでもあるんだ。そのための出費は当然だよ」

「そう、わたしの戦いでもあるよ。だから半額出すのは当然」

リウは振り向いて、規則正しく歩くバルメルトウの澄んだ両眼を見つめた。

「絶対に勝って、そのお金で返すから」

ローナの休暇が終わったブルノズ農場はまったくの無人に見えた。散らばった羊たちは、羊飼いにも牧羊犬にも見守られることなく、彼らの先祖がそうしていたように、好き勝手に草をはんでいる。夜も家畜舎に入れられることなく、よりそって眠るのかもしれない。

うちの羊なんて売れ残りのやせっぱちばかりだし、わざわざ盗むような人もいないです。そんなローナの苦笑まじりの言葉を思い出しながら、リウは母屋へ行ってみた。

「こんにちは！」

外から呼ばわって見たが、家の中に気配はない。

「いないんじゃないのかな」

シャルスが言った。

リウはバルメルトウの手綱をシャルスにあずけ、裏手にまわって見た。

「あの一！」

裏庭には使われなくなつて久しいとおぼしき二輪の荷馬車が傾いたまま放つておかれて、片一方が折れた引き棒を地面に投げ出している。

なんとなく予感があったのは、牧にふらりとやってくる野良猫がよくそんな感じで眠っているからかもしれない。リウはこちらからは見えない荷台の前へと回り込んだ。

「……お？」

傾いた荷台の上、赤毛の頭の下で手を組んで寝転がっていたランドットが、眠そうに片目をあけた。

「こんにちは、ランドットさん。ランドルム牧のリウです」

「あー。知ってる」

ランダットは荷台から上体を起こすと、ふわあとあくびをして、ぼさぼさの髪をかいた。

妙な返事にあきれたリウに、ランダットはさらに意外な返事をした。

「ここに来たとき、最初に見たから」

ランダットはリウの表情にはおかまいなしに、今度は両手を頭上に伸ばしながら、またあくびをした。

「ランダルム牧。道から看板が見えて、なんかいいって思ってさ」

たしかに、馬を買いに来る客への案内として、街道からも見えるように看板を立ててある。そのことを言っているらしい、とやっとリウは理解したが、しかしそれでなにを彼が伝えたいのかはまだわからない。

ランダットはリウを上目づかい気味に見上げた。

「で、考えてみたら、おれの名前、ランダットって気がしたんだよね。だからさ。ランダルム牧って、よく覚えてる」

「……考えたら？」

「そ。おれ、ここに来たとき自分がどこの誰か忘れてたから。ま、どうだっていいけど」

「え」

ランダットがあまりにさらりと言ったので、リウの反応は一瞬遅れた。

「ええっ!? よ、よくないじゃないですか! あ、でも、自

分の年がわかるってことは、そのあと思い出せたんですね?」

「あー、全然」

「だ、だってローナが三十二歳って」

「うん、じいちゃんが十八くらいだなって決めて。そっから十四年だから、いま三十二」

「十四年も思い出せてないんですか!？」

「うん」

「た、大変なことじゃないですか！」

「なんで？」

ランダットはきょとんとしている。

当たり前と思ひ込んでいたことを改めて説明するのは、ひどく難しかった。リウは口をあけたまま、眉間にしわをよせた。

「なんでって、えーと……だから」

さつきリウがあげた声が聞こえたらしい。

「どうかしたのかい？」

馬をつないできたシャルスがやってきた。

「……あのね。ランダットさん、自分の昔のことずっと思い出せないんだって」

彼の眉もはねあがる。

かえってランダット自身のほうが、他人事のような顔だ。

「なんでふたりともそんなに驚いてんの？」

「そんな、驚くに決まってるじゃないですか！ 自分のことがわからないなんて」

「そうかなー、おれ、ちっとも困んなかったけど」

ランダットはますますきょとした顔で、リウを指さした。

「わざわざそんなこと言いに来たの？」

「ち、違います！ っていうか、そんなこと初めて知りました！」

「だよなー」

リウは一度こぶしを胸に置いて、うっかり忘れそうになった本題を切り出した。

「わたしは、ランダットさんに聞きたいことがあって来たんです。

天馬競

「天馬競？」

「ええ。ランダットさん、天馬競で助っ人してませんか？」

「してる」

ランダットはそれまでどおりの態度で、あっけらかんと認めた。かえって調子をくずされた気がしたが、すぐ本題に入れるのはあ

りがたい。この様子なら、報酬額について長い駆け引きなどせずすむだろう。

「リウ」

シャルスが短く呼びかけてきた。続きを聞かなくても、その顔でわかる。シャルスはランダットを仲間にすることに不安をおぼえはじめている。

その気持ちはリウにもわかる。昔のことが思い出せないという問題そのものより、むしろその問題に対するランダットの軽すぎる態度が不安をかきたてる。

ちゃんと約束を守るのか、しっかりと走ってくれるのか。忘れた、となつてそのままほつたらかしてしまわないのか。

天馬競 の助っ人と、一口に言つてもいろいろある。自分ひとりでは組を作れないからせめて助っ人で参加したいという者もいれば、どうにかして礼金だけをくすねたいと考える詐欺半分のような者もいる。

ただ、彼らには 天馬競 に出たいという気持ちか、それを持っていると見せかける演技力、最低でもそう演技しようとする意志があつた。

しかしランダットにはそうしたものが一切ない。あっさり助っ人を承知しそうな半面、同じくらいあっさりやめたと言出しそうなそんな印象を受ける。自分自身にこうも無関心な男が、挑戦や名誉や金銭に関心を持つだろうか。

それでも、とリウはこのとらえどころのない男をじつと見つめる。あのあざやかすぎる手並みは本物だった。彼は馬を知っている。そのことだけは疑いようもなかった。

「だったら、今年の秋まで、わたしたちと組んでくれませんか」

リウは言った。

ランダットは立ち上がった。華奢な男だが、それでもリウより上背はある。

「一緒におまえが出んの？」

「もちろん」

「それと、そつちのおまえ？」

「ええ」

シャルスも答える。

「ふーん」

ランダットはまた髪をかいた。

それをなんらかの疑念と受け取ったらしい。シャルスはきつと頭をもたげた。

「僕はノア牧の共同経営者、シャルスだ。あなたへの礼金なら十分に払える」

「十分？」

「ああ。とはいっても、要求が法外なものだったら、もちろん払う気はないけれどね」

「礼金つて、おまえが決めんの？」

「もちろん」

「どうやって？ 一位いくら二位いくら、それ以下だったらいくらつて？」

「そつだ。当たり前じゃないか」

「じゃ、鼻差の二位と、一位のやつらが風呂もすませたころに着いた二位も、まるつきりおんなじ？ 三位と、夜になって戻ってくるようなびりも？」

シャルスはとまどい、表情が揺らぐ。

「あはは。な、だからそんな細かいこと言わなくていいつて。勝ちたいつて、それだけで」

小さく口をあけたまま止まってしまったシャルスを視界の端に見ながら、リウはなぜかこみあげた微笑をそのまま頬に浮かべた。

「ええ、勝ちたいんです。だから勝つ方法を教えてください」

ランダットはふりむいた。

「教えるもなにも、いい馬を気持ちよく走らせればいいじゃん。なんか難しいわけ？」

「あなたにとってはそうかもしれない。だけど、わたしたちはそうじゃない」

リウはじつとランダットを見つめ、まっすぐ手を差し出した。

「だから、一緒に出てくれませんか」

ランダットは片手をポケットにひっかけると、もう片手で頬をかいた。

「んー……」

視線をそらした顔は、なにやら考えるふうだ。

「リウ」

シャルスが小さく声をかけてくる。

だが、リウはそれでもランダットから目をそらさなかった。予感がする。この変わった男はきつと助けになってくれる。

「わたし、勝たなきゃいけないんです。どうしても」

手を差し出したまま、リウは言った。

「それに、うちのランダルムって名前。ランダットさん、結構好きなんですよね？」

ふつと小さな笑い声と同時に、リウの手は意外な力強さで握り返された。

「いいよ。やってみっか」

四 葡萄酒の町で

ともにランダルム牧を出発した朝日が、天頂近くなつたところ。丘の上に広がった町が見えてきた。整然と区画された葡萄畑が、つづりあわせた端布のように町を囲んでいる。葡萄酒の名産地として広くその名を知られた、フラシコの町だった。

しかし馬上のリウが気になるのは 天馬競 のことだけだった。
「道しか走れないね」

農地に馬を入れて土地を荒らすことは、どこでも厳しく禁止されている。これだけ葡萄畑だらけの地形となると、今回は本来の道を通るしかないということだ。

シャルスも鞍の上からあたりを見わたした。
「だけど、その道は十分に広い。そう気にすることはないんじゃないかな。 天馬競 当日は畑仕事も制限されるから、他の馬車や馬もないだろうし」

たしかにフラシコの周辺の道は通常よりもはるかに広い。葡萄の収穫や、出荷する葡萄酒を考えてのことなのだろう。馬はもちろん相当な大型馬車でも余裕ですれちがえそうだ。

「でも、競路が狭いのって、なんかいやだな。 どう、ランダットさん？」

リウは振り返った。

ノア牧の馬の中から適当そうに一頭を選んだランダットは、いまもどうでもよさそうな顔で選んだ馬の背に揺られている。

「こういう狭い競路って、経験ある？」

「んー、それなり。ま、でも、そこまでの勝負になることって滅多にないし」

「今回は？」

「なるかもなー。どの馬も、結構やる気ありそうだもん」

馬について言うあたりが、ランダットらしかった。

「そっか。でも、人だって負けてないよ」

通常 天馬競 出走者たちは、早めに開催地の町に入って自分や馬の体調を整え、ゆっくり競路の下見をする。しかし、リウたちのように金銭的な余裕がなくてぎりぎりに入る者たちもいれば、雇い主を捜して延々とつるつる助っ人志願の者もいる。もちろん準備する町の間もいて、結果フラシコの町に近づくに連れて混雑は増すばかりとなる。

「ごった返す人、馬、そして馬車。」

道は町の中に入っても広さを保っていたが、それでも混雑は抑えきれない。ことに小回りのきかない馬車は身動きがとれないようで、御者の罵声がそこかしこであがっている。

「やっぱり狭いのってよくなさそうだね」

リウはぼやいた。本来草原に棲まう馬は狭い場所を好まない。リウは少しでもひらけた空間を見つけ出して、バルメルトウをそちらに誘導していった。そうしているうちに、いつのまにかシャルスやランダットと離れてしまった。

とはいえ、行き先は決まっている。出走受付はどこでも広場で行われるものだからだ。

「広場の北ね！」

振り向きながらリウが叫ぶと、シャルスとランダットはそれぞれ手をあげた。

これでバルメルトウと自分だけを心配すればよくなった。リウは方角と、あれこれと物が落ちている足もとに気をつけながら、ゆるやかな坂道を進んだ。

声が出したのはそのときだった。

「見ろよ……」

それまでの喧噪が少しずつ静まって、あたりの人馬が動きを止めていく。だけではない。道の真ん中にいた者は、あわてた様子でよ

けていく。

よほど偉い者でも来たのかと、リウもバルメルトウを端に寄せ、肩越しにふりむいた。

「
頭上からの陽光を受けて、乳色、月色、銅色、それぞれの色に輝く三頭の馬が、軽やかな足取りでやってくる。規則正しく石畳を叩く蹄の音は、明日の凱旋の予行練習のようだ。つけられた馬具はつやめき、脚を保護する布までもが装飾品であるかのように美しい。」

馬たちの乗手がどけと声を張り上げたわけではない。だが彼らが行くところ、自然と道はできる。邪魔してはいけない、そんな思いが見る者の胸にこみあげるせいだ。

「主役が来たぜ」

誰かのつぶやきに、リウは今度こそ息を詰まらせた。

続いて無蓋の小型馬車がやってくる。すでに天馬のような馬たちに比べれば簡素すぎる馬車だが、そこにひとり乗る絹スカートの若者を、この場にいる誰もが知っていた。

「イシャーマの五男だぞ」

馬車の手綱をとるカズートは、馬に乗る姿勢のままだった。自分にふりそそぐ視線を完璧に無視して馬たちのさらにその先を見据えた視線は、まったく動かなかった。

「五男は乗るんだったな。今年は御曹司ご本人が出るのかな」

「あの格好じゃあ違うだろうよ。明日の優勝の見物だろうさ……」

リウは目をそらせ、カズートを見つめる無数の視線から抜けた。

視界の隅をカズートの馬車が去っていった。

十

天馬競 の日の早朝、出走者は町の外に集まった。

ほの暗かった空も次第に白んで光を増していき、丘陵地を眠りから呼び覚ましていく。うっすらと朝露を葉に乗せた葡萄畑が、あざ

やかな緑に輝きはじめる。

画家が自分の画布の上に切り取りたいと願うに違いない朝の景色を、だが、リウは一瞥もしなかった。リウの視界も関心も、冬毛のままのような厚い毛に覆われた脚と、不格好なまでに大きな蹄によって占められていた。

「バルム、大丈夫だね。おかしなところはないよね」

リウはその脚をさすり、蹄を裏側まで確かめた。不穏な熱も腫れも感じられなかった。

できるだけいつもと同じようにと思っただけでも、鼓動は早く、大きく、体全体に響いている。ブーツを履いた足もとも、夢の中で雲を踏んでいるかのように浮ついている。リウは息を吸って体を起こし、バルメルトウの肩に手を置いた。

「よし。行こう、バルム」

同じように自分の馬の傍らに立つシャルスは、念入りに馬具を確かめている。

ランダットは、いつもとまったく同じのんきそうな顔で馬に低く話しかけている。

フラシコまでの道中、シャルスは優雅に、そしてランダットはゆったりと、それぞれ馬を走らせていた。天馬競の乗手としての経験は浅いが、それでもリウはこれまでたくさんの乗手を見てきている。はつきりした格付けなどできないにしても、彼らは並以上の乗手であると、自信を持って断言できる。

やれる、きつとやれる　これまでの　天馬競　前につぶやきつづけてきたその言葉は、緊張する自分への励ましと淡い希望としてだった。だが、今日はそれだけではなかった。

「がんばろう。わたしたち、きつとやれる」

リウは彼らに言った。組んだ相手にこうやって声をかけるのは初めてだった。

シャルスはうなずき、ランダットも飄々とした顔をこちらに向け

リウはそんな仲間たちの姿に集中する。イシャーマ牧のあの見事すぎる馬たちを、雑踏の中に見つけてしまわないように。バルムは絶対に他のどんな馬にも負けたくない、そんな信念を万が一にも折られてしまわないように。

「バルムもわたしも、みんなを信じて待ってるから」

係員が二走騎・三走騎を集める声があがり、それぞれの集合同所に旗が立った。

「シャルス、がんばって。初めはどうしても競り合いになるから、大変だけど」

「ああ、大丈夫だ。エギルの飛び出しにまかせてくれ」

「ランダットさんも気をつけて。二走の競路は荒れ地で、馬が蹄を痛めやすいんだよね？」

「こいつにも言つといた」

ふたりににこりと笑いかけ、リウは愛馬の手綱を引いて、三走騎の旗を目指した。

「おいおい、どこのガキだ？」

同じく旗の下に集まったうちの誰が言ったともつかない声がする。「馬が見つからなかったからって、なにも兎で出てくることあねえだろうがよ」

無遠慮な笑い声が、とっておきの冗談だと自画自賛するようにあたりに響く。

リウは自分の鍔広帽を押さえると、その下できつく唇を噛んだ。

言い返しはしない。リウの声を聞けば、相手は女と悟ってますます調子に乗るだけだ。

声を避けてさらに進んだリウの前に、月色の輝きが見えた。イシャーマ牧の馬だった。

「よう、兎のガキ！ 見たか、そいつが馬つてもんだぜ！」

リウを追ってきた声が聞こえたらしい。月毛の馬の前、まるでその従者のように見える若い係員が、少しばかり同情的にリウを見た。リウは彼から顔を隠すように、さらにぐいと鍔広帽を押し下げた。

「三走騎の方は騎乗してください。中継地へ先導します」
係員の声がした。

胸の中で心臓が暴れまくり、喉はしめつけられたように息苦しく、頭はかっとな熱いのには底のほうからひんやり冷えていく、奇妙な感覚。リウはやっと三度目の 天馬競 で、やっとそうした感覚に慣れつつあった。

太陽はのろのろと空を渡り、ようやく天頂を過ぎたばかりだ。もし仮にシャルスが一番でランダットになぎ、ランダットもそのまま先頭を保ったとしても、競路の半分も過ぎたかどうかというところだろう。

まだ人馬の姿を見ることはないと知っていながら、リウの視線はつい東に向く。使い込んだバルメルトウの手綱ごと、人に幸運を運ぶというそのたてがみを指にからめてしまふ。

おとなしく立つバルメルトウが首を曲げて、黒い鼻面をすりつけてきた。

「ん。みんな、きっと大丈夫だよ」

リウは柔らかなその耳にそっとささやいた。

「おまえも昨日、馬房で話した？ エギルは強気な子だし、ユーリスはいい子だったでしょ。だから絶対に、ちゃんとここまで旗棒を持ってきてくれるよ」

天馬競 では、三組の人馬をどういった順で競路に配置するかも重要な鍵となる。

全頭一斉に走り出す一走馬には、まずなによりも群を抜け出す速力。一走の馬の作った差を引き継いで走る二走の馬には、持久力と集中力。そして、前の展開次第でどんな走りを求められるかわからない三走馬は、速さだけでも粘りだけでもない、そういったものすべてを総合した力 強さが求められる。バルメルトウの走りを見たシャルスもランダットも、三走馬はバルメルトウだと口を揃えて言ってくれた。

「そして最後はおまえだもの、バルム。おまえはどんな馬にだって負けないよ」

言いながら、リウは自分の右後方にいる馬をちらりと見やらずにはいられない。

三走をまかされた二十八頭の駿馬の中にあっても、際立って見事な月色に輝く馬。耳は落ち着いて風に立ち、長いたてがみが飾るすんなりした首には気品、力みなく大地を踏みしめる四肢には風格すら漂わせた、まさに天馬になるために生まれてきた馬。

「な、あれが馬つてもんだぜ。おめえのその不細工とは違えんだよ」
出発前にもリウをからかってきた男だった。帽子は古び、風防布もかなりくたびれて継ぎが当たっていた。そして小さな目が声音のとおり、意地悪くリウをにらんでいた。

ざっとそれらを見て取ると、リウは自分の帽子の鍔の影にさらに深く顔を隠した。

男は、なにもリウを説得して出走を取りやめさせようとしているわけではない。見栄えのしない馬を連れた小柄なリウを時間つぶしに使おうとしているだけだ。そんなものの相手になってやる気は、リウはさらさらなかった。

しかし、男はなおもからんできた。

「天馬競 はな、ガキが自分ちのくだらねえ馬にまたがって、さあがんばって走りますよ、なんて世界じゃねえんだよ。目障りだ」
足もとに勢いよく唾が吐かれた。リウは黙って男から離れようとした。

「おい、人に話しかけられたら、はいと答えるもんだぜ。まともなしつてもされてねえガキのくせに、なに一人前のツラしてこんなところにいやるんだ？ ええ？」

逃げ場を探して頭をめぐらせた拍子に、男の馬の姿が見えた。

悪い馬ではない。それどころかかなりの駿馬と言っている。灰色の体に黒いたてがみと尾を持った芦毛の牝馬で、例の月毛さえいなければ十分に人目を惹いたはずだ。牝馬を走らせる者は多数派では

ないが、珍しいわけでもない。牡馬を負かすだけの脚を持った牝馬も存在する。この牝馬もそうした一頭なのだろう。

しかし、それは馬が普通の状態であればのことだった。

「なに、これ」

リウは思わずつぶやいた。

灰色の牝馬の耳はほとんど前から見えないほど後ろに伏せられ、目の縁にわずかに見える白眼は充血している。不自然に強ばった全身の様子は、ひどくおびえているのか体調が悪いのか、ともかく天馬競に出られるような状態ではないことを明らかに示していた。眉をひそめ、リウは男に顔を向ける。

「どういうこと？ この子、おかしいよ」

リウが女だと気づいた男は、大げさに笑いながら声を張り上げた。「おい、みんな知ってたか？ ここにとんでもねえじゃじゃ馬がいるぜ！」

もしかしたら誰かがなにか答えようとしたのかもしれないが、それよりも早く、フラシコの町から皆を案内してきた若い係員が応じた。

「女性が出て、規則としてはなんの問題もないですよ。牝馬だって走りますしね」

「そんなことを言ってるじゃねえんだよ！ ガキでも許せねえってのに、こんなお嬢ちゃんがおれたちの向こうを張って走ろうってんだぜ？ おまえも怒れよ、よくもフラシコの 天馬競 をなめてくれたもんだつてよ！」

「こちらの方は、あなた同様、正式な受付をすませています。問題はありません」

「そういう話じゃねえだろ！ フラシコの男どもはどうなってんだよ、自分のとこの葡萄酒で酔っぱらうしか能のねえ腑抜けぞろいかよ！」

男は、今度は係員に相手を変えようとしている。

注意が自分から逸れた隙に、リウはよりくわしく男の馬を見た。

馬は汗をかいている。天馬競に出ようと馬が、町からこの中継地までの移動程度でここまで汗をかくわけがない。現にバルメルトウは息ひとつ荒げなかった。

「この子、具合が悪いんじゃないの？」

リウは鋭い声を男にかけた。

男の顔がはじかれたようにリウに向いた。

「うるせえ、よけいな世話だ！」

その瞬間、リウは男の心を理解した。

男はもちろん、自分の馬の異変に気づいている。気づいていながら、しかし出走を取りやめる決断を下せずにいる。

これだけの馬だ。本調子であれば、イシャーマ牧の月毛には及ばずとも二位を十分にねらえる。

男が何者なのかはわからない。だが、相応の時間と費用をかけてこの天馬競に出てきたことは疑いようもない。今回は見送って次を待つという気にはなれなかったのだろう。

自分だったらどうしただろう、とリウは考える。今朝、もしもバルメルトウが発熱していたとしたら、あるいは脚に異状が見つかったら。素直に出場をあきらめることができただろうか。その答は出ないまま、リウは男にさらに言う。

「だって、どう見てもおかしいのに！」

「人の馬にかまうんじゃないねえ！ 女でも容赦しねえぞ！」

「取り返しのつかないことになったらどうするの？ 天馬競は

ここだけじゃないよ」

「うるせえって言うてんだろ！ おまえみたいな道楽で出てるのと違うんだよ！」

「わたしだって道楽なんかじゃない！」

リウはかっとなった。

「わたしにだって、絶対に勝たなきゃいけない理由がある！ だけどー！」

叫ぶと同時、先ほどの答が出た。リウは男を真っ向から見つめる

ために胸をそらせた。

「それは、バルムがいてくれなきゃ絶対になわなないことだもの！もしバルムの具合が悪いなら、わたしはあきらめる。バルムだったら次こそ勝つって、信じられるから。自分の馬だよ、どうして信じてやれないの？」

「うるせえ、うるせえうるせえ！次こそって簡単に言ってくれろじゃねえか！そう簡単に次がねえやつだっているんだよ！」

「だけど馬がいなかったら、次もなにもないじゃない！この子は病気なんだよ！」

「おれの馬はあがり症なんだよ！見てろ、てめえの兎なんか置き去りにしてやらあ！」

顔を真っ赤にした男は、脚の運びもぎこちない馬を無理やりひっぱり、リウから離れた。

リウは助けを求めて係員を見やった。しかし係員はかぶりを振った。

「規則では、棄権は本人の意志がないとだめなんですよ」

他の乗手たちも、一連の騒動などなかったかのように沈黙している。災難だったなというようにリウに肩をすくめてみせた初老の男がひとりだけで、あとは目を合わせもしない。まして男に忠告などしてやるうという素振りを見せる者など、いるはずもなかった。

リウは初老の男にうなずき返し、体ごとバルメルトウに振り向いた。

「……そういうこと、なんだろうね」

二十八人の乗手がいて、二十八の勝ちたい理由がある。そしてそのほとんどが、勝たねばならない事情へとつながっているのだろう。リウ自身、バルメルトウを天馬にするという目標のために勝ちたい。牧を存続させるという目的のために勝たねばならない。

そんな者たちにとっては、他の馬の不調は自分の幸運なのだ。また別の天馬競で出くわすかもしれない可能性も考えれば、ただ棄権するだけでなく、無理をしたために脚でも折ってくれば、さ

らに都合がいい。

冷たい世界だった。背が急に薄ら寒くなった。リウは唇を噛みしめ、離れた場所で体をこわばらせている灰色の馬を見つめた。

自分にはそんな権限はない、しかも女に言われればあの男はさらに意固地になるに違いない、それどころか機嫌を損ねて殴られてもしたら　そんな言い訳の奥に、他の無言の乗手たちと同じ意地の悪い願いがひそんでいることを、リウは認めた。

「……わたしも同じ、冷たいやつだ」

胸のあたりにいやな固まりがつかえている。リウはこぶしを置いてみたが、少しも楽にはなってくれなかった。

東の空にぼつんと現われた小さな影が、一直線に旗をめがけて落ちるように飛んできた。

旗竿に止まったのは鳩だった。係員は慣れた様子で鳩をつかまえ、その足の通信管から薄い紙片を取り出し、すばやく目を走らせた。

フラシコの商人は鳩を使って遠隔地とのやりとりをするという話を、リウは思い出した。

係員の顔が紙片からあがった。

「朗報です。二十八組すべてが中継地を発ちました。一着はイシャーマ《黄金姫》組」

不意打ちの順位発表と出てきた名に、リウの心臓がどきんと跳ね上がった。

「書いてあるのは一着だけなのか！」

それまで静かだった乗手たちが騒ぎ出す。

「もちろん他にも書いてありますよ」

乗手たちは再び口をつぐむ。

係員の声を聞きながら、そのくせリウの頭の片隅は勝手に別のことを考えている。

イシャーマ牧が出す組は、毎年　天馬競　どころか　大天馬競の常連だ。複数の組が出る年もある。そのせいかどの年でも、イシャーマとだけ登録される組はない。イシャーマ・ダールグ組、とい

つたふうには、その組を管理している一族の者の個人名も同時につけられる。

「二着、かなり離されたようですが、マグファル組」

昨日、リウはフラシコの町でカズートを見た。今日出走している組は、だからきつと彼が管理している。だが、彼はその組に自分の名をつけなかった。《黄金姫》などという、以前だったらリウにかかわれることを怖れて絶対に避けたに違いない名前をつけた。

「三着、ゴープン組」

そんな柄にもない名前をつけた理由が気にかかる。どうでもいい、関係ないと思いつつ、リウの存在について気づくことのなかった昨日のカズートの姿が脳裏を離れない。

「そして半馬身差でランダルム組です」

「え！」

いまの係員の言葉を聞いたリウと、カズートについて考えていたリウと、くつきり分かれていた自分がまたひとりの自分になるまで、少し時間がかかった。カズートのことを無理やり頭から追い払う。

「四位……」

シャルスが乗るエギルは胸の狭い鹿毛の馬で、見るからに俊敏そうなき締まった体躯と黒い四肢を持つている。シャルスが「高慢ちき」と笑うように日ごろ高々とかがげられている頭は、走り出した途端に低く伏せられて風を切る。

「やったよ、バルム」

バルメルトウの深い色合いに染まった瞳の底で、ちかりと光がまばたいた気がした。

ん、とリウはその瞳にうなずいた。

「ユーリシスもきつとやってくれる。だから、わたしたちもがんばろう」

係員の発表が終わった。さらに緊張の高まった中継地で、乗手たちは飽きもせずそれぞれの仲間が走ってくるはずの東を見つめた。ゆるやかにうねった大地を吹きわたる風、そして馬たちの足踏みや

息づかいばかりの中、人の声はまったくあがらなかった。

来た、という誰かのつぶやきが、だからやけに耳に響いた。

背にひらりとまたがった乗手を乗せて、かつかつと蹄を鳴らしながら踊るような足取りで位置についたのは、イシャーマ牧の月毛の馬だった。その首はほどよく曲がって、きつからずゆるからず手綱を受け止めている。それは乗手の見事な手並みによるものなのだが、まるで馬自身がこれから走る自分へ気合いを入れているかのように見えた。

緑の地平線を描く草原に現われた点は、見る間に乳色の馬とその乗手の姿へと変わった。

月毛の馬は十分に皆から遠ざかり、他の馬も乗手もなんの邪魔にもならない。それでも、おそらくは無意識のうちに圧倒されて、さらに数歩をよけた者たちがいた。

リウはよけなかった。けれども、まばたきを忘れたような顔は、自分も彼らとまったく変わらないだろうと思った。

天馬の疾走が始まる　この場に居合わせた者はすべてそのことに心を奪われていた。

やってきた乳色の馬の乗手には、顔を覆った風防布をとって笑う余裕すらあった。月毛の馬の乗手は落ち着いて旗棒を受け取り、仲間に片目をつぶって馬の腹を軽く蹴った。

薄く張りつめた月色の皮膚には、十分すぎるほどの合図だった。月毛の馬が走り出した。鋭い蹄にえぐられてはじかれた土くれがリウの足もとにまで飛んできた。

残された者たちは、ため息すら出なかった。

仲間を見送った乳色の馬の乗手はそんな観客たちに一瞥すら送ることなく鞍を下り、軽く息をはずませながら、水を求めて係員に近づいていった。

次は　リウは再び東へと目をむける。

たしかに、すでに金系のリボンの行方は決まっているかもしれない。それでも銀系のリボンはまだ残っている。リウは観客としてこ

ここに来たつもりはない。勝利を勝ち取り、大天馬競への出場権を獲るためにここにいる。

お願い、トリウは口の中でつぶやいた。

ランダットがノア牧で選んだ馬は、以前ダールグに買い取りを拒否されたユーリススだった。シャルスは別の馬をランダットに見せようとしていたのだが、彼は通りがけに見かけたこののんきそうな馬に目を止め、こいつ、と簡単に決めた。

「こいつは真面目に走るよ」

ユーリススは、性格のいい、優しい馬だとリウも思う。しかし走る馬、それも大天馬競に勝ちうる馬だとはとても思えなかった。けれどもランダットが勝ちたいならこの馬だと主張したため、シャルスもリウもその意見を認めるしかなかった。

半馬身差の四位で旗棒を渡されて、ユーリススは前の馬に追いつくことができただろうか。考えれば考えるほど、むしろますます差を広げられるさまが浮かんでくる。

「……だけど」

天馬競は、まっすぐに短い草地の競路を駆け抜ける草競馬とはまったく違う。競路は長く、曲がり、荒れて、自然のままの坂も少なくない。そんな厳しい競路を長時間走らされる馬の中には、すっかりくたびれて、走ることにうんざりしてしまう馬もいる。ユーリススが真面目に走る馬だというのなら、少なくともそうしたことはないだろう。

「がんばって。がんばって」

リウはまた手綱とともにバルメルトウのたてがみに指をからめる。わずかにバルメルトウが身じろいだ。

リウの指のせいではない。不注意なほど近くを、あの無礼な男が灰色の馬にまたがって通りがかったせいだった。

「気をつけて！」

リウは抗議した。馬は本来臆病な生きもので、不意にひきあわされれば、相手が同じ馬といえどもおびえて混乱する。運が悪ければ

思いがけない事故にとなりかねない。

だが、男は鼻を鳴らしただけだった。

「気をつけるのはそつちだろうがよ。ちゃんと聞いとけ、次に来るのはうちなんだぜ」

二位と発表があつたマグファル組の者らしい。

リウはむつと眉根を寄せながら、バルメルトウと相手の馬とのあいだに体を入れる。

「礼儀正しく名乗ってもらえたんなら、そういうこともわかったかもしれないけどね！」

「ああうるせえな、女の声は甲高くて耳に痛えや。おとなしく台所で歌でも歌つてろよ」

「わたしにかまうより、自分の馬を気づかってやったら」

「うるせえ！ おれの馬はおまえと違つて使える女なんだよ！」

東にまた一騎、姿が見えた。

「急げ、こつちだ！ 来い、急げ、ぐずぐずするな！」

鞍上の男は、片手を振り上げたり西を見たりと、あわただしい。

そのたびに身じろぐ灰色の馬の足踏みは、先ほどの月毛の馬とは違い、気合いを入れているのではなくいらついているだけだ。リウは目を細くする。だが、この哀れな馬のためにできることは、まったく見つからなかつた。

「くそっ！」

奪い取るように仲間から旗棒を受けると、男は馬の腹を思いきり蹴りつけた。馬は半ば躍り上がるようにして駆け出した。ぱしつ、とかすかに風に乗って聞こえた音は、男が早くも入れた鞭代わりの平手だ。

男は勝負をあきらめていない。先行してとつくに姿も見えなくなつた月毛の馬を追いかけ、追い抜くつもりなのだろう。

それは競技においては褒められるべきことなのかもしれない。けれどもリウにはどうしてもそう思えなかつた。

「嬢ちゃん、ランダットと組んでるランドルム組つてのはあんただ

る？ 出番だぜ」

灰色の馬の行方を見つめていたリウは、その声にはっとわれに返った。

先ほど肩をすくめてみせた初老の男が、東を指さしている。

「帽子もかぶらないであの赤毛頭を見せびらかしてるのは、あいつくらいのもんだ」

ちょうど雲の切れ間からのぞいた陽射しが馬と人ともに降り注ぎ、それぞれの毛をそれぞれの色にきらめかせている。日ごろは熟し切った大麦のようなユーリススの毛色は、いまは天頂高く輝く太陽のようだ。その上下する馬首のむこうに、赤毛が見え隠れしている。

リウはバルメルトウにまたがった。頬はむしろ冷えてきているのに、その内側にかあつと熱い血がのぼっていく。興奮してる、とりウは自分自身を分析し、知らず笑う。

三位。こんな上位で旗棒を受け取ったことは、まだ一度も経験がない。シャルスとエギルが、そしてランダットとユーリススが、この順位を勝ち取ってくれた。バルメルトウに初めて他の馬とのまともな勝負の場を与えてくれた。

ユーリススが、そしてランダットが来る。

「リウ、気楽にな」

なにより本人がそう実践しているに違いない顔で、ランダットは旗棒を差し伸べた。

「んー」

リウは旗棒を受け取ると同時に、バルメルトウの腹を軽く蹴った。ぐんと心地よい手応えが返り、バルメルトウは走り出した。

旗棒を背のベルトにねじこみながら、リウはユーリススの顔つきを思い出す。馬は自分の走りに満足したようにいつもよりなお楽しげで、まだまだ走りたそうな様子だった。

リウはぴんと前をむいたバルメルトウの耳にむかって話しかける。「わたしたちも楽しく走って、そして勝つよ、バルム」

事前の準備は十分とは言えない。宿代がなく競路を自分の目で見

ることは叶わなかったが、それでもシャルスやランダットが人脈や過去の経験から情報を集めてくれた。

だから知識はある。フラシコの三走の競路は、前半と後半でがらりと様子を変える。

前半は、ほぼ人の手の入ったことのない草地になる。野鼠や野兎の巢穴、草に隠された思いがけないぬかるみや岩に注意し、馬に足場のよい場所を走らせてやるのが乗手の役目だ。リウは少しの異変も見逃さないよう、次々迫る地形に目をこらす。

馬の背は、リウが楽々後ろに寝転がれるだけの広さがある。しかし 天馬競 で疾走する馬の背にかぎっては広くはない。

疾走する馬の邪魔にならないよう、 天馬競 ではできるだけ馬に触れる自分の面積を少なくする。鞍にすべての体重を預けて座ってしまうのではなく、盛り上がった鞍の前部に体を押しつけながら、鐙の上にほぼ自力で立つのだ。

町育ちの娘より体力はあると自負していたリウだが、初めて出た 天馬競 では脚がつつた。それほどの負荷が体にはかかった。しかしリウが楽をした分はすべて、バルメルトウが引き受けることになる。それを思えば、完全に座ってしまうことなど考えられない。

行く手、短い若草の生えた地表が一部見えない。窪地だ。迂回か跳躍か。リウは瞬時に判断し、手綱で合図を送る。

バルメルトウはわずかな手綱の力加減をすぐに悟り、地面を蹴る。一瞬ふわりと空を飛んだりリウの体を、すぐに着地の衝撃が襲った。リウはそれをできるだけ柔らかく受け止め、かつ上体も揺れないように精いっぱい踏ん張って、バルメルトウの体勢をくずさないように努めた。走る馬でも二時間はかかる六リーグの競路はまだ続く。バルメルトウの脚に少しでも楽をさせてやらねばならない。

「あ」

風防布の下、リウは小さく声をあげた。風に細めた目に、なだらかな坂道を下った先を走る馬の姿が飛びこんだ。

天馬競 の全競路は十八リーグにもなり、主催側もそのすべて

をいちいち監視などしていない。入りこむ部外者がいないとは言えないが、名誉の競技として尊重される 天馬競 を邪魔するような者は、少なくともリウはこれまで聞いたこともない。

出走者だ。

だが走りに鋭さはない。脚の伸びは悪く、運びもぎこちなく、すべてが重そうに見える。

バルメルトウはぐんぐんと距離を詰めていく。

もうはつきりと馬と乗手が見える。あの灰色の馬と男だ。

男もリウの接近に気づいた。乱暴な声がし、丸められた男の背がぐいぐいと動きだした。

「ひどい……」

リウはつぶやく。

馬の首を押してやれば走りの助けになる。だが、このような長距離で、しかも走れるような状態ではない馬をそうするのは、馬の気持を無視した乗手の暴力でしかない。

バルメルトウが並びかかる。

「やめなよ！」

リウは顔をねじむけて叫んだ。

歯をむいた男の顔は、人というより獣のようだった。

「うるせえって言うてんだろ！」

「でも！ ここで勝ったって、その子が無茶のせいで壊れたらなんにもならない！」

直後、男の目もとが不意にゆがんだ。

それが笑顔なのだど理解するまでやけに時間がかかり、そして理解した瞬間、リウはなぜかぞっとした。

「……だったら、ちよいと助けてもらうぜ」

灰色の馬がぐらりとこちらによるけかかった。

とっさにバルメルトウをよけさせようとしたが、反射でしかないリウの合図より、最初からその行動を計画していた男の手のほうがわずかに早かった。

「っ！」

ずるりと鞍が引き戻された気がした。

体を傾けた男の手が、バルメルトウの鞍下に置いたキルトをがっしりつかんでいる。男の手で二頭の馬は結びつけられ、速力に勝るバルメルトウはいまや灰色の馬をひきずりながら走っていた。その脚にかかる負担は、いつもの倍だった。

「やめて！」

リウは叫んだ。怒りと、それよりもさらに大きな恐怖で、自分の声が裏返ったことにすら気づけなかった。

「へん、ちゃんと女らしい声も出せるじゃねえか」

男はキルトをさらに手の内にたくしこんだ。体の下でずるりと鞍まで動いた気がした。

馬体に触れる足と手綱から、バルメルトウの困惑が伝わってくる。思うように走れない困惑はまもなく苛立ちに変わり、そしてバルメルトウの性格ならば無理やりにも飛び出そうとするだろう。

この不安定な状態で、そんなことになったら　リウの全身の血は逆流しそうだった。

「やめて！　離して、離してよ！」

「女の泣き声は嫌いじゃねえんだよな、特に生意気女の泣き声はな」

「こんなことして、どんな意味があるの！」

「あるんだよ、いろいろとな！」

「どこまで自分の馬をばかにする気！？　馬だけじゃない、自分自身まで！」

「自分をばかにして勝てるんなら、いくらでもばかにしてやらあ！」

男の手は離れない。それよりも刺し縫いにした丈夫なキルトの布地が裂けるほうが、まだ可能性が高そうだった。

その間もバルメルトウは走っている。四肢にかかるいつもの倍の重さと、そして片側にひきずられる不快な感覚を必死にこらえている。

リウは男の手をはらおうとしたが、体をひねった無理な姿勢で、

しかも女の力ではたく程度では、男の手はびくともしなかった。

わたしがバルムを助けなきゃ　　リウはとっさに自分の鍔広帽をつかみ、半ば投げつけるようにして鍔のへりで男の目もとを薙ぎはらった。

「がっ！」

男が悲鳴をあげて両手で顔を覆った。

不意に自由が戻った。リウはすかさず体を前に倒した。バルメルトウは一気に加速した。風は耳もとでうなりをあげて、鍔広帽を失ったリウの髪を大きく背後に跳ね上げた。

心臓がどくどくと壊れそうな激しさで動いている。

男がどうなったのかわからない。あのまま落馬したかもしれない。もしかしたらけがをしたかもしれない。自分はとんでもないことをしてしまったのかもしれない。けれども、あれ以外どうすればよかったのか、まったくわからない。混乱する思いが、さらに鼓動を激しくさせる。

このまま胸が破裂して死んでしまいそうだった。リウは片手を離して胸もとを押さえた。

手綱の力が変わったことを不審に感じたバルメルトウが、わずかに速度をゆるめた。

「ごめん、バルム！」

自分にかまけている場合ではない。リウはすばやくびしゃりと自分の頬を打って、また両手で手綱を取る。

バルメルトウとリウはともに　天馬競　を戦う仲間なのだ。実際に走るのには馬といっても、その背にただ乗っただけでは、乗手は鞍の上のお飾り人形と変わらない。リウにはリウの役目がある。バルメルトウを心地よく走らせるという役目だ。

「行くよ、フラシコまで一直線に」

バルメルトウの脚にまた力が戻った。

やがて、あたりは整地された葡萄畑ばかりになり、リウは広々とした道の果てのフラシコめがけてさらにバルメルトウを走らせる。

葡萄の葉で飾られた門を一気に駆け抜けけると、左右から観客の祝福の聲が降りそそぎ、銀糸がきらめくりボンを持った係員が迎えてくれた。

だが、そこにはもう月毛の馬はいなかった。

十

バルメルトウの馬房の前で、リウはずっと座り込んでいた。

長時間騎乗した体は節々がこわばり、背のあたりが特に痛む。本当ならすぐにも休みたい。だが、シャルスが個室をとってくれた今夜の部屋に戻る気が、なぜか起きなかった。

「……二位、か」

リウは指先に引っかけたリボンを顔の前にぶら下げた。あれだけ欲しいと熱望していたものをこうして手に入れたのに、少しも心は晴れない。リウは両膝に顔をうずめた。

厩舎に人の気配がした。

リウはびくりと体をすくませ、だがそのまま顔は伏せていた。

「リウ、お祝いをしないか。ささやかなものだけけど」

シャルスの声を聞いてやっと、リウは顔をあげた。

「ありがとう、だけどいいよ。余分なお金はないから」

もともとは騎士の名誉を賭けた挑戦だった。天馬競の賞品は、本来勝利や完走を讃えるリボンだけだ。だがいまの天馬競は大きな祭であるのと同様、開催する町の力を四方から集まる見物客に誇示するという面が大きい。よってどこの町でも一位と二位には豪華な副賞をつけ、勝者に贈る。

フラシコの町の副賞は、去年フラシコ一番の出来と認められた葡萄酒の大樽だった。もちろん持ち帰っていいのだが、そのまま町の葡萄酒商人に引き取ってもらうこともできた。

リウは自分の取り分をそうして現金に換えると、シャルスにはこれまで立て替えてもらった費用を、またランダットには助っ人の礼

金を支払った。それでも手もとにはまだ残っていたが、それも今後の参加費用にあてるつもりだった。

「費用は気にしなくていいって言っているじゃないか。これは僕の戦いでもあるんだ」

「そう、だからシャルスは払ってくれてる。だけどこれは、わたしの戦いでもあるよ。それなのに義務を果たさないなんて、自分でいやだ。自分の分は出させて」

「そうか。じゃあ今日は、気分をよくした僕のおごりということを受けてくれないか。初めての 天馬競 で自分も四位、組も二位だったんだから」

リウはシャルスを見つめ、静かにかぶりを振った。

「……ごめん。本当のこと言うと、お祝いする気分になれなくて」「やっぱりあのことを気にしてるのかい？」

「……」
「気にする必要なんてないんだよ、リウ。きみは到着後すぐに自分のしたこと、その男のしたことを報告したし、係員と他の乗手も中継地で男がきみにつつかかっていたことを証言している。きみのしたことは正当防衛だ」

リウは黙って唇を噛みしめた。

「さつき、その男が広場に着いたよ」

「えっ」

「到着を僕も見ていたんだ。相当にひどい乗り方をしたんだろう、鞍を下りていたよ。頭を振って逆らう馬を引つ張ってきた。自分は不当な暴力を受けたんだとわめきたてながらね。僕も抗議しようとしたんだが、それより早く誰かが野次を飛ばしたんだ」

「なんて？」

「要は女にやられた大まぬけってことだろ、ってね。その場にいたみんな、係員まで吹き出したよ。それで自分の情けなさがやっとなかったんだろうね、すすすご立ち去ったよ」

「……そう」

「僕たちの二位は正式に認められたんだ」

リウはうなずいた。だが、誰にどう言ってもらおうと、自分がしたことは自分が一番よくわかっている。男と馬が無事に戻ってきたことで少し気持ちは楽にはなったが、少なくとも今日は、リウは自分の二位を喜ぶ気にはなれなかった。

「……ん、でも、ごめん」

「わかった。だけど、ここはもう引き上げたほうがいいな。きみは疲れている。僕たちはあともう一回、勝たないといけないんだよ。休んで体調を整えるのも義務のうちだ」

「ん、そうする。でもあとちょっとだけ、ここにいさせて」

「本当に大丈夫かい、リウ？」

リウは無理に笑顔を作った。

「大丈夫」

ふたりの視線が合ったまま、一瞬の間があった。

「」

シャルスがさらに近づいて体をかがめかけたのと、リウがはじかれたように立ち上がったのは、ちょうど同時だった。

先ほどよりもっと短い間を埋めるため、リウはすかさずにこりとした。

「ね、大丈夫だって」

視界の下のほうで、さりげなくシャルスの手が引き下がった。彼も微笑んだ。

「ほどほどで部屋に戻るんだよ、リウ」

シャルスは立ち去った。

リウは半ば無意識に胸をおさえ、胸の中がからっぽになるほど大きな息をついた。

後ろでバルメルトウがぶるつと鼻を鳴らす。

「もう、のんきに笑ってないですよ！……びっくりしたんだから」

リウは唇をとがらせ、体ごと馬に向きなおると、差しのばされたバルメルトウの首に抱きついた。そしてそのまましばらくそうして

いた。

今度はぱたぱたと小走りの足音が厩舎の外から聞こえた。

「リウさん、いらっしやいますか？」

心細そうな少女の声がリウを呼び、厩舎の入口にひよこりとローナの顔がのぞいた。

「ああよかった、リウさん！」

「ローナ！ 来てたの？」

走り寄ってきたローナはあいさつもせず泣き出しそんな顔になり、心配で心配でたまらないというように両手を揉み合わせた。

「どうしたらいいんでしょう！ あたし、もうリウさんしか思いつけなかったんです！」

「え？ ねえローナ、落ち着いて。ランダットさんになにかあったの？」

「今日は父ちゃんじゃないんです！ あの、カズート若さまが」

不意に聞いてしまった名前がちくりと胸を刺した。リウは懸命にその小さな疼きを否定しながら、ローナの話をつながした。

「カズートが、どうかした？」

「あの、あたしに馬をくれて！」

「え？」

「馬なんですよ、馬！ 木馬とか屋台のおもちやとかじゃなくて、本物の！ けどあたしただのメイドだし、牧にもうちにもそんな馬なんて置けないし、だからってまさかいただいた馬を売っちゃうわけにもいかないし、もうどうしたらいいかわかんなくて！」

「馬？ どうして？」

「わかんないです！ さっき若さまが宿に戻ってきたと思ったら、いきなりやるって言って。冗談かと思ったんですけど、ほんとに宿の厩舎に見慣れない馬がいるんです！ 一緒に来てる牧の人に言っても、よかつたなとかいい馬だぞとかって笑ってるだけで！」

まだその目に涙がないのが不思議なくらいだった。

「あの馬、どうしたらいいんでしょう、リウさん……」

リウは腹が立ってきた。シャルスとの約束がある以上、そしてひどいことを言ってしまった以上、カズートに会うわけにはいかない。それでもこの勝手ぶりはどうかと思った。

まずはローナを落ち着かせてやらなければならない。

「とりあえず、どんな馬なのか見せてもらおうか？ わたしでよければ、だけど」

「はは、はい！ ありがとうございます！」

ローナが案内した宿は、宿屋の多いフラシコでもひとときわ目立つ大宿だった。これならカズートと顔を合わせることもないだろうと、リウは広い中庭を横切り、厩舎へ入った。

「この馬なんです……」

壁に反射する夕暮れの残光に照らされた馬房には、あの体調を崩していた灰色の牝馬がいた。こちらに尻尾を向けていらいらと馬房の中で体を揺らしているものの、体はきちんと拭いて毛布をかけてある。あの男が自分の馬にそんな手をかけてやっていたとは、リウには信じがたかった。

「この子、ローナが拭いてあげたの？」

「まさか！ 牧の人の話だと、若さまがいきなりこの馬を連れてきて、自分で世話をしたつて。すぐ戻るからつて、またその後どこかに行つちやつたみたいですけど」

おいで、とリウは低い声で灰色の馬を呼んでみた。牝馬らしい華奢な頭が振り返った。だが、なにかがおかしい。リウは目をこらした。

違和感の原因はすぐにわかった。馬の鼻先をすつぱり覆う口がかかけられている。

おいで、とリウはもう一度呼んでみた。

馬はゆっくり脚を運んで体の向きを変え、リウが差し出した手のひらの匂いを口かご越しに念入りに嗅いだ後、ちゃんと触れた。

「おまえも今日、がんばったんだもんね」

リウがそうつとなでてやると、馬はわずかに動き、ぶるつと鼻を

鳴らした。

「ほんと、どうしよう……」

ローナが困り切った声でつぶやいた。

「あたしがここに来たのは、若さまにあらかじめお部屋を準備しておくようにって言われたからなんです。たしかに、お掃除とかも宿の人にまかせないで、ちゃんとしときましたけど、だからってこんなご褒美をもらうようなことじゃ……ああ、フラシコ行きなんて断わっとけばよかったです。父ちゃんも出るって聞いて、だったらなんて思っちゃって……」

「でもとってもいい馬だよ、この子。わたしたちと三走で走ったんだから」

けれどもローナは、そうですか、としょんぼりした上目づかいになっただけだった。この持て余すしかない贈り物をどうしたらいいのか、それだけで頭がいっぱいなのだろう。

「ローナ。もしよかったら、この子、うちの牧で預かっておこるか？ 一頭くらい増えたって、手間はそう変わるものでもないし」「えっ！ ほ、ほんとですか！」

「ん、いいよ。うちだって一応は牧なんだし、それにランダットさんにはお世話になってるから。わたし、お金がなくなってお礼を十分払えないから、せめてその代わり」

「そんな、お礼だなんて！ ああ、だけどほんとに、ほんとにありがとございます！」

ぱあっと明るくなったローナの表情に、リウもつられて微笑んだ。そのとき、言い争う男たちの声が聞こえた。

ひとりはカズートだった。リウはあわてて厩舎の窓辺にはりつき、外をうかがった。

中庭に長々と影を落としてこちらに大股に歩いてくるカズートを、牝馬の持ち主だったあの男がまとわりつくように追っている。

「やいやい、これっばちの端金であいつを持ってく気が！ あいつはおれの相棒だぞ！」

大きく傾いた日が影を落とすカズートの顔は、いつもにも増して鋭く見える。

「なにが相棒だ、体調の悪い馬を走らせて疝痛で殺しかけたやつが、笑わせんな」

やっぱり、とりウはわずかに眉をひそめた。馬は疝痛　腹痛を起こしやすい。放っておくと、苦しみ抜いた末に死んでしまうこともある。水を飲ませて歩かせ、症状が落ち着いた後もこのように口かごをつけて絶食させて、しばらく様子を見なければならぬ。

馬を扱う人間にとっては常識だ。男の顔が真つ赤なのは、夕日のせいではないだろう。

「う、うるせえ！ おれが取り上げて育ててきた馬だぞ！ おれが一番わかってらあ！」

「ああ、馬だつてわかっているだろうよ。走ったばかりの、しかも具合の悪い馬をほつたらかしにして早々に酒場行きとはな。おまえはどうしようもない、やられっぱなしの大まぬけだ」

「せ、世話の前にちよいと一杯ひっかけようとしただけだ！」

「だから好きなだけ飲んでろよ。馬を手放せばいくらだって飲んだくれてられるぜ」

「よけいなお世話だ！ とにかく返せ！」

カズートは財布をつかみだし、ちよつと自分の前に回り込んだ男に投げつけた。

「てっ！」

男の胸にぶつかった衝撃で財布がひらき、澄んだ音をたてて金貨が中庭に落ちる。まるで星が出る場所を間違えたかのように、そこかしこがまぶしい金色にきらめいた。

「まだ不満か」

男ははつとカズートを見上げると、すぐさま這いつくばって散らばった金貨をかきあつめた。そしてもう一度、地べたからカズートを見上げた。

「い、いえ、考えてみりゃ、あいつもイシャーマ牧に行くなら幸せ

つてもんで……へへっ」

冷たく見下ろす鋭い目に、金貨と財布を両手でかかえこんだ男は卑屈な笑い声をあげる。

「行けよ」

「へ、へえ、どうも、若さま」

男がカズートを気にしながら中庭を出ていっても、再び大股に歩き出したカズートはそちらをまったく見ようとしなかった。

厩舎の前、馬が一頭もつながない横木にさしかかって、不意に立ち止まる。

あ、とリウが小さく声をあげるのと同じ時、カズートはその支柱を思いきり靴底で蹴りつけた。音が中庭に響き、空の横木が目に見えて揺れるほどの勢いだった。

「カズート……」

リウはつぶやいた。

金では買えないものがある。だが、買えるもの、買えてしまうものもたしかにあって、それを買ったカズートは、むしろ買えたがためにいらだっている。金で人の心を変えた自分自身に怒っている。

「どうしたんですか？」

ローナの声に、はっとわれに返る。

「そうだ、ローナ。わたしはここにはいないことにして！」

返事も待たず、リウはすでに暗くなつた厩舎の隅の空いた馬房に飛びこんだ。

「え、えっ？ あ、カズート若さま！」

ローナの声に続き、カズートの声がある。

「なんだ、見に来てたのか」

「あ、えと、あの その、リウさんに見てもらってたんです」

自分の名前が出た後の一瞬の沈黙に、リウは息を止めた。

「 預かるって、あいつ、言ったか？」

「あ、は、はい！ ……あの、どうしてわかつたんですか？」

「別に」

ぶる、と馬が鼻を鳴らす。聞き取れない低いカズートの声は、ローナではなく、馬に話しかけたものだろう。

ためらいがちにローナが切り出した。

「あの、若さま、御用はございせんか？」

「今日は好きにしていっていいって言っただろ。父親とお祝いでもしてきたらどうだ。あの宿の食堂が気に入らないなら、こっちに連れてくればいい」

「いえ父は、あっちの宿のほうの方が楽しかったって絶対に言うと思うんですけど。……あのう」

「なんだ」

「若さまのご親切には、あたし、ほんとにほんとに感謝してます。

父もこの 天馬競 に出るって知ったから、それであたしに会わせてやるうとしてくださっただんですよね」

「宿を押さえておいてもらっただけだ。おれは昨日まで来られなかったから」

「でも、こんなすぐに父の宿まで調べてくださって」

「ついでだからな。せっかく同じ町にいるのに会わないままなんて、ばかがすることだろ」

「あのう、だけど、そんなによくしていただくと、もったいないっていうか、どうしたらいいかわかんないっていうか……」

「気にしないでいい、おれの勝手だ。この馬を押しつけたのも迷惑だったよな」

「い、いえ、そんな」

「ダールグ兄貴がうるさいんだ。助けると思っってもらっといってくれ」

「はあ……」

「とにかく気にしないでいいから、お祝いに行ってこい」

「は、はい。あの、でも、若さまは？」

「こいつの様子を見る」

「牧の人を呼んできませんしょうか？」

「たいした時間じゃない。それに、あいつらも祝杯をあげてるはず」

だ。邪魔するな」

「ですけど、勝ったのは若さまの馬ですよ？」

「おれのじゃない、親父の馬だ。いいから早く行ってこい。日が暮れるぞ」

「あ、は、はい、すみません！」

小さな足音がためらいがちに去っていった。

窓から入る夕明かりも、次第に暗くなってきている。

「あのばか、おまえに乗ってたやつを帽子で殴りつけたんだって？
灰色の馬に話しかけているらしい、カズートの声でした。」

「おまえも驚いただろうな。だけど許してやってくれよ。それくらの本物のじゃじゃ馬でないと、天馬競 なんて勝てないんだ。あいつの二位は、バルメルトウだけじゃなくてあいつも本物だったことだ よかったよ」

カズートは息をついた。吐息にはわずかな笑い声がまじっていた。「あいつ、口先ばかりだからな。日ごろは威勢のいいことを言うてるくせに、妙なところで気が弱いんだ。ああ見えて、これまで誰かをひっぱたいたこともないんだぜ。鞍を引きずられて落馬しそうだったのは自分だっていうのに、それでも相手を落馬させたことをうだうだ悩んでたんじゃなくかと思ってた」

む、とリウは唇を曲げる。カズートの推測の正しさは認めるしかないが、それでもこうも的確に言い当てられるのは口惜しい。

声はさらに続く。

「でも、おまえを見に来て、預かるって言ったんだろ。落ち込むよ
りおまえとローナを心配する気持ちのほうに勝ったわけだ。あいつ
もこの一年で、少しは大人になったんだな」

偉そうに、とリウは内心言い返す。頭の中で彼への文句を並べ立ててやるうとする。

だが。

「っ……………」

衝動は突然だった。

熱い固まりが胸の底からこみあげて、喉につかえた。

すぐに瞳の奥が反応する。じんとした熱が涙となつてこぼれ落ちる前に、リウは曲げた両膝を抱え込んで顔をきつく押しつけた。

本気で『カズート若さま』って呼ばせたいの!?

リウはカズートが一番嫌うことを言った。イシャーマの金と力を振り回しているとなじった。彼が純粹な好意で助けてくれようとしていることはよくよくわかっていながら、それを拒絶した。彼の気持を冷たく踏みにじったのはリウだった。

なのに、カズートはリウを許してくれている。

よかつたよ、と自分の牧の馬の一位よりもリウの二位を喜んでくれている。

カズートはやっぱり変わっていない。一年見なかつたあいだに、綿の風防布から絹のスカートに変えてはいても、中身はリウが知っているカズートのままだ。

彼の前に出て行きたかつた。黙って聞いてれば勝手なことばかり、と思いきり舌を突き出してやりたかつた。きつとカズートは驚いて、たじろいで、それでもすぐに気を取り直して、実際そうだろうがと言い返すだろう。そしてその後ぶっきらぼうに、やったなと祝福してくれるだろう。

「……………」

リウはますます膝を抱え込んで、さらに体を縮める。

まだまだ　リウは自分に言い聞かせる。まだカズートには届かない。自分の力でそこまで行って、そうしたらやっとリウは対等の立場だと自分を思える。彼と向き合える。彼にちゃんと謝ることができる。また前のように話をする資格があると、胸を張って彼に会える。

馬を気づかうカズートの声を聞きながら、リウはずっと膝に顔を埋めていた。

しばらく馬の様子を確かめてから厩舎を出たカズトを見送って、そろそろと立ち上がったときには、すっかり体は強ばっていた。

五 覚悟

しとどに体を濡らすのは、夏へと一日近づくための優しい春の雨ではなかった。季節を引き戻す冷たい雨だった。手綱を握る指先は手袋の中で冷え切って、すでに感覚が薄い。

けれども、リウの心を冷え冷えとさせている理由はもっと他にあった。

負けた。

雨の先にぼんやりと灰色にけぶって見えるルオーグの町並みを見つめながら、リウは唇を噛みしめる。

わたしのせいだ。

降りしきる雨と起伏が激しいルオーグの競路に、前を行く馬と乗手の姿は見つけられない。もしかしたらもうルオーグの町の中に入って、この雨をも跳ね返すような歓声の中、最後の走りを見せているのかもしれない。

中継地でランダットから旗棒を受け取ったとき、リウとバルメルトウは二位だった。しかも一位との差は五馬身あるかどうかといった接戦だった。まだ馬から下りていない一位の組の二走の乗手のさりげない妨害をかわして、リウは中継地を飛び出した。

ぴんとまっすぐ前を向いた両耳を見るまでもなかった。こんなとき、バルメルトウがどうしたいか、リウはよく知っている。バルメルトウは自分の脚に誇りを持っている。自分の前に行く馬を許すことはない。すぐに追いつき、追い抜いて、相手の馬を打ち負かしてやりたがる馬なのだ。

だが、すでに地面は雨にぬかるんでいた。

すぐ前に見える馬にむきになっていているバルメルトウが、濡れた下り坂で蹄をすべらせることを、リウは怖れた。

「まだだよ」

リウは手綱を引いた。

「まだここじゃない。いい子だから、おまえの脚を見せてやれる平地がこの先にあるから、いまは我慢して、バルム」

だがバルメルトウは行きたがった。リウの声と手綱に逆らい、好きに走らせると訴えた。

いい子だから、お願いだからと、リウは懇願した。

それでも前に行く馬を見てしまったバルメルトウは、リウの頼みを聞こうとしなかった。鞍の下の馬体がいつになく強ばったかと思うと、ふつとその走りから力が抜けた。

平地になつてリウが合図をしても声をかけても、バルメルトウはもはや応えなかった。自分は走らされている、そんな態度だった。追い立てようとすると、頭を振って逆らった。

こうなつてしまつては、バルメルトウが脚を止めないことをよしとするより他になかった。一位の馬からは離され、後から来た三位の馬にまで抜かれた。

ルオーグの広場に到着し、鍔広帽を取ったリウが女であることに気づいた観客が改めて拍手を贈ってくれても、リウはそれに気づけなかった。うつろに完走のリボンを受け取り、おずおずとバルメルトウに顔を向けた。

「……バルム」

いつそう黒みを帯びたバルメルトウの深い色の目は、リウを見ようつとしなかった。

雨のむこうの道に騎影が見えた。マントを深く合わせ、軽くうつむいている乗手の顔はわからないが、高々と首をあげた馬の輪郭は見間違えようがない。リウは歩み寄った。

「リウ、どうしたんだ？」

雨粒の落ちる帽子の鍔をあげて、シャルスが驚いた顔を見せる。

リウは帽子もかぶらず、マントもつけず、ずぶ濡れだった。

「ごめん、シャルス。三位だった」

シャルスには一瞬の迷いもなかった。彼はいつもの微笑を浮かべた。

「そう。また次だね」

「わたしのせいなんだ。わたしが、バルムと喧嘩しちゃったから。

わたしが上手く乗りさえすれば、少なくとも二位だったはずなんだ。そうしたらもう 大天馬競 への出場権が獲得できたのに。わたしのせいで」

「そんな日もある。きみを責めようなんて思わないよ」

「わたしは責めるよ」

シャルスは馬を滑り降りると、自分のマントをリウに着せかけようとした。

リウはかぶりを振り、シャルスの手をよけた。

「先に宿に帰ってて。わたしはランダットを待つから」

「リウ、だったらますますこれは必要だよ。ずぶ濡れでいたら風邪をひいてしまう」

「平気。ちっとも寒くないもの」

「気が張ってるからだよ。こんな冷たい雨に、そんなわけがない」

「本当にいらぬ。わたしより、バルムを見てやって」

「……わかった」

リウの顔を心配そうにのぞきこんでから、シャルスはまた馬上の人となった。

「だけど、ほどほどで帰ってきてくれ、リウ。先はまだ長いんだ」

「ん、わかってる」

うなずいて、リウはすぐに町の外へと視線を戻した。

それからぼつぼつと何人か他の乗手が通り過ぎた後、馬と無帽の乗手が見えた。

「お、どした？」

これだけ雨に濡れていても、ランダットの赤毛はたいしてまとまっていなかった。

「ごめん、ランダットさん。三位だった」
「あー」

ランダットは空を仰ぎ、目を細めた顔に雨を受けてから、またリウに向き直った。

「喧嘩した？」

「……はい」

「そ。ま、でも、しょうがないんじゃない？ あいつ、割とカツとなりやすいやつだから。リウが手綱を引いてやんなきゃ、転んで脚でも折ってたかもよ」

「……」

「ルオーグの 天馬競 が雨だった時点でおれらの負け。ま、次は晴れんじゃない」

ランダットと宿に戻ったりリウは、三人で夕食をとった後、すぐに厩舎に行った。

雨はまだ降りつづいている。そうでなくてもすでに日は落ちていく時刻だ。灯りはともされていて厩舎は暗く、馬たちの鼻息や身じろぎが聞こえるだけだった。リウはぎゅっと目をつぶり、暗がりに慣らしてからバルメルトウの馬房の前に行った。

バルメルトウの気配はあるが、馬房から顔は出てこなかった。

やっぱり怒ってる、とリウはため息をついた。

「……バルム」

声をかけても、馬房の中の気配はまったく動かない。

「ごめん。自分でもわかってるんだ。あれくらい道だったら、おまえなら走れた。そのまま前の馬をつかまえて、抜いたはずだよね……」
「……」

リウは馬房の柵に手を置き、つかんだ。

「もしおまえが、うっん、そんなことはないだろうけど、それでももし、もし脚をすべらせたら。そうならおまえがどうなるかも怖かったし、それに」

ひとつ息を入れ、目をつぶり、それでもリウは苦い真実を口に

た。

「わたしもどうなるか、それが怖かった」

走っている馬が体勢をくずした場合、おかしな具合に無理な力がかかった脚が折れることは決して珍しくはない。

と同時に、乗手も無事ですむことは少ない。放り出されて地面に体を打ちつけるだけならまだいいほうで、馬の首を越えてその前に落ちることになる乗手には、直後に人の一〇倍近い重さの馬体が迫ることになる。馬にもよける余裕などない。硬い重い蹄で蹴飛ばされるか、踏みつけられるか、悪くすれば馬の全体重がのしかかってつぶされることもある。

といって、鞍から落ちなければ無事というわけでもない。馬が転べば間違はなく下敷きとなるため、むしろ危険度は増す。また、鏝に足がひっかかって中途半端に落ちれば、今度は頭を幾度も地面に激突させることになりかねない。

リウは牧の娘に生まれ、育ってきた。毎日馬に乗り、ときどきは落馬した。打ち身などけがのうちに入らないと思っている。

それでも雨の坂で感じた落馬への恐怖は大きかった。

「わたしがそんなんじゃない、バルムが気持ちよく走れるわけがないよね。今日は本当にごめん、バルム。もうこんな思いはさせないから約束する。もう怖がらない。だから許して、またわたしと一緒にがんばって、バルム」

馬房の中の気配が動き、柵に置いた手に息がかかった。

「バルム……」

突き出されたバルメルトウの顔に、リウは頬をつけた。

「ありがとう」

漆黒の馬体の体温が冷え切った体に染みわたっていった。

十

ルオーグの 天馬競 の五日後、リウはノア牧へバルメルトウを

連れ出した。

「バルム、練習してみよう」

軍馬用の調教もするノア牧には、自然な丘を利用して作った坂路がある。馬を駆け上げらせて筋力や心肺能力を鍛えるその路を、リウは駆け下るつもりだった。

あれから十分に乘って、もう一度バルメルトウと心を合わせた。バルメルトウはいつでも勝つために走る。だから、リウも自分の中の恐怖心に打ち勝って、バルメルトウを安全に気持ちよく走らせることに専念しなければならぬ。それが乗手の役目なのだから。

だが、リウの頼みを聞いたシャルスは眉間を曇らせた。

「お願い、シャルス。わたし、同じ失敗は繰り返したくないんだ。もしそんなことになったら、今度こそバルムはわたしを背中に乗せてくれなくなるもの」

「だけどリウ、あれはそんなふうに使う路じゃないんだよ」

「わかつてる」

「もし競路であれくらい傾斜があれば、誰だって鞍に腰をおろして馬を慎重に歩かせる。それくらいの坂なんだ。それを駆け下ろうだなんて、危険すぎる」

「だからいいの。あそこを下りられたら、あれ以上の坂なんてないもの」

シャルスは、今度ははつきりと眉をひそめて、リウを見つめた。

「決して貸したくはないけれど、ここで断わったら、きみはナユス峡谷の崖でも下りかねないな。わかった、使うといい。ただし僕も近くで見せてもらうよ」

「ありがとう、シャルス！ 見物ならお好きにどうぞ」

リウは鍔広帽に髪をたくしこみ、再びバルメルトウにまたがった。ノア牧もランダルム牧に比べればはるかに広い。柵など見えない緑の丘陵の一部に赤の長絨毯を広げたようにして、坂路があった。近づいてみると、赤く見えたのはたっぷりと赤砂をまぜた柔らかな土だった。それが広やかな丘の上まで敷き詰められている。

「距離も質も、イシャーマ牧のものとは比べものにならないけどね」シャルスは自嘲気味に言ったが、リウは聞こえなかったふりをした。

「じゃあシャルス、ちょっと借りるね！」

リウはバルメルトウを丘の上へ進めた。馬を歩かせる分には、平地とは気分が変わって面白いとしか思えない程度の坂だった。大丈夫、とリウは頂上で手綱をひき、バルメルトウを振り向かせた。

その途端、坂は表情を一変させた。

赤い路はまっすぐに、そして長々と丘を下りている。坂の終わりのあたりで馬にまたがってこちらを見上げているシャルスが、棒人形のようにしか見えない。目鼻立ちなどまるで見えず、頭、胴、腕、脚といった体の作りがなんとかわかる程度だ。リウが頂上に着いたと見て取って、片腕が頭の上に持ち上がって振られた。

自分も手を振り返しながら、リウはぞっとした。

距離自体は走る馬に乗っているならたいしたことはない。すぐにも駆け抜けられる距離だ。だが、ほとんど自分の足の下にいるように見えるシャルスの位置が、リウをおびえさせる。ここからさらに鐙の上に立ち上がってしまうえば、その瞬間にバルメルトウの背から放り出されて頭からこの坂の底へと転がり落ちていきそうな、そんな恐怖にとらわれる。

「だめだめ！」

リウはぶるつと頭を振り、頬をびしゃりと叩いた。続いてバルメルトウの首を叩く。

「さ、行こう、バルム！」

腹を軽く蹴ったリウの足に、即座にバルメルトウは走り出した。

風が空気の固まりとなって顔にぶつかってくる。いつもより明らかに鞍の前部分に体が押しつけられて、はつきり自分が坂を下っていることがわかる。懸命に顔をあげようとするが、それでも視界のほとんどは赤い斜面が占めている。

もつと胸を張らないと　リウはその先の緑の丘を、その上の青

い空を見ようとす。坂を駆け下っているのはリウではない、バルメルトウだ。前屈みの下手な体勢をとってその脚、ことに負担のかかる前脚にこれ以上の体重をかけるわけにはいかない。

だというのに、恐怖が自然と体をひきつらせる。腕が縮む。背が丸まる。

リウは歯を食いしばり、馬体の下を流れていく赤い地面から無理やり顔をあげた。

その瞬間だった。

窪みでもあったのか、バルメルトウの右の前脚がぐりと大きく沈み込んだ。

右側の鐙に乗せたリウの足が、不意に支えを失った。

一瞬、リウを地面に縛りつける体重が消えた。リウは視界のすべを埋めた真つ青な空を無邪気に見つめた。はるか高所を飛んでいて、まるで体の下に空があるような気がした。

だがその直後、まるで思上がった罪への罰のように、リウの全身はしたたかに地面に叩きつけられた。

「っ！」

強打した体から息が追い出され、声にならない音が口から漏れる。一瞬の影のようにして、視界の隅をバルメルトウの黒い馬体を通り過ぎた。

青い空がまた、しかし今度はリウの彼方上にと広がっている。全身が痛い。息が苦しい。リウはあえごうとしたが、呼吸の仕方を忘れてしまっている。空気が入ってこない。喉がつまる。胸がつぶされる。

「リウっ……！」

シャルスの声とともに影が覆い被さり、リウは無理やり地面から引きはがされた。ぐいと背中を押された拍子に、空気が喉から胸へと落ちた。

その途端に全身を貫いた激痛に、リウは言葉にならない悲鳴をあげる。体はどうなってしまったのか。にじんだ涙でゆらゆらと目の

前が揺れて、吐き気がこみあげる。

それでも、そんな体よりも気がかりなものがある。リウは気力を振りしぼって聞いた。

「ば……バルム……は……？」

「大丈夫、バルメルトウはつまづいたただけだ。脚はどうもなっていない。それよりきみだ」

「だ……め……バルム……さ……き……」

リウは必死に言葉をつなぐ。

もう状況はわかってている。つまづいたバルメルトウから放り出されて空中で半回転し、背中から地面に落ちたのだ。体のどこが痛んでいるかもわからない広すぎる激痛と、すべての熱が奪われてしまったような悪寒に耐えつつ、リウは自分の体を確かめていく。

右腕、左腕、右脚、左脚、頭。

すべてある。すべて動く。

けれどもバルメルトウがどうなのだろう。不意に乗手を失って、どこまで走って行ってしまっただろう。見たい。触れたい。無事を確かめたい。リウは一心に願う。

「バル……ム……」

リウは必死にシャルスを押しやった。

「わかった」

シャルスが離れた。リウはもう一度四肢に意識をやり、力をこめて伸ばした。

「ぐっ……」

体を起こすだけでうめき声がもれた。

ひどく遠く感じる坂の下に、ぼつんと立つ小さな影。

それが自分の愛馬だと気づくのに、リウはしばらくの時間を必要とした。

「……バルム」

リウは呆然とつぶやいた。そんなことなど決してないと思っていた。どれだけ離れても、どれだけ遠くても、バルメルトウを見誤る

など考えたこともなかった。

「ごくり、と喉が無意識に鳴って、リウは自分が震えていることにやっと気づいた。」

十

「打ち身と軽い捻挫だな。幸運の女神はまだまだおまえさんを見捨てちゃいないようだぞ」

ノア牧に呼ばれた老医者は、鼻眼鏡越しにリウの顔を見ながら上体を起こした。

「まあ二、三日はおとなしくしてることだ」

痛みを訴え続ける右の肩と腕よりも、ぶるつと震えた自分の体に、リウはぞつとした。

老医者は、すでに腫れているリウの手首をていねいに分厚い包帯で固定しはじめた。

「おまえさんが一日だって厩舎に閉じ込められたくないじゃ馬なのは、わしもよく知ってるよ。だがな、これは大事をとっての日にちじゃないぞ。むしろ、これくらい我慢できなければ二度と前のように馬には乗れなくなると思えという、脅しだからな。たまにはわしの言うことをちゃんと聞くんぞ」

ジョスリーの町住まいのこの老医者には、リウも生まれたときから世話になっている。落馬後にこうして診てもらったことも、一度や二度ではない。

「シャルスの話じゃ、馬がつまずいた瞬間に、おまえさんは空高くひっくり返ってたそうじゃないか。これだけですんだのは奇跡だぞ。下がよっぽど柔らかい土だったんだろうな」

「ん……」

また体が勝手に震えた。リウはそんな自分を抑えつけて、無理に声を張り上げた。

「ただ、骨は折れてないんでしょ？」

途端、肩がずきりと激しく痛む。

包帯を巻き終えた老医者が、また鼻眼鏡越しにリウを見た。

「だから二、三日と言っているだろうが。わしも若いころはぴんと来なかったが、いまの無理は未来の自分に払わせる借金みたいなもんだ。これ以上借金を増やしたくあるまい？」

「だけど、いまは借りなきやいけないんだもの。未来のわたしはきつと許すよ」

リウは立ち上がるうとした。とにかくバルメルトウに会いたかった。会ってその背にまたがり、一刻も早く緑の草原を走らせたかった。なにがなんでもそうしなくてはいけないという焦りが、じりじりと胸の底を焼いている。そうした自覚がその焦りをなお強くする。「いかん、いかん」

だが、老医者は断固としてかぶりを振った。

「自分がしでかしてきた間違いを若い連中にくりかえさせないようにするのが、わしのような老人の役目なんぞな」と、片目をつぶってみせる。

いつもなら笑って軽口を返しているところだったが、いまのリウは視線をそらせて黙り込む以外、なにもしたくなかった。

体に固定された右腕の感覚が落ち着かなかった。リウは違和感ごとそんな右腕を抱えながら、厩舎に戻った。シャルスがそこにバルメルトウを入れてくれていているはずだった。

「あ、シャルス」

厩舎をのぞきこんだリウは、すぐそこに立っていたシャルスになげなく声をかけた。

「バルムは」

その瞬間、シャルスはそつとリウの無事な左の肩に手をまわして外へと連れ出した。

「リウ、いいから今日は家へ帰るんだ。馬車で送っていくから」

「そんな、どうしたの？ バルムは？」

逆らって中をのぞこうと顔をねじむけるリウを、シャルスはさらに厩舎から遠ざける。

「大丈夫、脚をひねってもいないし、ぶつけてもいないし、切ったりもしていない。蹄も割れたり削れたりといったこともない。だから自分のけがだけを考えるんだ」

「待って、シャルス。バルムに会わせて。それにもう帰って、バルムは？」

「今夜はうちで預かるう」

「どうして！」

「バルメルトウも、ちょっと興奮しているんだ。落ち着かせてやらないと」

「だったらなおさら、うちに連れて帰る。ここはバルムのうちじゃないんだから」

「大丈夫だよ、うちの厩舎だって居心地はそう悪くないはずだ」

「……なにがあったの？ どうしてさっきからバルムに会わせてくれないの？」

「なにもない。リウ、本当に大丈夫だから」

「待って、ひと目でも会わせて」

リウはシャルスから逃れようとしたが、身をよじった途端に痛みを訴えた肩にひるんだ。

「ほら」

シャルスはまだリウの左の肩に手を置いている。すぐに気づかれた。

「きみは、まずそのけがを治さないと。バルメルトウが心配なら、きみもうちに泊まっていくといい。きみの家には使いの者をやるう。だから、ほら」

「待って、シャルス！」

「……わかった、正直に言っよ。バルメルトウにはまだきみの姿を見せないほうがいい」

「えっ」

「バルメルトウは人間みたいに賢い馬だ。自分がきみを地面に叩きつけたことを、ちゃんとわかっている」

「って……」

「人を近づけないんだよ。馬体を調べるのも大変だった。いまは混乱しているんだ」

「そんな バルム！」

リウは夢中で厩舎に戻ろうとした。

シャルスの手が強引に、そんなリウを引き留めた。

「だめだ。きみが行ったら、バルメルトウはよけいに興奮する。馬房で暴れたらそれこそ大けがをしかねない。リウ、頼むから僕たちにまかせてくれ」

「だけど！」

がん、と激しい音が響いたのはそのときだった。

リウはその音をよく知っている。落ち着かない馬が馬房の壁を蹴り飛ばす音だ。苛立たしげないなきがそれに続く。

息を詰まらせて見上げたリウに、シャルスは沈んだ表情でうなずいてみせる。

「バルメルトウだよ」

またいななきが聞こえる。リウは耳をふさぎたくなる。

「うそ！ バルムじゃない、バルムはこんな声で鳴く子じゃない！」

「だから言っただろう、混乱しているって」

「うそ……」

「リウ、隣の馬房にはユーリススを入れてある。あいつが今晚はなだめてくれるはずだ。待つんだ。きみはよくやった。ちゃんと銀糸のリボンを獲得した、誰だっときみを悪くなんか言わない、いや言わせない」

「っ！」

リウは痛む体のことも忘れて、今度こそシャルスの手をふりほどいた。感情が高ぶりすぎて、シャルスをにらみつける目はまばたきすることもできなかった。

「……どうしてそんなことを言うの？」

「リウ」

「どうしてもう終わったことみたいに言うの？」

「落ち着いてくれ、リウ」

「答えて！」

シャルスはあきらめたように息をついた。

「……落馬は、ときとして体以上に心を傷つけるものだということ
は、牧の娘のきみはよく知っているはずだ。また落ちるんじゃない
か、今度はもつとひどいけがをするんじゃないか、もしかしたら今
度こそ死ぬんじゃないか　そういう恐怖が生まれるものだって」

「」

「ただ馬に乗るだけなら、落馬の恐怖を抱えていてもなんとかなる
かもしれない。だけどこれは　天馬競　だ。限界ぎりぎりの走りを
する馬の背に乗るんだ。まして肝心の馬まであんな状態じゃ　無
理だ、リウ」

「無理じゃない！　バルムは絶対言うことを聞いてくれる！」

「きみは？」

「もちろん、わたしだって　」

「だったらどうして、きみは震えていたんだ？」

　　一歩ふたりの間を詰めたシャルスに、リウはたじろいだ。

「そんな、震えてなんかない！」

「僕がさっき手を置いたきみの肩は、たしかに震えていた」

シャルスがすつと、さらに前に出た。

「いまだって、ほら」

リウはシャルスを見上げた。そしてきつく唇を噛んだ。

シャルスの手が再び置かれたことで、リウ自身にもはつきりとわ
かってしまう。おだやかに上から押さえる手に逆らうように、ぶる
ぶると震えている自分の左の肩が。

「送るよ、馬車で」

リウは体に固定された右腕を抱えた。そのまま爪を立てる。包帯

越しに爪が食い込む皮膚だけでなく、肩も肘も手首も苦痛を訴える。だがリウは力をゆるめない。シャルスの言葉に一瞬ほっとしてしまつた自分を罰するように、かえつてさらに指に力をこめる。

それなのにどうしてもひと言が出てこない。

怖くなんかない。

たつたそれだけの言葉を言うことを、舌も唇も拒否している。

「残念だけれどこまでだつたんだ、リウ」

リウはありつたけの意志をかきあつめてかぶりを振つたが、その動きは髪ひとすじそよがせることもできないほど弱々しかった。

「やめよう」

その言葉を聞いてしまつた瞬間、リウは目をつぶつた。

十

「リウ、あいつはどうするんだ」

朝食の席で父がぶつきらぼつに聞いてきたのは、落馬から二日後のことだつた。

父がバルメルトウのことを言っていることは、すぐわかつた。

あれからリウはシャルスに馬車で送ってもらつたが、バルメルトウはまだノア牧にいます。

「だつて、シャルスからまだなんにも言つてきてないから。ユーリスとは仲もいいし、バルムも居心地がいいのかもね」

父は無愛想に目線を落とし、自分のパンを割いた。

「うちの馬だぞ」

「だけど、わたしもまだこんなだし」

帰ってきたリウの包帯姿に大騒ぎした母もいまはようやく安堵の息をつき、リウも少しずつ牧の仕事を手伝いはじめたが、それでもまだ薬を塗りつけた包帯はとっていない。

本当はとれるのかもしれない。風呂に入るときは当然とつていて、そこで肩や手首を動かしても、もはや息が止まるほどの痛みはない。

だが、リウは包帯をとることをためらった。昨日こちらにも往診してくれた老医者も、きちんと治さないと、とリウに言った。リウは素直にうなずいた。

「預かり賃はどうする。どこから出す気だ」

「シャルスは気にしなくていいって言ってくれてる。もちろん、後でちゃんと返すつもり」

父はパンを口に放り込み、噛み砕いて飲み込んでから、やけに静かな口調で言った。

「どうせなら、ノア牧のより、イシャーマ牧のに頼ればいいじゃないか」

「父さん！」

リウは席を立った。

「どうせ頼るなら、頼りがいのあるほうがいいだろうが。それとも、おまえの好みは青毛じゃなくて鹿毛なのか」

「やめて！」

「まさか本当にあのお坊っちゃん喧嘩したんじゃないだろうな？ だったらすぐに謝ってこい、とにかく許してもらうんだ」

「喧嘩なんかじゃない。それに父さんには関係ないでしょ」

「関係ないとはなんだ！」

うるたえるばかりの母をはさみ、リウと父はにらみあった。

「……どの口で関係ないなんて言えるんだ」

父が低い声で言う。

「おまえはこの牧をたたみたくないと言ったな。本気でそう思うんなら、天馬だなんてばかな夢を見てないで、もっとたしかかな手をどうしてとらないんだ」

「やめてよ！」

「イシャーマの息子だぞ。うちの牧のひとつやふたつ、簡単に買える。なれるかどうかもわからない天馬なんかより、こっちをあてにするほうがずっと確実で、しかも簡単じゃないか。おまえだってあのお坊っちゃんのこと嫌いだろ」

「やめてっばー！」

「むこうだつて、昔からああもやってくるんだ。おまえからその気になってみれば」

「やめてー！」

リウはあらん限りの声で怒鳴った。

だが父は無視した。

「もしかしたら、イシャーマの息子の嫁になれるかもしれないぞ」
リウは呆然と父を見つめた。直前まで暗く沸き立っていた心の一部がすっぱりと切り離されてしまったようで、いまは不思議となんの感情もなかった。見飽きるほど見てきた父の顔が、まったく初めての顔に見えた。冷たい、醜い顔だった。リウの気持ちなど理解するはずのない、その必要すら考えたことのない顔だった。

「……ばかな夢」

リウはふらりと席を離れた。

「どこへ行く！」

答えないまま食堂を出ようとしたリウに、さらに声がかけられる。「おれの目は節穴じゃない。おまえ、落馬で馬が怖くなってるんだろっ」

びくりと肩が勝手に震えた。リウは足を速めた。

それでも無情な声は追いかけてきた。

「そんな状態で 天馬競 なんか、絶対に無理だぞ！」

リウは耳をふさいで外に出た。

朝食後に東の端の柵を直しに行くと言っていた父が乗るつもりなのだろう、茶色の老馬が、馬装もすませてつないであった。

「おはよ、ちよっと乗せて」

リウはおとなしい老馬に声をかけ、鞍に右手を置いた。左手で手綱とともにたてがみをつかむ。もう後は目をつぶってでもできる。鐙に左足をかけ、右足でぼんと地面を蹴って、体を鞍に乗せればいい。子供のころから毎日毎日、日々何度もくりかえしてきたことだ。だが。

「
」
リウはそのまま立ちすくんだ。

体が意志とは関係なく震えている。どうしても膝に力が入らない。左足があがらない。右上半身の痛みが、まるで警告するかのよう激しくなる。

馬とはこんなにも大きな生き物だったろうか。そして自分はこんなにも小さく無力だったのだろうか。

落馬した瞬間に見た空の色が目の奥によみがえる。真っ青すぎるその色は、どこまでも美しく、どこまでも冷たくて、意識がすうつとその中に落ち込みそうになる。

その色と同時に、なぜか自分の姿が見えている。地面に投げ出され、まるで壊れた人形のような体が。

奇妙な風の音と思っただのは、自分の荒い呼吸の音だった。そうと気づいたリウは、手綱を放り出して走り出した。

「……………」
漏れた声は自然に消える。リウは唇を噛みしめる。

無性にカズートに会いたくて、そのくせ二度と会いたくなかった。どんな顔をして会えばいいのか、それを思うと決して会えないと思っただ。

持てる者と持たざる者。

南部の貴族とも肩を並べる大牧の息子と、牧童のひとりも雇えないちっぽけな牧の娘。

丘に馬に乗った人影を見つけると、リウは口ではぶつくさばやきながら、やかんを火にかける。ひらりと鞍から飛び降りる彼を迎え、また来たと呆れてみせながらお茶を出す。

馬の話と、くだらない言い合いと。カズートが南部へ行ってしまった一年前、特別なことなどにひとつなかったそんなひとときが失われて初めて、リウはそれがどれだけ自分にとって大切な時間だったのかを自覚した。

その途端、これまでまるで関係ないと思っていたそれぞれの牧の

差が、カズートとのあいだの壁となり、溝となった。彼が来ないか期待し、来なくて寂しいと感じてしまうことが、単純な気持ち以外の卑しい計算を意味しているような気になってしまった。

大切な時間を汚さないよう、だからリウは自分の感情に蓋をした。彼が戻ってきてても、あるいは二度と戻ってこなくても、それまでと変わらない同じ自分でいることを決めた。

いつでも他愛ない話ができる、彼の友達でいたかった。そのため、牧を営み馬を扱う、彼と同じ立場でいたかった。願ったのはたったそれだけのことだった。

それなのに　　リウは厩舎に逃げ込むと、からっぽの馬房の前で膝を抱えた。

こんなときリウの肩先をちよんちよんとつついて、どうしたのと聞いてくれるバルメルトウももういない。

リウはひとりだった。

当たり前、と膝に埋めた顔に歪んだ笑みを浮かべる。ちっぽけな牧を維持するのに精いっぱい、なんとかしようと思身程知らずの挑戦をし、余裕のないままカズートを傷つけ、あげくたった一度の落馬で馬にも乗れなくなった。

「最初から、わたしには無理なことだったんだ……」

胸がしめつけられて苦しかった。けがの痛みよりも心の痛みのほうがひどかった。

膝に顔を押しつけて、リウは小さく息をつく。胸が痛くてそれ以上の息が出てこない。

「これで、おしまい……」

天馬競　をあきらめて廃業するなら、やらねばならないことがある。まずは牧の馬たちの行き先を決めてやらなければならない。

ローナから預かった馬も頼む必要がある。

リウは荷馬車を用意し、ノア牧へむかった。道どおりに常歩で進む馬に引かれた荷馬車での道中は、バルメルトウで駆けたそれまでよりも、ずっと長い時間がかかった。

「……だけどこれが、わたしにはお似合いなんだ……」
リウはつぶやき、目をつぶった。

十

ノア牧にシャルスの姿は見あたらなかった。

荷馬車を下りたりリウは牧草地まで歩き、牧童を見つけてシャルスの居場所を聞いた。

「や、知りません」

「出かけたの？ でもそれにしたって」

「そうじゃねえです。若旦那ならうちの牧にいまさあ」

「じゃあ知ってるよね。どこ？」

「それが……」

牧童は言いづらそうに顔をしかめた。

「なにかあったの？」

「いえ……」

「言つて。シャルスには言わないから」

「……へえ。おれがこんなこと言つてたなんて、若旦那には言わねえでくだせえよ」

リウは約束した。

「今朝どっかからの使いが来てから、若旦那の機嫌が悪くつて。うっかりつかまつて怒られちまう前にと、朝飯の後はさっさとこっちに出てきちまいますよ。急ぎの用でねえなら、お嬢さんもいまは若旦那に会わねえほうがいいですよ」

「じゃあうちの馬は？ バルメルトウ。黒い牡馬」

「へえ、たいした暴れ馬で」

「……どこ？」

「若旦那、そのことでもかりかりしてたみてえでね。調教場に連れ出せつて、運悪くつかまつた奴に言いつけてました。馬も馬で、黒い悪魔みたいな野郎だからね。おととい昨日と、もうおれたち三人

が三人とも、こつぴどく蹴られるところでしたぜ」

「……ごめん、それはわたしのせいなんだ。みんなけがはなかった？」

「へえ、大丈夫でさ。気にすることはねえですよ、ランダルム牧のお嬢さん。馬には脚つてもんがついてるだけのことでさ。またあいつの脚は特別長えしね」

牧童はにっと笑ってくれた。

それでもリウの気分は晴れなかった。

調教場まで馬を貸そうと言ってくれた牧童の申し出を断わって、リウは歩いて向かった。

北部タールーズ地方も初夏を迎えている。空には雲ひとつなく、目に染みそうな青がどこまでも広がる。こんな日に緑の牧の中を歩くのは、気持ちがいいことに違いなかった。

「そうだよね」

リウはうなずいた。足もとからたちのぼる草の匂いは近く、頬をなぶっていく風はおだやかで柔らかい。こうして自分の足で歩くのも悪くない。もはやそうすることしかできなくなってしまったとしても。

歌を口ずさみながらゆっくり歩いていったリウの耳に、やがてふたりの男の会話が聞こえた。ただの会話ではない。語気荒く怒鳴り合っている。リウは驚いて走り出した。

上り道が下り坂に変わった道の先に、馬と人がいた。馬は激しく頭を振って逆らい、その手綱を取る人影が振り回されそうになっている。全身黒の馬体はバルメルトウに違いなかったが、こんなにも乱暴なことをする馬ではなかった。

そのことにリウの胸はずきりと痛む。いますぐ走り寄ってなだめてやらなければいけないのに、足がすくんで動かない。

だが、気がかりなことは他にもあった。

バルメルトウから遅れて歩きながら、やはりふたりの男が言い争っている。太陽を受けて輝く褐色の髪と、同じ光を受けながらも

ます濃く暗く見える黒い髪。

シャルスト、そしてカズートだった。

もう言葉そのものまで聞こえる。

「だから、無理なんだ！」

珍しくシャルストが声を荒げている。

「お節介はもうやめてくれないか、迷惑だ！ こうして言うことを聞くのも、これが最後だと思ってもらいたい！」

カズートが言い返す。

「そんなに自分の意見に自信があるのか！ 自分が間違ってるかもしれないとは思わないのかよ！」

「いいかげんにしてくれ！ ……大体、このことはどこから聞きつけたんだ。人を使ってこそそこを探り回っているのかい、それとも、イシャーマの御曹司にはみんながご注進してくれるのかな？」

「そんな言い方はやめろ！ 医者の方に家政婦がひとりいれば、誰がどんなけがをしたかなんて、広まるのは十分だろ」

「それは失礼、うわさなんて聞こえない耳を持っているのかと思っ
ていたものだから」

「……どういう意味だ」

「それならもう少しいろいろ慎重になれたらどうに、ということだよ」

カズートが言い返すより早く、シャルストはさらに言葉をかぶせた。

「わかったのならこれを最後に引き下がってくれ、わからないなら帰ってゆっくり考えてくれ！ 迷惑なんだとはっきり言っただろう、僕も、それにリウ自身もだ！」

なんだろう、なんの話だろう、そんな疑問がぐるぐるとリウの頭の中で回っている。すぐ目の前に答はあるのに、わざわざ目をつぶって手探りしているかのようだ。彼がどんな言葉を返すかそれだけが気になって、リウはカズートの横顔をうかがった。

黒い頭がわずかに揺れる。カズートが答えようとしている。

リウはますます体を強ばらせて、そのときに備える。

「あいつが本当に、自分からやめるって言ったのか？」

低い声がつむいだ言葉は、否定でも肯定でもなく、質問だった。すぐに、今度はシャルスの頭が動いた。

「言わせることもないだろう。すでにいっぱいになった子に、どうしてそこまでやらせる必要があるんだ。周りから止めてやるのが思いやりじゃないか」

「だから、それが信じられないんだ。おれが知ってるあいつだったら、そんなことをされたら怒るはずだ」

「……だったら聞こうか、きみはリウのなにを知っているんだ？」

リウは元気で、まっすぐで、いつだって明るく笑う子だ。だけどそれはリウの優しさなんだ。こちらに笑ってみせる顔の下で泣いていることだってあると、きみはわかってやれないのか？」

そうだろうな、とシャルスはカズートに返事を言わずに続けた。「わかってやれるような男だったら、あんなふうにならないうわさになるほどランダルム牧に出入りしたあげく、南部へ行きつばなしで音沙汰なしなんてことはしなかっただろうね。わからずにそうしたならきみは無神経な男だし、わかっていてのことなら不実で無責任な男だ」その声は別人のように冷たかった。

「きみのところの牧へ出入りしていたあいだに聞いたよ。あの洒落者の四男だけじゃなくてきみも、将来の結婚相手を南部の貴族の姫君から選ぶことになったそうだね。今年の 大天馬競 で天馬を獲って、それを手土産に堂々むかうと聞いたよ。あの馬たちにふさわしい黄金のような姫に贈るとね。だから組の名も《黄金姫》とつけたそうじゃないか」

カズートがやっと言い返す。

「誰に聞いたか知らないが、おれが行くのは兄貴の供でだ。天馬競 に出している馬も、たしかに伯爵に贈る予定だが、おれのじゃない、親父のだ。組の名前をつけたのも兄貴だ」

「無理はしなくていいよ。一年も帰ってこなかったんだ、よほど南部が気に入ったんだろう。馬への興味もなくなつたようだし、一体ど

うして帰ってきたんだい」

「なんだってそんなことを言われなきゃならないんだ！」

「不思議だからさ。帰ってくる必要なんてなさそうなのに。実際そんなスカーフで着飾って、もうすっかり貴族の若さまのようじゃないか」

「これは」

「ある意味、感心するよ。きみこそよく人のことに口をはさんでくれるものだ。それともイシャーマの一族なら当然許されると思っ
ているのかい？ 恵み深き御曹司のお情けをかけてもらった者は皆、
喜びの涙を流してありがたがるものだとても？」

カズートの足が止まった。

「やめて！」

リウは道の上から叫んでいた。カズートがこれ以上傷つけられる姿を見たくない、ただその一心だった。

ひっぱたかれたように振り向いたふたりが、リウを見上げた。

自分で叫んでおきながら、彼らの視線にさらされることが耐えきれなくなる。リウはとっさに身をひるがえし、彼らとは逆の方向へと走り出した。

リウ、と呼んだシャルスの声に、カズートの声が重なった。

「待ってる！ おまえの馬は、絶対におまえに返すからな！」

彼の声に背中を突き飛ばされるように、リウはさらに加速した。
足音が追いかけてくる。

「リウ！」

呼ばれて腕をつかまれるより先に、リウはそれがどちらの男なのかを知っていた。

「リウ……来てたのか」

ほんの少しだけ息を切らせていたのはシャルスだった。彼は優しく微笑んだ。

「けがは、どう？」

リウは答えることなく、目をそらせた。

「ごめん、もう帰る」

「大丈夫かい？ 送ろうか？」

「平気、馬車だから。……ごめん」

「それは、なにについて？ お茶もしていかないことかい、それとも 天馬競 に出られなくなったことかい」

シャルスはリウの恐怖心を知っていた。そのことがよけいに、彼を見ることをできなくさせた。リウはますます顔をそむけた。

「二番目のことなら、気にすることはないよ。しょうがないことだったんだ。必要以上に自分を責めるのはよくない。胸を張っていい。きみはよくやった。世界中のどんなやつにだって、僕はそう言える」

「だけどわたしは リウは自分の手に視線を落とす。うんざりするほど無力な手。結局この手はなにもつかめなかった。それまでつかんでいたものまで手放してしまった。」

「……また相談に来る。馬たちのこと」
「ああ、待っているよ。いつでもいいから、そのときはお茶を飲んでいってくれ」

リウははつきり答えもうなずきもしないまま、荷馬車でランダルム牧へ戻った。そして父に見つからないうちに厩舎へと逃げ込んだ。いまの時間、馬たちは牧へ出されて、馬房はすっかり空になっている。

昔より馬が減って空いた馬房の多い厩舎はそうでなくても寒々しかったが、いまはなおのことだった。ことに、寝藁も敷いていないバルメルトウの馬房は。

バルム、と飾り文字を刻んでやった木板が、むなしく馬房の柱にかかっている。

とつさにリウは木板をつかんで窓から投げ捨てた。それから壁にもたれて座り込んだ。下を向くと涙がこぼれそうな気がする。リウは頭をのけぞらせて上を向き、目を閉じた。

頬に感じる陽射しは移ろい。

いつのまにか、リウは半ば眠ってしまったのかもしれない。

馬車の車輪の音にも足音にも気づけなかった。だから窓から降ってきた声は突然だった。

「やっぱりここか」

ぎくりと体がひきつった。

「かつ」

カズート、という言葉が、声にならない。

「安心しろ、すぐ帰る」

カズートはそう言ったが、リウは背が触れた壁板に彼の体の重みを感じた。

厩舎の外、リウとは壁を挟んだ背中合わせに、カズートが座っている。

「おまえ、出るよ」

「……」

「怖いのは、落ちた人間だけじゃない。落とした馬もだ。おまえもさつき見てただろ。バルメルトウがどれだけ嫌がってたか。あいつに鞍をつけるまでも大変だったんだぜ」

「……」

「でもな、あいつは絶対もう一度走るようになる。走らせてみせる。あいつは走るために生まれてきたんだ。だから走らせてやらなきゃいけない」

「……」

「あいつもこれからがんばるんだ。だからおまえもがんばれ。やれるだけのことは全部しろよ。結果もしだめだったとしても、自分をなにもできない臆病者、大事なところで逃げ出した卑怯者だと思いつけてこれから先ずつと生きてくよりは、いくらかましたる？」

壁から重さが消えた。

「ま、これはおれの考えだ。おまえがどうするかは、おまえが自分で決めればいい。ただ、あいつはまた走れるようになって、必ずおまえのところに戻ってくるからな」

さつき捨てた木板がぼんと落ちてきた。

のろのろと体を伸ばして引き寄せようとしたリウの頭に、続けてふわりと、ひどく柔らかなものが降ってくる。

「あいつを天馬にしてやるのは、おまえの役目なんだぞ。それだけは忘れんなよ」

遠ざかる足音を聞きながら、リウはするすると頭から滑り落ちようとする布を取った。カズートの絹のスカートだった。

ぎゅっと両手で握りしめる。

これは返さなきゃ きつく唇を噛みしめながら、自分に誓う。返しに行かなきゃ。

ちゃんと勝って、胸を張ってカズートに返しに行かなきゃ。

ありがとう、って言いに行かなきゃ。

永遠にそれができないまま終わるより怖いことなんて、なにもないんだから リウは立ち上がり、きつと顔をあげた。

十

五日後、丘を越えてランダルム牧にやってくるひとりの男と二頭の馬を見つけたとき、リウはすぐさま自分がまたがる老馬をそちらに走らせた。

「シャルス！」

エギルの鞍にバルメルトウの手綱を結びつけてつれてきたシャルスは、出迎えたリウに微笑んでみせた。その笑みは少しだけこわばっていた。

「バルメルトウを返しに来たよ」

リウが聞くより早く、彼は疑問に答えた。

「もう心配ない。うちの牧からここまで、バルメルトウはずっと素直についてきた。元のままのバルメルトウだよ」

それからシャルスは、眉をわずかによせてリウの顔をのぞきこんだ。

「きみの、そのけがは？」

リウは肩をすくめて小さく笑い、かさぶたになった鼻の頭のすり傷を指の腹で押さえた。

「昨日、ちよつと落ちちゃって。見られなくてよかったよ、顔から落ちるなんて、あんな格好悪いのはさすがに初めてだったから」

「大丈夫だったのかい？」

「平気。わたしがあんまり変な落ち方をしたものだから、この子まであーあつて顔になってたよ。落ち方の上手下手も、馬ってわかってるよね」

シャルスは鞍を下り、バルメルトウの手綱をといてリウに渡した。

「どうやって、また乗れるようになったんだい」

手綱を受け取りながら、リウはシャルスとバルメルトウに笑ってみせる。

「びくびく怖がつてる場合じゃないって、わかっただけ」

「それにしたつて楽なことじゃなかったはずだ」

「ん、だからなにかする前には絶対乗るようにしたの。だって毎日のご飯と毎晩の眠りがかかってたら、もう乗るしかないでしょ？」

シャルスはかすかに息をつくつと、振り返った。

「昨日ジヨスリイの町で、ランダットに会ったんだ。そろそろ、つて聞かれたよ」

「シャルスはなんて答えたの？」

「答えたくないな。結局間違っていたんだから。ここの帰りにすぐにランダットをつかまえて、訂正するつもりだ」

「ん、よろしく」

シャルスが顔を向けた。

「半月後、マーセブルツの 天馬競 がある。それでいいのかな」「わたしはね。それに、バルムも」

リウはバルメルトウに微笑んだ。

漆黒の毛を輝かせたバルメルトウの体はしなやかに引き締まり、風に首を振り立ててたてがみをなびかせたところは、ますます思いきり走りたくてうずうずしているようだった。

「半月後じゃ、遅いくらい」

マーセブルツツの 天馬競 は平坦な競路が特徴で、ただ三走路の最後に、馬上からは足もとが見えないほどの急な長い下り坂がある。ここまで走ってきた馬の脚に大きな負担をかける危険な場所ので、前年の 天馬競 ではここで二頭の馬が前脚を折り、乗手も鞍から放り出されてまだ普通には歩けないという。

今年の 天馬競 は接戦だった。その坂にまでもつれこんだ三組の勝負は、坂道に臆するどころか、傾斜を無謀なまでの速さに変えて駆け下った馬と乗手の勝利で幕を閉じた。

「あいつは悪魔の馬だ！」

二位で入ってきた乗手がうめいた言葉が、勝者を讃えていたマーセブルツツの広場をさらにわっと沸かせた。

頬をうつすらと染めたリウはふたつめの、そして今度こそ金色に輝くりボンを手に入れた。

六 夢見たもの

食堂に入ると同時、リウはすばやく壁に目を走らせた。

ちよつと目を離れた隙に幻のように消えてしまいそうな気がして、出入りするたびにそうする癖がついてしまっている。しかし、リボンはいつでも変わらずそこにあった。

大天馬競

壁に下げられた金銀のリボンを見ながら、リウ

はいまだにどこか少しそのことを信じ切れない。

ずっと先のような、もうすぐのような。

一月。

それだけの時間の後、大天馬競は開催され、リウはその競技に出る。

「ねえ、リウ。誰かうちに来るみたいなんだけど」

台所にいた母が顔をのぞかせた。

リウは夢想を破られてぶるつと頭を振った。

「誰？ また馬の仲買人？」

マーセブルツツでの勝利が評判となり、ぼつぼつと商談が持ち込まれている。とはいえ、それらはすべてバルメルトウを買おうというもので、当然リウはすべて断わっていた。

「外に父さんがいるでしょ。相手したくないよ。この前のやつなんか、どうせこんな牧の馬が 大天馬競 に勝てるわけがないんだからいまのうちに売れ、なんて言ってきたし！」

「なんだかそういう人じゃないみたいだけど」

「とにかく父さんがいるでしょ」

「牧へ行ったみたいで、姿が見えないのよ。いまちよつと手が離せなくて」

「はいはい、わかりました、行ってきます」

と、外に出たリウの目にも来客の姿が見えた。

「あゝ」

母は口ではああ言ったが、客の正体を知っていた。そしてわざとリウにまかせたのだということが、やっとわかった。

体が鋼でできているのではないかと思わせるような、直立不動の騎乗姿勢。鋭い線に裁たれた漆黒の軍服に、腰に吊った細剣が銀色にきらめいている。

乗っているのも、また見事な黒馬だった。全身が夜空のように蒼く見えるほどで、ただ額にぼつんと星、純白の白斑がある。リウに気づいた乗手が合図をすると、黒馬は頭をあげて姿勢を正し、膝を胸まで上げる軽やかな歩調に変えてやってきた。

「リウ・ランドルム？」

馬上から尋ねられて、リウはこくんとうなずいた。それからあわてて「はい」と答えた。

天馬競 は各地の町が主催するものだが、その上に位置づけられる 大天馬競 は伝統を受け継ぎ、王の名のもとに国軍が主催する。

軍の使者は敬礼し、背につけた筒をはずすと、中から紙を抜いて両手で上下に広げた。

きびきびした声を読み上げた文のほとんどは、リウの耳をむなしく通り過ぎていっただけで、リウはまったく耳にしたことのない異国の言葉を聞くような気がした。

「 大天馬競 への参加を認める」

突然、その一文が頭に飛びこんできた。それだけでリウには十分だった。

「は、はいっ！」

よく見ればまだ三〇歳前後らしい軍の使者は、思いがけずにこりとした。

「私の相棒もタールズの産だ。こいつに会えただけでもここへ赴任してきた価値があったと思っている。影ながら応援しているよ」

軍の使者は愛情を込めた手で黒馬の首を叩くと、もう一度にこりとした。

「はい、ありがとうございます！」

使者から許可証を収めた筒を受け取って、リウは彼らが丘のむこうに見えなくなるまで見送った。それから家の中に走り込んだ。

期待するように台所から顔を出した母に、出走許可証、と短く告げて筒を振ってみせる。

「母さん、ちよつと出かけてくる！」

足が飛ぶように軽い。胸がはずむ。リウは再び外へ出ると、バルメルトウを引き出した。

「バルム、行こう！」

大天馬競 出走許可を伝えに、軍の使者は組代表のリウのところへ来た。仲間にその嬉しい報せを伝えるのは、リウ自身の役目だ。喜びの使者の役目を存分に楽しみながら、リウはまず、より近いジヨスリイの町へバルメルトウを走らせた。

通りで老医者に会った。

「おおりウ、どうだ、その後は馬から落ちてないんだろうな？」

「いまのところはね。先生は往診？」

笑いながらのあいさつ代わりの質問に、しかし老医者の顔がさつと曇った。

「の、帰りだな。プルノズ農場へ行ってきたところだ」

「えっ」

リウの顔も強ばる。

「けがですか、それとも病気？」

「ああ、そういえばおまえはあそこと友達だったな。けがじゃない、熱だ」

「ランダットさんが？」

「いや、娘のローナのほうだ」

「ローナが……？」

「おととい勤め先から帰ってきたんだが、どうもドヴァ熱にかかっ

たらしくてなあ」

「ドヴァ熱？」

「タールーズじゃ滅多にないが、西部地方でときどき流行する病気だな。ランダットに言われるまで、わしも最初は風邪かと思っとな。イシャーマにはよその地方からの客も多いから、誰かにうつされたんだらう」

「どんな病気なんです？」

「ひと月ほど、一日おきに熱が出たり下がったりしてなあ。いまはひどい熱が出とるよ」

老医者表情から、ローナの症状が決して軽くないことは容易に想像できた。

「大丈夫なんですか？」

「本人は大変だがなあ。それでも薬は手配してあるし、なによりあのランダットがよくやってくれとるよ。あいつがあんなつまそうなパン粥なんぞ作れるとは知らなかったわい」

「そうですか……」

プルノズ農場に着いたとき、それまでの浮き立つ気分は吹き飛んでいた。

ひかえめに叩いた扉は前触れもなくいきなり開いて、ランダットが顔を出した。表情こそいつもとまったく変わらないものの、看病でろくに寝ていないのだろう。服はよれ、赤毛もいつも以上にぼさぼさで、目の下にはうっすらと隈がある。

「こんにちは、ランダットさん。ローナが熱って……」

「そ、ドヴァ熱。ま、命がどうこうって病気じゃないし、先生も診てくれるから。さっきパン粥食って、ちょうど寝たところ」

「どうぞお大事に。あの、わたしになにか手伝えることはありませんか？ 買物とか」

「ありがと。ま、おれひとりでなんとかできてるから。ドヴァ熱はうつるしさ。あんまりうちには来ないほうがいいよ？」

「そうですか……あの、それから、話は全然違うんですけど」

リウはおずおずと当初の用件を切り出した。

「今日、軍の使者が来て」

ランダットは出走許可証の入った筒を見ると、家の中を振り返り、次にリウを見た。

「それさ。約束だったけど、おれ、だめになった。ごめんな」

「えっ？」

「出れない。だって、ローナがこんなひどい熱だもん。大天馬競まで練習なんてできっこないし、ローナがその日までにちゃんと元気になるかどうかもわかんないし」

老医者のお話を聞いたときから、どこかでこうなることは予感していた。だが、改めてランダット自身の声でつきつけられると、予感には気休めにすらならず、事実には冷たい刃となって容赦なく胸をえぐった。

リウはうつむいた。体の前で握りしめられて小刻みに震える自分の両手が目に入った。

一度この手は全部手放してしまったと思った。もうなにもつかめないと思った。けれどもカズートのおかげで、再びつかむことができるようになった。

もしかしたら、それまでつかんでいた以上のものにまで届くかもしれない。ついさっきまでそう思っていた。

思えていた。

「でも……ローナがもし、それまでに元気になれば」

顔を上げて、リウはむなしい抵抗を試みる。

「ユーリシスの調教さえしておけば、ランダットさんなら特別な練習なんてしなくて」

今度見えたものは、ゆっくり振られた赤毛の頭だった。

「人つてさ、一度傷んだら、そう簡単に元に戻るようなもんじゃないからさ。あんだだけ熱が出た後は、ひと月くらいはゆっくりさせてやんなきゃ。だからごめん」

「そんな」

そこまでしなくなつて、という勝手に思わず口からこぼれかけて、リウはとっさに唇を噛んだ。そうやってどうにか声に出すことはこらえても、自分さえよければ、という心に差し込んだ暗い影はぬぐいきれない。そんな自分に嫌気がさす。といって、このままでは牧ヤバルメルトウは失われてしまふ。自分がどうしたいのか、どうすればいいのか、リウはまったくわからなくなる。

「……これ、ローナには内緒な」

立ち尽くしたりリウに、ランダットが再び声をかけてきた。彼は声をひそめた。

「あいつ、おれとは血が繋がってないの。この辺を行商してた男でさ。逃げられちゃってキミイが困ってたから、じゃおれと結婚してもらつて、おれの子にしようかなつて」

「っ!？」

「おれ、昔のこと覚えてないって言つたじゃん？ それつて、じいちゃんやキミイや、それからローナがいてくれて、とにかく毎日楽しくつてさ。昔の自分なんて思い出す必要がなかったからだと思ふんだよね」

重い告白を彼らしくさらりとしてのけたランダットは、ちらりと家の中を振り返った。

「だからローナのいい父ちゃんできてやりたいんだけどさ。おれ、こんなだから、なかなかやってやれなくて。せめて病気のときくらい、思いつきり大事にしてやりたいんだ」

ランダットは振り向いた。いつも飄々としていた顔に、いまは強い決意の色がある。

彼は何にもこだわらないのではない。世の中でただひとつのものだけにこだわり、なによりも大事にするという覚悟を持っていた人間なのだと、リウは初めて悟った。

「本当にごめんな。なに言つてもいいし、いくらでもぶつ飛ばしてくれていいよ。でも、たとえ殺されたつて出ることだけはできない。

おれ、ローナの父ちゃんだから」

それはまさに父親の顔だと、リウは思った。

大切なものを守るために他のなにもかもを捨て、結果もすべて引き受けると宣言している相手を、いまさら動かせるわけがない。

プルノズ農場から帰るや否やベッドにもぐりこんだリウは、明け方、やっとそんな気持ちになれた。のろのろと起き出して父と厩舎で一仕事片付けた。父はなにも言わなかった。

「父さん母さん、ノア牧まで出かせさせて」

リウが頼んだのは、卵とベーコンの朝食を食べ終えた席だった。

父がちらりと目線をあげる。

「大天馬競 のことが」

「そう」

「行ってこい。 気をつけてな」

付け足されたひと言に、リウはこれまでの父がこれまでの態度を詫びる気持ちを感じ取った。すまん、とは素直に言えない父の、おそらくは精いっぱい謝罪を。

「ん」

リウは微笑んだ。父はすぐに目を伏せてしまったが、十分だった。外へ出てバルメルトウに鞍をつけ、リウはノア牧へと駆けた。

「なんだって？」

見る間に血の気がひいていくシャルスの顔を、リウはじつと見守った。

彼を 天馬競 に挑ませたきつかけはリウだったかもしれない。だが彼自身が言ったとおり、すでにこの挑戦の結果には彼の未来もかかっている。

「ここへ来てランダットが出ないだって ユーリシスをあそこまで扱った者は誰もいない。僕だって、あいつがあんなに走れるとは知らなかったくらいなのに」

問題はそこだった。

騎士の名誉を賭けた 天馬競 は、歴史を経るうちに意味を変えた。勝利を獲た乗手が讃えられること自体はいまでも変わらないが、その能力を血に乗せ次代に伝え残すものとして、馬の価値がより重くなった。

ゆえに乗手は変更がきく。だが馬は違う。ランダルト組として一度登録した組は、エギル、ユーリス、バルメルトウという三頭の馬以外で出走することはできない。

そして、最もおだやかな性格のユーリスは、実はこの三頭中最も癖の強い馬だった。

他馬に勝つために走る馬、そうするよう教えられたから走る馬、褒めてもらうために走る馬、鞭を入れられるから走る馬。もともと走るように生まれついた馬でも、おのれの力を尽くした疾走をするには、それぞれの理由がある。

だが、ユーリスにはどんな理由もなかった。気立てのいいユーリスは、その背に赤ん坊を乗せても落とさないように気づかってそろそろと歩くだろう。通常の乗馬の経験がある者が乗れば、普通に走りもするだろう。けれどもそれは、ユーリスが自分の考えで人を乗せているというだけのことだった。ユーリスが自分の考えを捨てて乗手の指示に従い、全力をふりしぼって走るの、その背にランダットを乗せたときだけだった。

「ランダットが出ないなら、 大天馬競 で勝負になるとは
」
「わたしが、二走と三走を乗る」

「昨日ひと晩考えて、これしかないって思ったんだ。ランダットさんの代わりなんて捜したって無駄だよ、いるはずがないもの。それよりはわたしが乗るほうがまだまし。これまでユーリスは見てきている。それに、わたしのほうがシャルスより軽くて、ランダットさんに近いから。ランダットさんにこつを聞いて、これから練習する」
「連続騎乗なんて、無茶だ」

言われるまでもなく、リウにもよくわかつている。 天馬競 を

一度乗るだけで、翌日は体のあちこちが痛み、数日は全身がだるい。連続して二走三走と乗れるのか、自信などまったくない。それでも、というよりはだからこそ、リウは決意を込めて静かに答える。

「無茶でもなんでも、これしかないもの。だったらやるだけ。最初からそうなんだから」

「いや、僕がランダットのところへ行つて、説得してくる。こんなことは契約違反だ。大天馬競　までと約束して、それで礼金の額を決めたんだから」

「ランダットさんへのお礼は、全然法外な額じゃないよ。あの腕だったら、倍払うつて組だつてあるかもしれない」

「そういう問題じゃない、これは契約と信用の問題だ。あの人はあの年で、自分のしようとしていることの意味も重さもわかってないんだ。すぐにも行つてくる」

シャルスは本当に歩き出そうとした。

「でも！」

リウはその袖をつかんでひきとめた。

「ランダットさんはちゃんとわたしに謝ってくれた。自分がしていることの意味くらい、ランダットさんはわかっている。だけどローナが病氣なんだよ。ランダットさんからしたら、ローナのほうが大切に決まってるじゃない。それにローナだつて病氣にかかりたくてかかったわけじゃない。これは誰が悪いってことじゃなくて」

止まったシャルスの袖から、リウの手は離れた。

「……もしひとり選ぶなら、それはわたし」

リウはうつむいた。

「わたしの、運が悪かったから。うつん、それよりわたしの頭が悪かったから。これくらいのことにも対応できないくらい、ぎりぎりすぎる挑戦をしようなんて誘ったから　だからごめん、シャルス。わたしも謝る」

「そんなことはない！」

突然両肩を引き寄せられて、リウの頭から鍔広帽が落ちた。

近づいたシャルスの顔が、今度はわずかに紅潮している。

「前も言ったじゃないか。必要以上に自分を責めるのはよくないって」

「シャルス……」

「きみは落馬の恐怖に打ち勝って、立派に 大天馬競 への権利を勝ち取ったんだ。僕はそんなきみを誇りに思う。きみは誰もが無理だと思っていたことを、ちゃんとここまでやってのけたんだ」

「ありがとう、でも」

「うちに、馬を売ってほしいと言ってくる人たちがいるんだ」

不意にシャルスは微笑んだ。

「ひとりには金持ちの商人で、エギルを自分の乗馬にしたいと、かなりの額を言ってきた。あいつは見栄えがいいからね。僕はこの話に乗ってもいいと思っている」

「エギルを売るのは!?」

「そりゃあ、僕もできればあいつはうちの牧に置いておきたいよ。エギルとは 天馬競 で一緒に戦った仲だ。マーセブルツツで、あの低くした頭で馬混みを割ったあいつの走りは、きみにも見せてやりたかった」

シャルスの微笑はふわりと広がって、リウを柔らかに包みこむようだった。

「だけど、いまの僕にはなにもかもはできない。まずはもっと牧を整える。そのために、エギルがもたらしてくれる金はとも役立ってくれるはずだ。 大天馬競 で評判を落とすくらいなら、いつそ出走しないほうがいい。そのほうがまだいい印象が残ってくれる」

「シャルス……」

「僕は少しずつこの牧を育てていくつもりだ。僕の勝利は、なにも今年の終わりにしか見つけられないわけじゃない。一生を懸けたその先にこそ、本当の勝利があるんだ」

ここにもだ リウはまじまじとシャルスを見つめる。ここにも自分の大切なものを持ち、それを守るうとしている者がいる。

ランダットにとってたつたひとつの大切なものは血のつながらない娘のローナで、天馬競 は金を稼ぐただの手段だった。

そしてシャルスにとつての天馬競 も、自分の牧を育てるための手段でしかない。ただの手段だからこそ、とらわれることなく、こうしてやめるといふ決断ができる。

彼らにとつて大切なものは天馬競 ではなく、それ以外のものなのだから。

じゃあわたしは ぼんやり考えようとしたリウは、両肩をつかむ手に加わった力に、注意を呼び戻された。

「協力してくれないか、リウ」

「えっ」

シャルスの真剣な表情に、どきんと心臓が跳ね上がる。

「一緒に牧を育てていかないか」

シャルスの申し出には言葉以上の意味がある。リウは直感的にそのことを理解した。頬が熱くなる。だが、妙にふわふわとした心の奥にはまた他の感情があることを、リウは自分でわかっていた。

わたしは。

恥ずかしさをこらえてシャルスを見つめ、答えようと息を入れたとき。

ふっとシャルスの手が離れた。

「返事は、いまでなくていいよ。とりあえずいろいろ後片付けをすませて、それからで」

リウは黙って鍔広帽を拾い上げ、髪をたくしこんでかぶった。視線はあげないまま、聞くまでもないと思いつつ確認する。

「…… 大天馬競 には、ランダルト組は出ないんだね」

「リウ、これはやれるかもしれないことじゃない。やれないこと、やっちゃいけないことなんだ。大天馬競 に出たいのなら、バルメルトウで来年また狙えばいい。だけどいまは、せつかくのエギルの値段を下げちゃいけない」

冷静な、だからこそ反論の余地もない意見だった。リウは心の中

で自分の愚かな質問を笑い、帽子の鍔に顔を隠しながらゆっくりうなずいた。

「わかった。」

ランダットが出ない以上、シャルスももう 大天馬競 に出る意志はない。そのことをリウは知った。

十

わたしにとつての 天馬競 ってなんだろう バルメルトウの背で揺られながら、リウはぼんやり考える。

ただの手段だったのか、それとも目的そのものだったのか。夏の盛りを過ぎて、どこまでも続く丘陵の緑は次第に色を変えてきている。匂い立つような生氣の色から、このはるか高い空へそのまま溶けてしまいそうな透きとおった色へ。

近づいている秋を、そしてその後の長い冬を、リウは予感した。「バルム……」

その首にリウは手を置く。厚い黒い毛の下に、研ぎすまされた馬体の躍動が感じられる。

「おまえは絶対、天馬だよ。わたしにはわかる。おまえは一〇年に一頭の馬だって」

リウはそのまま手をすべらせる。

「だって、おまえは勝ったんだから。わたしを背中に乗せて、それでも勝ったんだから」

バルメルトウの立った耳が注意深くくりりと回る様に微笑をこぼして、リウはなおも愛馬を褒めた。

「ランダルの名は忘れられても、バルメルトウ、おまえの名前は絶対に忘れられることはないよ。おまえはこれからも勝つ。勝って、天馬になるんだから」

リウは軽く合図を送る。

すかさずバルメルトウは駆け出す。鞍の下のしなやかな背、伸び

のある歩調。バルメルトウの走りは、これまでリウが乗ってきたどんな馬も比べものにならないほど快い。

まるで、空を飛んでるみたい　リウはそっと目をつぶる。

そうしていても不安は少しも感じない。バルメルトウとリウは一体となり、風そのものとなつて駆けていく。

リウがゆつくりと目を開けたとき、もうそこはイシャーマ牧だった。

唯一知人と言つていいローナは、いまはいない。イシャーマ牧のただ中にある白木壁の家へのぞんだリウは、少し緊張しながらバルメルトウから下りた。

少年が駆け寄つてきた。

「どちらさまですか？」

「ランダルム牧のリウ。カズートはいる？」

「カズート若さまでしたら、今日は北の牧へ出かけてらっしゃいます。お帰りはいつになるか、うかがっていません」

「そう……」

帰ろっかな、という気持ちがちわりと胸の底に広がった。リウはぐつと息を呑み、そんな弱気をもう一度押し込めた。ここで帰つてしまえば、きつと明日またここに来ることはできなくなる。そんな気がした。

「じゃあ、帰るまで待つてもいい？　このままでかまわないから」

「でしたら上の者に相談してきます」

「あ、ううん、ほんとに待たせてもらっただけでいいの。ここで立ってるから、だから」

「ですが困ります……」

「どうして？」

「僕にも仕事がありますし、だからといってお客さまを放っておくわけにも」

「ほんとにかまわないで。待たせてもらえれば十分なんだから」

「ですが」

いきなり横から声が入った。

「なんだ、どうした？」

上から覆いかぶせるような声には聞き覚えがある。リウは振り向いた。

カズートには似ていない兄、ダールグが家から出てきたところだった。彼はゆつくり歩いてきながら、立てた指を振った。

「ああ、カズートの友達じゃないか。相変わらず男みたいななりだね。どう、天馬競 はあきらめたの？ それでうちで牧童のまねごとでもさせてもらいに来たのかい？」

その顔に不自然に無邪気な笑みが浮かぶ。

「そうだな、ちゃんとした服に着替えれば、メイドのまねごとくらいならさせてあげられるかもしれないよ。ちょうどひとりいなくなっちゃったところだしね」

かっど頭に血がのぼる。ダールグは無邪気な無神経を装って、リウをいたぶって楽しんでいる。それでもいまは、この男に逆らって追い出されるわけにはいかなかった。

「……こんにちは、突然押しかけて申し訳ありません。カズートを待たせてほしいんです」

リウは目を伏せさせ、頼んだ。

「ここがかまいませんから」

「とんでもない！ 馬になにかされたら大変だからね。それに馬って神経が繊細なんだよ」

さすがにリウは顔をあげる。

「なにもしません！ これでも牧の娘です、馬の扱い方くらいわかっています！」

ダールグはやけに思わせぶりに息をついた。

「やれやれ、カズートのやつめ。あれだろ、あいつが留守にしていたときだろ？」

「え？」

「だから、二か月くらい前だっけ。カズートが留守にして、何日か帰ってこなかったとき。あれ、きみの家に行つてたんだろ？」

「なんの話ですか？」

ダールグは、無邪気すぎる目をさらにわざとらしく見開いた。

「おや、僕はてつきり、きみが大変なことになったと気づいて押しかけてきたのかと思つたよ。きつちりと話をつけにね」

「話つてなんのことですか？ わたしはただ、お礼をしようと思つて来たんです。カズートはわたしの馬を助けてくれましたから」

「馬を、ねえ」

「そうですね、この馬です。わたしが下手な落馬をしたから、バルムも人を乗せられなくなつて。だけどカズートが、もう一度人を乗せて走ることを教えてくれたんです」

「あはは！」

いきなり大声で笑い出したダールグに、さすがにリウは表情を硬くした。

「そんなにおかしいですか」

だが、ダールグはリウの言葉など耳にも入つてないようだった。

「うそうそ、そんなうそなんてつかなくていいよ！僕は話のわかる兄貴だからね。お医者さんにはもう行ったの？それともカズートのやつをつかまえてから？」

「お医者さんつて、一体なんの話ですか」

「だからさ。もう少ししたらきみのお腹が大きくなつちゃつて、周りにも知られちゃつてことだろ」

「なっ」

恥じらいどころか怒りすら忘れて絶句するリウを、ダールグはにやにや笑いながら上から下まで眺める。

「それにしても下手なうそだね。カズートが馬に乗つた、だなんて。あいつが馬に乗れるわけがないんだよ。なまじつと友達だったから、そんなこと、想像もつかなかつたんだろ？ あーあ、ばれちゃつたねえ」

「えっ!？」

ダールグにリウは詰め寄った。

「どういうことですか! カズートが馬に乗れないって!」

ダールグは半歩後ずさり、リウの息が乱したとでもいうように胸もとを直した。

「どうもなにも、そのまんまの意味だよ。あいつは馬には乗れない」
リウの脳裏を、これまで見てきたカズートの騎乗姿が通り過ぎていく。自分よりはるかに大きな馬をやすやすと御していた子供のころ。大胆に体を委ね、鞍下で疾走する馬とひとつの生き物のようだった少年のころ。リウは彼をこの世で一番の乗手と信じてきた。

だが、一年の不在の後、考えてみれば馬に乗ったカズートをリウは一度も見たことがない。彼はいつも馬車に乗っていた。いつも馬に乗っていた以前とはまるで違っていた。

「……カズートが馬に乗れない……?」

「そう。去年、南部で落馬したんだよ。それで、馬の蹄がなんだかやけにうまくぶつかっちゃって、首がざっくり切れちゃってね。あたり一面、真っ赤かったってさ」

ダールグが無神経にやってみせた首をかき切る仕草に、リウはぞつと身を震わせる。

「運ばれてきたときの顔といたら、掛け値なしに真っ白だったよ。僕もこれはだめだと思ったね。まああいつは丈夫なたちで、一年かけて天国寸前で引返してきたけど、それきり馬には乗れなくなったんだ。一度あいつが馬に乗ろうとしたところを見ちゃったけど、いやあ、さすがにかわいそうになったね。顔がまた真っ白になっちゃっててさ」

でも、とリウは弱々しく抗う。

「……カズートは、本当にバルムを……」

ダールグの笑い声がリウのつぶやきをかき消した。

「ねえ、だからいいんだよ、そんなうそつかなくて。あいつにできるわけないんだからさ」

頭がひどく混乱する。バルメルトウを元のバルメルトウに戻してくれたのは誰だったのだろうか。本当にカズートだったのだろうか。リウがやはり変わってないと感じた彼は、知らずに夢見てしまった都合のいい幻だったのだろうか。

「正直に言っちゃいなよ。カズートに責任取って結婚してもらうか、それが無理なら手術代も含めたまとまった金が欲しいんだろっ？」

ダールグは相変わらず、一見無邪気ににこにこしている。だが、その目の奥には冷ややかな光がある。持てる自分とは違う、持てざる者を蔑む光。

「ずばり、いくら？ きみの場合こうなるまでも長いから、相当ぶっかけてくるよね」

混乱の中、相手への怒りよりも、悲しみばかりがこみあげる。そんな自分にいらだつどころか、ますます悲しくなっていく。この人にはなにを言ってもわからない、わかってもらえない、そんな絶望が胸を押しつぶしていく。なにもかもを持つ彼は、この牧の人間は持たない者であるリウの心を決してわかってはくれない。

「……わたしは、ただ……」

「ああ、だからだめだめ！ あいつがどんな調子のいいことを言っただか知らないけど、そんなことはありえないから」

「ただ……カズートに……」

ありがとう　そう伝えたかった。ごめんなさい　そう謝りたかった。

そのふたつの気持ちだけを伝えて、三つ目の気持ちは口にするつもりもなかった。誰かにわかってもらうどころか、そんな想いがある気配すら絶対に感じ取られたくないと思っていた　はずだった。それなのに、しかも相手は望みどおりリウの感情を無視してくれているというのに、どうしてこんなにも心が傷つけられるのだろうか。

ダールグはかまわず、やれやれといったふうに両手を広げる。

「こんなことになるんじゃないかと、昔から思ってたんだ。あいつにも何度も忠告してやったんだよ。イシャーマの人間が軽々しくぶ

るまっつな、ってね。きみもさ、つい期待しちやっただら？ イシヤマの一族に加われるんじゃないかって。地元の、それも無名の家の娘がそうなるなんて、絶対にありえないんだけどねえ。ほら、見てごらん」

ダールグはリウの横に来ると、首からさげた細長いペンダントを開いて見せた。

リウは逆らう気力もなく、視界に入ってきた親指ほどの細密画をぼんやり見つめた。

きつとこれひとつでランダルム牧が買えるほどの値段だろう。永遠に色あせないエナメルに美しい姿を残しているのは、白い首に真珠のネックレスをつけた金髪の姫君だった。

「僕の婚約者だよ。南部の伯爵姫。冬にまたむこうに出かけて、春になったら式をあげるんだ。立派な式になるよ。北部南部の高名家の者が全部集まって、陛下のご臨席も仰いで。なにしろ足かけ二年がかりで準備したからね」

くすくす笑うダールグは、ぱちんとペンダントを閉めた。

「わかるだろう、これがイシヤマの結婚なんだ。あいつも、あれでも僕と同じイシヤマの人間だからね。きみとは住んでいる世界が違うんだよ」

草原を吹き抜ける風が遠い。夢を見ているときよりも夢のようだ。もしかしたら、むしろこれまではつきりしていると思えたものこそが、夢だったのかもしれない。牧の馬たち、駆けてくる騎影、たわいないやりとり 彼の隣にいた時間。

「わたしは……」

がらがらと馬車の車輪が勢いよく、ほとんどはずれそうに回る音がやってきたかと思うと、突然止まった。

「兄貴！」

その声にリウが凍りついているあいだに、足もとに新たに別の影が差し、傍らに立っていたダールグがいきなりよろけていなくなる。「なにしてた、なにを言った！」

「なんだ、ごあいさつだな。僕はおまえの客の相手をしてやっていただけじゃないか」

「うそつけ！ 一体こいつになにを言ったんだ！ どうせよけいなことなんだろう！」

「よけいなことじゃなくて、大切なことだよ。大体、そもそもおまえがきちんと話しておかなければいけなかったことじゃないか」

「なんだ、言え！」

「おいおい、それが兄さんに対する言葉なのか？ 僕はおまえの友達にありのままを教えてやっただけだよ」

「言えつて言つてんだろ！」

「まったくしよつのないやつだな。だから、ばかな夢はさっさと捨てて、いくらならいいんだつて聞いたんだよ」

「いくらつてなんだよ！？」

「白状しろよ、結婚するとか甘いかんとか甘いことをささやいて、この子のお腹を大きくしちゃつたんだろ？ 軽はずみなことはするなつて、あれほど っ！」

言葉にならない叫びとともに、どさりと重い物が倒れこむ音がした。

リウはのろのろと振り向いた。

地面に尻餅をついて、ダールグが頬を押さえた顔に怒りの表情を露わにしている。だがそれ以上の怒りが、兄を見下ろすカズートの顔を強ばらせ、その肩を震わせている。

「ふざけんな！！」

かえつてそれ以上の言葉は口から出てこないらしかった。

ダールグが頬をぬぐって立ち上がった。怒つたままのその顔に不気味な笑みが浮かぶ。

「ふん、乱暴なごまかし方だな。違つとは言わせないぞ。この前の留守のあいだ、この子はおまえが馬に乗っていたなんて言ったんだ。これがうそじゃなくてなんなんだ？」

「うそじゃない！ おれはずつとうちの牧にいた。ただ家に帰らな

「かつただけだ！」

「へえ、うそじゃないっていうなら、兄さんに見せてくれよ。昔から僕の乗り方にはさんざん駄目を出してくれたじゃないか。あのころみたいにお手本をさ、ほら！」

ダールグは家の前の横木につないだ馬を指さした。

カズートはダールグをにらむと、すたすたと馬の横に行った。手綱をつかむ。

「！」

リウは目をみはった。

鞍に置いた手がぎこちなく固まっている。両足はいつまでも地面に張りつき、表情の消えた横顔はここからでもわかるほど青ざめている。

こんなカズートをリウは見たことがない。けれども、いまの彼と同じものは知っている。馬に乗れなくなったときの自分を。

カズートが馬に乗れない　信じられない光景に呆然としたリウの手の中から、そのときするりと手綱が抜けた。

「……バルム」

リウは勝手に歩き出した愛馬をぼんやり眺めた。

バルメルトウはカズートの肩に鼻面をすりつけた。

カズートは肩越しに振り返り、バルメルトウに無言で微笑んだ。

それから体ごと向き直る。バルメルトウの影に隠れる寸前、彼はリウをちらりと見た。

「カズート、無理は」

しないで、とリウが声をかけるより早く、バルメルトウの背にカズートの姿が現われる。顔はまだ青ざめている。体には不自然な力が入り、手綱をつかむ手もぎこちない。まるで特別怖がりな初心者だ。リウの心に焼きついているあざやかな騎乗姿は見る影もない。

だが、それでも彼はたしかにバルメルトウに乗っていた。

「っ！」

ダールグが息を呑んだ。それからひどく怖い顔になって家へと帰

っていった。少年がおろおろと、そんな彼についていった。

カズートは兄に一瞥もくれず、ゆっくり歩き出したバルメルトウにまたがっていた。あたりをぐるりと一周してバルメルトウが止まると、彼は鞍を下りた。そして手綱を引いてリウのところへ戻ってきた。

「……悪かった」

リウは彼を見つめた。

絹のスカーフがなくなつた首もとには、大きな傷痕が見えている。馬の蹄にえぐられたという、リウの知らない彼の傷。目はその傷痕に吸い寄せられて、自分こそ謝らなければならないと思つているのに、他の言葉がこぼれてしまう。

「……馬、乗れなくなつたって……」

カズートは小さく舌打ちをすると、ダールグが消えた家をにらみ、傷痕に手を置いた。

「よけいなことばかり言いやがつて」

「でも、いま、バルムには……」

カズートは視線をリウからそらせたまま笑つた。

「人を乗せるのが怖くなつた馬と、馬に乗るのが怖くなつたやつとで、気が合つたんだよ。だからなんとか乗せてもらった」

彼の傍らのバルメルトウが、そのとおりと賛同するかのようにリウを見つめた。

「あーあ、それにしてもみつともないとこ見られたな。おまえがそれを褒めるのなんて、馬乗りだけだったのにな」

以前そのままに作つた口ぶりが、かえって彼の心の傷の深さを感じさせて痛々しい。

たいしたけがもなかったリウでさえ、再び馬にまたがるまでには自分の中に巣くつた恐怖を克服しなければならなかった。落馬がそんなに怖いならこのまま食はず眠らず死んでしまえばいい、そんなところまで自分自身を追い詰めて、やっと再び乗れるようになった。

まして落馬事故で死の寸前まで行ったというカズートの恐怖は、

どれだけのものだったのだろう。このようにまた馬の背にまたがることができるようになるまで、どれだけの勇気を奮い起こさなければならなかったのだろう。

傷痕に置いた彼の手が離れた。

「ま、今回にかぎってはそれでよかったってことにしとけよ。おかげでこいつと気が合ったんだから」

視線が戻ってくる。

「リウ、絶対にバルメルトウを天馬にしてやれよ。こいつは一〇〇年に一頭の馬だ」

切れ長のその目が笑った。

「」

彼が残していったスカーフは持つてきている。イスラの店でさりげなく絹の手入れの仕方を聞き込んで、さらさらとすぐにくずれてしまふ生地刻苦しながらきれいにたたみもした。だが、いまそれを差し出すことはリウにはできなかった。傷痕を隠すことをやめ、勇気を奮ってもう一度馬に乗ってくれた彼にこれを返すなど、この上ない侮辱だと思った。

彼に伝えなければならぬことは、そうでなくても他にもたくさんある。

いくら言っても足りない謝罪とお礼。 大天馬競 をあきらめることになったこと。できればバルメルトウを引き取ってもらえないか、来年の 天馬競 にカズートの馬として出してはもらえないか、そのことも頼まなければ。

「あのね」

だが次の瞬間、リウの唇は勝手に動いた。

「わたし、ずっとカズートが好きだった」

ひとつだけ伝えたのは、それらすべてをひっくるめたよりなお大きな想いだった。

「だけどわかってたから。お兄さんの言うとおりだって、ずっとずっとわかってたから。わたしたちは住む世界が違っていて、一緒にい

られるはずがないって、わかってたから」

友達としてか、もしかしたらそれ以上なのか。彼が自分をどう思っているのか、だからリウは気にしたことがない。最初から友達以上の関係などありえないと知っていた。だから彼が友達として扱ってくれれば、それで十分だった。

「だから勝って牧を続けたかった。もし牧を続けられれば、これからも馬を飼っていられば、カズートとほんのちよつとでもつながっていられる気がしたから。もちろん全然違うけど、でもまだ少しは近い世界にいらるって思えたから　そんな夢を見てた」

ランダットにとって、そしてシャルスにとって　天馬競　が手段だったように、リウにとってもやはり　天馬競　は手段だった自分の夢のための。

けれどもそうした夢すら許されないほど、ふたりの世界は違っていた。

「……バルムを、もらってくれないかな」

つぶやくように頼んで、大きく息をつく。

自分がすっかりからっぽになってしまったようで、もう何も出てこなかった。立っているというよりは、周囲の空気に押しやられて立たされているような気分だった。

さらさらと草が鳴っている。

草を鳴らす風は、からっぽになったリウの心も吹き抜けていく。

バルメルトウはリウにとっては間違はなく天馬だった。リウを乗せて風となり、決して届かない空までも駆けていくこともできるよ
うな、そんなひとときの夢を見せてくれた。

「……もらえばいいのか」

風の中にカズートの声があった。

「ん」

ありがとうと言うことすら、リウは忘れていた。もう自分は乗ることのできない風をただ見つめていた。

あの、というためらいがちな呼びかけに、リウは顔をあげた。

少年が困り顔を隠しきれずに立っていた。

「お送りするよう、カズート若さまから言いつかりました」

リウは少年のむこうを見た。

広大な牧には風だけが吹いていて、カズートもバルメルトウもすでに姿を消していた。

「……ありがとう」

最初に言うつもりだった言葉がやっと口を出た。

七 草原の風

「じゃあ、行ってくる」

またがる馬はバルメルトウではなく、シャルスやランダットといった仲間もいない。

大天馬競の舞台となるストローンへの旅が、こんなにも寂しい単騎の旅になるとは、リウはまったく思っていなかった。

行けないかもしれないという覚悟はしていた。だが、もし行けるとしたら、ストローンへの旅は、もっと晴れがましく、もっと喜ばしいものになるはずだった。

「……気をつけてな」

目を赤くして声もない母に代わり、父はそう言ってくれた。リウはにこりとした。

大天馬競には出られない。

昨夜、両親にはそう話した。

さんざんわがままをして、期待を持たせて、それなのにこんなことになってごめんなさい。やっぱりわたしには無理だった。そう詫びた。

母は泣きながらリウを抱きしめ、父は無言でリウの頭に手を置いた。リウのしたことを認めるとまではいかないにしても、ふたりはリウを許してくれた。

だから、リウは馬に合図を送って走らせた。頬に風を受け、行く手の緑の地平線を見つめながら、自分自身に言い聞かせる。

「夢を見る時間は、これでおしまい」

リウはずっと子供だった。ベッドの中でぬくぬくと楽しい夢を見ているだけの子供だった。いいかげんに起き出さなければならぬ。ストローンで見るものは最後の夢、現実の始まりとなるはずだっ

た。

王家の祖先がいた古城が残るストロークンは、町のあちこちに当時の防壁がそびえている。かつて兵が行き来していた白岩の壁の上には、いまは大きな日傘がぎっしりと並んでいる。明日の 大天馬競に備えて特等席を取った熱心な観客のものらしい。通りも色とりどりの花や布で飾られ、行き交う人びとの顔も明るい。

そんな祭の雰囲気から、自分ひとりだけがはじかれた気がした。リウは気後れを感じつつ、通りを進んだ。

行き着いた大広場では、王家の祖先とその愛馬が等身大の大理石の像となって、人でごった返す足もとを見下ろしている。広い肩には豊かな色合いのマントがかけられ、いにしえの栄光をいまよみがえらせていた。

混雑の中に、リウは軍服を探した。

馬上でなければ無理だったかもしれない。広場に規則正しく並ぶ黄金旗の、ひときわ大きな旗の下に、リウの目は黒い固まりをとらえた。リウは行く手の人びとに声をかけながら、人形のように動かずに座っている軍人の前になんとかたどり着き、馬を下りた。

「あの」

乾いた唇をこじあける。 大天馬競 への参加ともなれば、こうして競技直前の前日に受付をしようとする組など他にはいないだろう。まして、辞退しなければならぬ組など。恥ずかしさとも口惜しさともつかない感情がリウの身をすくませる。

「あの、ランドルム組です。今回」

軍人は机に乗った名簿に視線を落とし、それからもう一度顔をあげた。

「ランドルム組なら、すでに出走受付はすんでいるが」

「えっ！？ で、ですが許可証はここに」

リウはあわてて筒を出した。

軍人は無造作に筒を受け取り、中の出走許可証を一瞥すると、リ

ウに返した。

「よし、確認した」

ペンを持つ手が動き、名簿に書かれていた細かい字に線を引いて消した。

「待ってください！ 出走するだなんて、そんな話は聞いていません！」

「手違いか？ 昨日手続きは終わっている。ただ出走許可証が遅れているという話だった」

「でもわたしたち、もう出られなくて」

「だからなにかの手違いだろう。現にこうして受付はすんでいる。

ああ、だが、来年も出るのならば、今度は受付時に出走許可証を忘れないように」

「あの……」

頭がくらくらする。リウはまだ自分が夢を見ている気がした。

「一体誰が、手続きを……？」

「シャルス・ノアとなっている。届け出られた宿泊先は銀雲亭だ」

「……ありがとうございます……」

リウはふらりと机の前を離れた。

道行く人に尋ね、銀雲亭にたどり着く。

中心地からは少しはずれた、大きくはないが居心地のよさそうな宿で、門をくぐった中庭には他の出場者の馬がつながれて、手入れをされていた。

その中に、エギルの高々とした頭があった。

「シャルス！」

リウは鞍から飛び降りると、そのむこうにいたシャルスに駆け寄った。

「どういうこと！？ どうして手続きを！？」

振り返ったシャルスは驚いた顔をした。

「それは僕が聞きたいよ。やめるって決めたはずなのに、一体どう

「いうことなんだい？」

「えっ？」

「それぞれ自分の馬とことん息を合わせよう、だから僕もエギルだけに集中してほしいって、ユーリシスを連れていったよ」

「誰が？」

「だからランダットだよ。きみに説得されたって、うちに来たんだ」
リウは忙しかぶり振る。

「ランダットさんにはもうずっと会ってない。ローナが治ったかどうかも聞いてない」

「なんだって？ ……じゃあ、僕は騙されたってことかい？」

シャルスは苦笑した。

「本当にしょうがないな、あの人は。一体なにを考えているんだろう」

「ランダットさんは？ 部屋？」

「いや。この銀雲亭に部屋をとっておくよう、あとから来た彼の手に書いてあったんだ。だからおとといからエギルといるんだが、彼はまだだ」

リウはエギルに改めて目をやった。

体の茶と脚の黒、二色の毛はつやつやと輝き、贅肉をそげ落として張り詰めた馬体には筋肉と血管が浮き上がっている。他の馬と比べても遜色のない、大天馬競 にふさわしい馬だった。シャルスはエギルを完璧に仕上げていた。

「……バルムは……？」

シャルスは少しだけ表情を硬くした。

「僕が聞きたいね。どうしてバルメルトウに乗ってこなかったんだい？」

「……あげたから」

「え？」

「わたしはあの子を天馬にしてあげられないから。だからカズートにあげた」

「リウ」

シャルスは傷つけられた顔をした。

「今年は出走できなくても、来年、もう一度挑戦するんじゃないの？」

リウは、今度はゆっくりかぶりを振る。

「来年なんて、うちにはないもの。ランダルム牧は今年の冬は越せない。だからわたしも、働きに出るつもり。どこか、ずっと遠くへ」

「ありがとう、シャルス。本当にありがとう。だけどだめだよ、そこまで甘えられない」

「甘えてほしい、頼ってもらいたいと、僕自身が望んでいるのに？」

「わたしにはそんな資格なんてない。だってわたしは」

シャルスはにこりとした。

「ああ、やつときみは自分の気持ちを口にできるようになったんだね。彼に恋しているって」

「シャルス」

「いいんだよ、それで。ようやくありのままを認められるようになったということなんだから。わかっただろう、きみは彼に恋している。だけど、それがわかったのなら、もうひとつのこともわかったはずだ。彼は、結局は違う世界の人間なんだって」

言葉を返せないリウの表情から、シャルスは答を読み取ったらしかった。あのふわりとリウを包みこむような優しい顔になった。

「僕は気が長いんだよ。きみを待てるよ、いつまでも」

シャルスはどこまでも優しくしてくれる。リウの気持ちが自分ないことを知りながら、それでも待つとまで言ってくれている。

そんな彼に感謝するどころか、負担としか思えない自分がまた申し訳なくて、リウは泣きそうになった。

「……………どうしてそんな……………」

「きみが幸せになるところを見たいからさ。彼はいいやつだ。だけど、彼はきみを幸せにしてやれない。きみは彼の世界で暮らすこと

はできないし、彼はきみの世界で暮らすことはできないんだ。彼はあくまでもイシャーマの人間だ。きみに恵みを施すことはできても、きみの手を取って隣に立つことはできないんだよ。彼にもそれはわかってはいるはずだ。だからずっと、きみにもなにも言わずに来ただろう?」

それが彼なりの誠実さなんだろうけれどね、とシャルスは言い添えた。

「この 大天馬競 で、彼の馬はまたいずれかの天馬の称号を獲得だろう。それを手土産にして、彼は今年の冬もまた南部へ行く。去年の冬は、兄のつきそいとしてだったけれど、今年はきつと彼自身の婚約のためにね」

シャルスの口調は淡々として、すでに起きた過去の事実を語っているかのようだった。

だからかもしれない。不思議とリウに悲しみはなかった。そうだろう、といういくらかの寂しさがあっただけだった。最初から結末はわかっていたからこそ、リウはずっとなにもかも気づかないようにしてきた。いまその結末がやってきた。それだけのことだった。けれども、だからといってシャルスに甘える理由にはならない。

「……シャルス、わたし」

「返事は片付けをすませてからだよ、リウ」

「え……?」

「ランダットが出ると行っているんだ。ここまで来たら、天馬を獲ろう。バルメルトウにはしばらく乗ってないみたいだけれど、きみたちならすぐに息を合わせられるだろう? きつとランダットがバルメルトウも連れてくる。彼らは僕が待つから、きみは部屋でゆっくり休むんだ。明日のために」

明日のため。

シャルスの言葉はひどくうつろに響いた。明日走って、仮に勝ったとして、それで自分はなにを得るのだろう。

リウは自分の想いをカズートに伝えてしまった。せめて彼に伝え

ていなければ、牧を続けているかぎり彼とほんの少しでもつながっていられるという夢を見つづけられたかもしれない。けれども一度伝えてしまつて存在を知られてしまつた想いは、夢を夢のままにしておくことを許してはくれない。

リウがイシャーマ牧と同じタールーズ地方にいるかぎり、カズートはリウのことを、リウの想いを、ずっと意識させられることになる。

わたしがいたら、迷惑になる。

宿の階段をのろのろとあがりながら、リウはランダットの気まぐれを初めて恨んだ。翻心に感謝こそすれ、恨む筋合いなどないとよくわかりつつも、それでもランダットを恨まずにはいられなかった。そんな醜い、弱い自分を呪いながら、リウはベッドに体を投げ出した。

十

もやもやとした夢はノックの音で破られた。リウは目を覚ました。窓の外はまだ暗いが、秋の気配が濃い冷えた空気が夜明けが近いことを教えてくれている。リウは上着をひっかけ、扉に近づいた。

「起きているかい、リウ」

リウは扉をあけた。シャルスだった。ランタンを持ち、その顔は強ばっている。

「ランダットがまだ来ないんだ」

「えっ？」

「ひとまず大広場まで行こう」

「そこでも会えなかったら？」

「残念だけれど、辞退になる。ランダットはもちろん、ユーリシスもバルメルトウもいないんじゃない、それしかない」

むしろそうなってくれればいい、とリウは密かに願った。

あわただしい朝食後にむかった集合場所の大広場は、集まった馬

と人とでそこだけ気温が高くなっていた。

年に一度の大天馬競 は、馬に関わるすべての者が出走を、そして勝利を願う場だ。自分や馬の世話係を数名ずつ連れてきている乗手も少なくなき、さらに自分では乗らない馬主も激励に来ていて、混雑ぶりはこれまでリウが見たどの町の 天馬競 よりも激しい。

薄闇のむこうの人混みに、ほんのり輝くような黄褐色の馬の頭が見えた。のんきそうに鼻先を伸ばしてあたりを見ながら遠ざかるその馬は

「ユーリスス！」

リウは叫んだ。

しかしランダットの赤毛頭は見つからないまま、ユーリススの姿も人混みに消えた。

リウはシャルスに声をかけた。

「エギルを連れてたら遅くなっちゃう。シャルスはもう一走騎の集合旗へ行つて。わたし、二走騎の集合旗を見てくる」

「待った、リウ。この人混みで別れたら、もう僕たちも落ち合うことなんて無理だ」

「シャルスは出走準備していて。もし出走前にランダットさんにもバラムにも会えなかつたら、そっちに行くから」

馬連れでは早歩きも難しいが、人ひとりなら走る余地はまだある。リウはシャルスの返事を待たずに彼から離れた。

集合旗はまだ立っていない。だが、大体の場所はすでに決められている。リウは二走の集合旗が立つ予定の広場の一角を指した。

馬のいななき、蹄で石畳をかく音。興奮した人の声の中、ときどき聞こえる落ち着いた話し声は 大天馬競 の常連だろうか。

きつとカズートも来ているだろう。そしてイシャーマ牧のあの見事な月毛の馬は、天馬の称号を得るに違いない。

月毛の色から連想は勝手に働き、リウはダールグに見せられた金髪の貴族の姫君を思い出す。夢見るような瞳に、ふつくらとした唇。同性のリウですら見惚れてしまうような美しい姫君はきつと他にも

いて、リウには一生縁のない華やかな南の地で、もしかしたらいまこの瞬間もカズートを待っているのかもしれない。

「 ばか」

リウは小さく自分を叱りつけて、とりとめもない夢を追いやった。

ランダットがバルメルトウを連れてくるなら、カズートも彼からなんらかの話は聞いているはずだった。そして、ひとりであるランダットより、連れてきた牧童やなんやらで大人数のイシャーマ牧の一行を探すほうが楽なのは間違いないかった。そうは思ったが、リウの目は自然に人の集まりを避けてしまう。

カズートの姿を見たくもなければ、彼に見られたくもなかった。どの称号を得るかだけを問題にしているはずの彼に、いまになっても自分の馬も連れずに、こそこそとほつつき歩いているみじめな姿を見せたくはなかった。

あたりはますます混んできた。小走りしていたリウも、ついに歩くしかなくなった。

集まっている男たちは、当たり前だが皆リウよりも大きい。そんな中を歩いていると、小さい自分がさらに小さくなっていくように感じられる。リウはきつと唇を引き結び、すばやく頭をめぐらせながら先を急いだ。

後ろに残った手が戻る前に、雑踏のなにかが触れた。と、手の中に細長い物が落ちてきたかと思うと、大きな手に包まれてぎゅっとそれを握らされた。

使い込まれてくたくたになった革 手の中にあるのは、これまで何百回何千回と握ってきた、手綱の感触だった。リウはあわてて振り向いた。

「バルム」

漆黒の馬が突如としてそこにいた。自分の魔法はどうだと言うかのように、深い色の目がいたずらっぽくリウを見つめていた。

リウはおずおずと自分の馬に手を触れた。

丹念に梳かれた黒い毛が、薄らいでいく夜とその秘められた輝きを一身に凝らしたかのように暗く光っている。筋肉はしなやかにみながり、風と化すその瞬間を待っている。

行こう、とバルメルトウはぶると鼻を鳴らし、前脚で軽く地面をかいた。

大広場を見下ろす尖塔から、高らかな金管楽が降ってくる。

それを合図に、一斉に集合旗がひるがえる。

リウははっとあたりを見わたした。

「ランダットさん！」

しかし、二走の馬と人とが旗を目指して集まってきて、混雑はいっそう激しく、リウはすぐにバルメルトウをかばうので精いっぱいになった。この中で特定のひとりを見つけることなどできはしない。それどころか、自ら動かなければこのまま二走の人馬の中に埋もれてしまいそうだった。リウはすばやくバルメルトウの背にまたがり、甲高くなるのもかまわず声を張り上げた。

「中継地で！」

自分の声がランダットの耳に届いたことを祈りながら、リウは彼方の三走の旗のもとへとむかった。

ランダットに聞こえただろうか。シャルスはちゃんと一走として準備できているだろうか。心配はあとからあとから浮かんでくる。

中継地までの道行きを思いに沈んで過ごしたリウは、ふと別のことに気づかされた。

鞍下を感じるバルメルトウの馬体　問題はなにもない。闘争心の強いバルメルトウだが、まだ走るべきときではないと知っている。だから馬群の中の一頭としておとなしく歩いている。その歩調にはまったく違和感はない。バルメルトウはいつもどおり歩いている。

むしろ、いつもどおりすぎるほどだった。

バルメルトウにはひと月近くも乗っていない。これだけ長く離れていたのは初めてのことだ。当然のことながら、その間バルメルト

ウに調教をつけてここまで仕上げてくれたのは、リウではない。馬にもそれぞれ癖があるように、乗手にもそれぞれ癖がある。いい乗手は馬の癖を知って対応するが、いい馬もまた乗手の癖を覚えて、それに対応してくれる。

ただ乗るだけならどんな馬でも問題はない。しかし、自分自身の体の延長であるかのようにぴたりと息の合う馬はなかなかいない。それは相性だけでなく、毎日乗った末にやっと獲得できる繊細な感覚で、つきあいが途絶えれば容易に薄らいでしまう。

バルメルトウに微妙なぎこちなさを感じてもおかしくはなかった。むしろ、感じないことのほうがおかしかった。

リウはほとんど笑うような小さな息をつく。

「おまえ、ランダットさんにどんな調教をつけてもらったの？」
バルメルトウは耳をぴくりと動かしただけで、もちろんなにも応えない。

リウは今度こそくすりと笑うと、大きく息を入れて顔をあげた。改めて、自分の戦いに意識をむける。

途端、目に飛びこんでくるのは、周囲の駿馬たちだ。質だけではなく数もまたリウを圧倒する。この三走を走る馬だけでも、各天馬競の全出走馬くらいはいそうだった。

当然だった。本来 天馬競 といえばこの 大天馬競 のこと、かつては騎士の名誉を獲ようと国中の人と馬とが集まったものだからだ。

あまりに出走馬が増えすぎ、また 天馬競 を主催したいという町が出てきたために、いまのような 天馬競 での二勝という出走条件が設けられるようになった。しかし、すべての馬と人との挑戦というそもそもの意識は変わっていない。逆に言えば、どんな馬だろうとどんな牧だろうと、二勝さえすれば 大天馬競 の出走を拒まれることはない。

「それが、こんなにいるんだよね……」

天馬競 の一勝で十分だと考えていた以前の自分を、リウはひ

どくちつばけに感じた。と同時に、それをちつばけと感じるいまの自分に驚きもした。

当時はその一勝すら遠かった。だが、いまは二勝し、最初は考えてもいなかった 大天馬競 にこうして出ている。あたりの馬はすべて駿馬に見えるが、バルメルトウもまたそうした駿馬の一頭なのだ。

リウは目を閉じる。

バルメルトウがランダウム牧に生まれてくれたこと。シャルスが協力してくれたこと。そしてランダットという希有な助っ人を見つけたこと。どれもがリウにとっては奇跡だった。そんな奇跡がいくつも起きてくれたからこそ、リウはここにこうしていられる。

「勝たなきゃ」

自分自身のためではない。

最初は自分自身のためだった。少しでもカズートとつながっていたいと願ったからだ。その願いはもはや永遠に失われて、たとえ 大天馬競 に勝ったところで叶うことはない。けれども、勝つ理由は他にもある。勝ちたいと願った自分を助けてくれた人たちのために、リウは応えてみせなければならぬ。

リウはバルメルトウのたてがみに指をからませた。幸運を求めたことではなく、くしけずられたたてがみを確かめるためだった。

「こんなにきれいにしてもらって」

リウはにこりとする。

バルメルトウは勝つだけの準備をすっかり整えてもらっている。

ランダットのことで、ユーリススも同じように仕上げているだろう。そしてエギルの仕上がり具合はリウ自身の目で見ている。

「絶対に勝つよ、バルム」

最初で最後の 大天馬競 。

それ以外の結末などありえない リウは自分に誓った。

緑の草の海が風に揺れている。透きとおった秋の陽に葉の裏がき

らめいて、さらさらと涼やかな音を立てる銀の波が広がっていく。どこまでも、どこまでも。

緑の地平線の、さらにその先へ。

リウは北部の象徴のような景色を飽きもせず見つめていた。不思議なほど心は落ち着いていた。他の人馬はまったく気にならない。生まれ育ったこの地の風になる一瞬を、リウはバルメルトウトもにただ待っていた。

西の丘の上に煙が立った。合図の狼煙だった。ざわめく参加者たちの前に、軍人が姿を見せた。

「まもなく最初の二走騎がこの中継地へ入ってくる。それが自分の組の者でない場合は適宜移動し、他の出走を妨げないよう。また万が一、他者への妨害、乱闘などがあつた場合は、状況により失格者を判断し……」

軍人の説明は続いているが、まもなくの出走と聞いた出走者たちはうわついて、それどころではないようだった。鞍帯どころか手綱まで確認しているのはまだ落ち着いているほうで、中にはむやみに鞍に飛び乗っては飛び降りることをくりかえす者までいた。

そんな姿に苦笑し、自分にこつも余裕があることに驚きながら、リウもバルメルトウの鞍帯を確認した。

「ユーリスも、きつとすぐに来るよ」

思わず「ユーリスも」と言ってしまったのは、当然のように馬群から進み出てきた月毛の馬を視界の隅に見てしまったからだ。リウはちらりとそちらを向いた。

軽く曲げた首の長いたてがみが、かすかな風にそよいでいる。月毛の馬は相変わらず神々しさすら感じさせるほど美しく、その足取りも踊るようだった。

あの馬を連れて、カズートはこのあと南部へ行くのだろう。同じく月色に輝く金髪の貴族の姫君に会いに行くのだろう。そんな考えがまたよぎり、リウは顔をそむけた。体を倒して、バルメルトウの首をぼんと叩く。

「大丈夫」

励ましにも慰めにもならない、まったく意味のない言葉は、バルメルトウというよりも、急に落ち着かなくなった自分自身に向けたものだった。

心が揺らいだ途端に、周囲の馬も乗手全員が、バルメルトウや自分など相手にならないほどの実力者ぞろいに見えてくる。

不安がとめどなくふくらんでいく。勝てるのか。これだけの駿馬の中、五着までに入れるのか。そんなことが本当に自分にできるのか。

自分自身の将来も賭けてくれたシャルス、ずっとつきあってくれたランダット、そしてリウを許してくれた両親。

リウをこの場に連れてきてくれた彼らに応えることが、こんな自分にできるのか。

「来たぞ！」

誰かが声をあげた。

ゆるやかな緑の丘を越えてきた乳色の馬体は、見覚えのあるイシヤーマ牧の馬だ。

乗手たちの口から、感嘆とも羨望ともつかない吐息がもれる。

月毛の馬と乗手が進み出た。

リウは唯一絶対の物を見つめる大勢のひとりとして、月毛の馬を見つめた。

一度だけ同じ 天馬競 で走った。姿を見られたのは中継地までで、リウが二位として町に入ったとき、月毛の馬はとづくに自分の馬房に帰っていた。一位と二位、表面上の差はそれだけでも、実際には大きな差があった。どうやって埋めればいいのかわからないほどの差だった。

今回もそうなるのだろうか。いくら手を伸ばしても空の月には決して届かないことを、また思い知らされるのだろうか。

「おい！」

驚いたような声に、リウは首をねじむけた。

乳色の馬の後ろ、緑の丘を越えてきた馬がもう一頭いる。草の波を押し割り、力強い前脚で大地をかきこむように駆けてくる黄褐色の馬。

「ユーリシス！」

疾走準備というよりもその姿をよりよく見るために、リウはバルメルトウに飛び乗った。

いまは空の太陽にも似た輝きを放つ巨体が躍動している。前を行く乳色の馬に追いつがっているのではない。追い上げ、襲いかかるうとする走りだ。馬と同じ姿をした、しかしなにか別の猛々しい獣のようにユーリシスは走っている。

そうさせているのは、その背の乗手だった。大胆に力強く自らの体と馬を御し、まさに人馬一体の獣となっていた。ぐいぐいと馬の首を押しやって、馬とともに走ってくる。

帽子のないむきだしの頭は、それまでの 天馬競 で見てきた赤ではなく、バルメルトウのたてがみにそっくりな漆黒で

「カズート」

夢だとすら、リウは思えなかった。

目の前の光景がただ信じられなかった。

乳色の馬は逃げている。馬体から汗を散らし、必死に逃げている。黄褐色の獣がそれを追っている。蹄ひとつ分でもその差を詰めようと、こちらにも全力を振り絞って追っている。

追うものと追われるもの、みるみる縮まる二頭の距離に、周囲からどよめきがあがった。

その声はやけに遠い。リウは声をあげることも忘れ、呆然と見つめることしかできない。

カズートがユーリシスに乗っている。鞍上の激しい動きに襟もとが乱れ、風防布の端はほどけかけて、自らが作り出した風にたなびいている。

乳色の馬が逃げ込むように中継地に入ってきた。今回は乗手に余裕はない。無言のまま月毛の乗手に旗棒を差し伸べ、渡す。

一瞬の差でユーリシスも飛びこんできた。

突き出された旗棒を、リウは反射的につかみ取った。

「リウ、行け！」

息を弾ませ、露わになった額に汗をにじませながらにやりと笑ったカズートの顔に、はっとわれに返る。

と同時に、彼に押されでもしたかのように、バルメルトウが走り出した。

どうしてカズートが　リウは振り返りたがる自分を懸命に押しとどめた。それでも内なる声がささやきつつける。夢、まぼろし、なにかの見間違い。振り返ってごらん、カズートなんているわけがないんだから。ばかじゃないの。

でも、とリウは震え出しそんな手でぎゅっと手綱を握りしめる。

「こうして、走ってる！」

バルメルトウはその間も駆けている。すぐ目の前の月毛の馬をとらえ、追い抜き、打ち負かすために。

やっぱりわたしはばかだ、とリウは鞍上でひとり笑う。

振り返る必要などない。やってきたカズートはまぼろしでも見間違いでもない。

バルメルトウの乗り心地がこうも変わっていない時点で気づけたはずのことだった。どれほど技巧が優れていても、ランダットには絶対に無理なことだったのだから。

リウの乗馬の手本は、常にカズートだった。

まだ背丈が変わらなかつたころはもちろん、体格も筋力もまるで違ってしまったも、リウはカズートの騎乗姿を脳裏に浮かべてはなぞってきた。

その彼が調教してしてくれた。だからバルメルトウは変わっていない。カズートの乗り方は、そのままリウの乗り方なのだから。

苦笑は次第に変わって、リウはいつのまにか笑顔になっていた。それでいて涙がにじんで視界がぼやけた。

ここに来られたのは、奇跡の積み重ねがあつたからだと思ってい

た。

だが、最後にもうひとつ、とっておきの奇跡が起きた。

カーストが来てくれた。以前のとおり、リウの心に焼きついたそのままの姿で戻ってきてくれた。

だからいま、こうして風が体を吹き抜けていく。

今度はリウ自身が奇跡を起こすために。

リウは頭を振ってにじんだ涙を振り払った。

「バルム、聞いて」

ぴんと立った愛馬の耳にささやきかける。

「あの子はおまえに気づいてる。少しでも引き離したくて、一生懸命に逃げてる。だからまだ。あの子が逃げ疲れたそのとき、おまえの脚で一気に行こう」

くるとバルメルトウの耳が回った。

前に行く馬に注意を残しつつ、リウは地面の様子に集中する。手綱と脚とで合図を送るまでもない。鞍上でリウが感じることをバルメルトウは同時に感じ、リウがしようとすることを同時にする。リウが見つけた走りやすい地表へと、バルメルトウは自然に動く。大地を蹴る脚は、疲れるどころか一歩ごとにますます軽さと力強さを増していく。

バルメルトウの蹄の轟きは、月毛の馬も乗手にも伝わっているに違いない。尾は神経質に小さく振られている。耳も落ち着きなく動いている。乗手は懸命になだめているが、月毛の馬は背後に迫った追手を意識し、しかもいらついている。

おまえはとてもしいい馬だから　リウは心の中で呼びかける。だからこんなふうに追いかけられたことなんて、これまでにないよね。走っても走っても引きはがせなくて、いつまでもいつまでもついてこられる、そんなしつこい相手になんて会ったことなんてないよね。「バルム、がんばって。まだだよ、まだ」

全力を出さないようにほんの少しだけ遊ばせた手綱に、バルメルトウは聞き分けよく従っている。リウを信じ、その合図を辛抱強く

待っている。自分に最高の走りをさせるための判断を、リウにゆだねてくれている。

月毛の馬をまかされた乗手は、当たり前だが上手い。イシャーマ牧一番の馬に乗るのだから、イシャーマ牧一番の乗手に決まっている。それだけに、馬は気分よく走ることに知らずにきたはずだ。このように不愉快な状況での走りには慣れていない。尾の動きはますます高ぶり、耳も頻繁に動いている。

「あの子は、我慢させられたことがないんだから。わたしみたいなへたくそに乗られた、おまえと違って」

リウはバルメルトウの耳にささやいた。

「だけど、もう絶対におまえの邪魔にはならないから。ふたりでうっん、みんなで勝つよ、バルム」

一瞬で背後へと過ぎ去ってゆく草原の景色のほとんどを、リウは見えていなかった。次々と迫る地表とバルメルトウと月毛の馬と。その三つのものしか見ていなかった。意識は風の中に溶けていた。

二頭の馬はどこまでも駆けていく。いつまでも、どこまでも駆け続ける。草原を吹きわたる風となり、地平のさらにその先まで。

だが、視界に飛びこんだ四つめのものが、リウの意識を引き戻した。

月毛の馬のむこう、行く手の空に、ストローンの城壁が淡い灰色の影となって見えている。ついさっき中継地を出発したと思っていたリウは驚いた。

けれども気づけば体の節々はこわばり、喉はひびわれて思えるほどに渴いている。風を受けつづけた頬はじんと冷たい。馬上に長時間を過ごした感覚が不意によみがえってくる。

リウは夢の終わり、風となっていた時間の終わりが近づいていることを悟った。

冷静な思考へと切り替える。町が近づいている。終わりは近い。

ここで仕掛けるか。もう少し待つか。リウはじつと月毛の馬の様子に目をこらす。

ここまでいらだち続けながらもその脚色に鈍さがないのは、この馬の資質と乗手の技量双方の優秀さを物語っている。

だけど、トリウは瞳をいっそうきらめかせる。馬と乗手はひとつではない。馬は馬で考え、乗手は乗手で考えている。もっと早く走らせるともがく馬と、耐えて力をたくわえておけと抑える乗手と。

全力を出させないためにずらされた口の馬銜をとらえようと、月毛の馬が頭を振った。

その瞬間、リウは手綱を動かした。ぴたりと馬銜がはまった手応えが返った。

「バルム！」

声も合図も必要がなかった。馬銜をがちりと受け止めたバルメルトウは、残っていたすべての力を爆発させた。

鞍下でバルメルトウの馬体が踊る。大地を蹴り、宙を駆ける。

バルメルトウの追い上げに気づいた月毛の馬の乗手も馬銜を取らせた。腹を蹴り、尻をぶち、気合いを入れた。月毛の馬の脚がぐんと伸び、蹄が跳ね上げた土くれが飛んできた。

だが、バルメルトウの脚の伸びのほうが、いまは大きい。四肢が完全に地面を離れる時間が長い。大地を蹴る合間に宙を駆けるのではなく、宙を駆ける合間に大地を蹴っているかのようだ。

一歩ごとに両馬の差は縮まり、並び、そして前へ出る。

「行くよ」

月毛の馬を一気に置き去りにして、バルメルトウはストロークの城壁の間を駆け抜けた。

優勝馬を告げる金管楽に乗せて頭上から巻かれた花吹雪が、リウの行く手を真っ白に埋め尽くした。

十

「ランダットさん!？」

広場の縁の人垣に見つけた赤毛頭に、リウの声がひっきりかえる。

優勝馬と乗手に少しでも近づこうとする観客を押さえる兵士の隣で、ランダットはのんきに手を振った。

「おー、おめでとう」

その横でローナも頬を真っ赤にして身を乗り出している。

「リウさん、リウさん！」

人混みにもまれたせいかわ、服がくしゃくしゃになっているが、元気そうだった。

「ローナ、来てくれたの！」

ランダットが口をとがらせる。

「こんな遠出なんてさせたくないかったんだけどさー。おれが出ないってわかったら、すっごく怒んだもん。連れてってくれないならひとりでも行くって言い張るから」

「ローナ、ありがとう」

こくこくとローナはうなずいた。真っ赤になった顔が見る間にゆがんでいく。

「だって父ちゃんが、父ちゃんのばか、あたしの熱なんかたいしたことないのに、ないのにこんなことして わあああああ！！」

勝ったああ！！」

「お、お？ おまえ、なんで泣いてんの？ だから言ったじゃん、カズートが出るんならおれなんか出なくて大丈夫だって。あんなだけ上手いやつがあんなだけ本気にやってたんだから、絶対また乗れる、大丈夫だって言ったじゃん？」

「わあああああ！！」

「だからー、ちゃんとこうして勝ったじゃん。な、なんで泣くわけ？」

「わあああああ！！」

おろおろとろたえるランダットなど初めてだった。リウは小さく吹き出した。

親子と別れて先へと進む。歓声が、拍手が、口笛が、周囲の高い建物から降ってくる。リウは無理やり胸を張って前だけを見る。が、

ふと失礼かもしれないと思って鍔広帽を取った。

こぼれ落ちたリウの髪に、広場を包む歓声がまた大きくなった。

「リウ！」

その中に自分を呼ぶ声を聞きつけて、リウは振り向いた。

観客から守られた広場の中央に、エギルを引いたシャルスがいた。中継地でカズートに旗棒を渡した後、すぐに戻ってきていたのだろう。鞍を下りたリウはすぐにその顔をうかがったが、彼はなにも見せるつもりはないといった笑みを浮かべた。

「おめでとう」

「わたしだけじゃない、シャルスだって」

「僕は二位だったよ。イシャーマの馬に姿も見えないほど離されたね。とはいえ三位にも差はつけられたから、中継地で面食らっても旗棒を渡せるくらいの時間はあったよ。彼、だっただね」

シャルスは長々と息をつくとき、町の外を見やった。

「あれだけのものを捨てられるわけがないと思っていたけど、違っただんだ。彼は自分がしてやれるかたちでじゃなくて、きみが望んだそのままのかたちで助けてくれたんだ」

そうだ。リウは改めて彼のしてくれたことを噛みしめる。

カズートは自分の牧の馬と競ってくれた。勝ちたいというリウの夢を助けてくれた。

そしてリウは、シャルスの知らないことも知っている。

カズートは馬に乗れなかった。バルメルトウの鞍にまたがるのがやっとだった。再びあのように乗れるようになるまで、このひと月カズートは毎日どれだけの恐怖と闘ってくれていたのだろう。

いつまでたってもやってこない優勝者にしびれを切らしたのか、盛装した軍人が近づいてきた。その手には花のように豪華なりボンがあった。リボン中央の宝石のきらめきに誘われてそちらに目を向ければ、むこうに据えられた台の上には馬の青銅像が並んでいて、その首には五色の布が光っている。

「だめ、わたし、受け取れない」

輝かしい名誉の証から、リウはとつさに顔をそむけた。シャルスに訴える。

「カズートを迎えに行ってくる！ あれをもらっていいのはわたしじゃなくて、カズートだもの！」

シャルスの口が開いたが、声はなかった。一瞬の沈黙の後、彼はにこりと微笑んだ。

「わかった、彼を迎えに行ってくるといい」

「ありがとう！」

リウはバルメルトウの首をぽんと叩いた。

「ごめん、バルム。もうちよつとだけ」

バルメルトウは喜んで頭をあげた。

リウはまだつけたままの鞍に飛び乗ると、驚いた軍人の声と周囲のどよめきを後にした。

町から飛び出したリウとバルメルトウを、誰も 大天馬競 の優勝者とは気づかなかつた。草原に三走の騎影が現われるたびに歓声はあがるが、それは町を離れていくリウたちにむけられることはなかつた。

リウ自身、そうした周囲に注意はまったく払っていなかった。

中継地でひと息入れた二走の馬と乗手は、今度は無理をせずに三走の競路を帰ってくる。仲間の順位が気になって急ぐにしても、すでに二走の競路を走らせた馬を、また全力疾走させることなどあるわけがない。

だがリウはそんな常識すら忘れていた。駆けてくる人馬を見つづけるたび、リウはそれがユーリスとカズートではないか確かめ、またすぐに次の騎影を捜した。

舌を出して必死に走る栗毛の馬の後、ついにリウは待ち望んだ姿を見つけた。

草原をゆっくりと駆けてくる黄褐色の馬と、その背に見える黒髪の乗手。

リウはバルメルトウを止めると、鞍をすべりおり、走った。

「カズート！」

鞍を下りた世界は急に低く、走る足はもどかしいほどのろく。リウは改めて自分の無力さを思い知る。けれどもこの低さが、この遅さが、本来のリウのものだ。さつきまでのあのひらけた世界、風になったひとときは、周囲がリウを助けてそこまで押し上げてくれたからこそ、感じられたものだ。

そのことにお礼を言わなければ。

誰よりも、なによりも支えてくれたひとに。

「どうした！」

自分も鞍を下りたカズートの強ばった顔に、リウは微笑みかける。心配しないで、優勝だよ。一番の金天馬だよ。みんなみんな、全部カズートのおかげだよ。そんなすべての言葉を言った気になつて、リウはぶつかるようにカズートに抱きついた。一瞬ゆらいで、けれどもすぐにしっかと受け止めてくれた体に安堵した。

「……勝ったんだな？」

目をつぶってこくりとうなずく。

額を押しつけた彼の体から、ふっと力が抜ける。

「あせらせるなよ……なにかと思った」

だって、みんなカズートのおかげだから、少しでも早く報せたくて 会いたくて。

言葉はまったく出でくれなかった。だからリウは、力いっぱいカズートを抱きしめた。なにも言うことができなくても、想いがすべて彼に伝わってくれるよう。

そつと背中に置かれた彼の手に、リウは自分の願いが叶ったことを知った。

と同時、自分がいつのまにか泣いていたこと、彼の服を濡らしてしまっていること、そしていま自分がなにをしているかということに、やっと気づく。

「今度はなんだ？」

やけに察しのいいカズートの声に、かあつと全身の血が逆流した。

「……どうしよう」

「なにが？」

「……後のこと、なんにも考えてなかった」

「後のこと？」

「……は、恥ずかしいよ。こんなことして、顔、もう合わせられない」

もともと合わせるつもりなんてなかったけど、このままこうしているわけにもいかないし、そうになると顔を見せないわけにもいかないし　リウの頭は同じところをぐるぐる回り、そうしている分だけこの状態が長く続いてしまうことにもまた気づいて、さらに混乱する。

カズートが笑った。

「怖いからって避けてると、その後苦労するのはお互い経験済みだろ。いまのうちだ」

彼の手が肩にかかってリウを離そうとする。

「わ、やだ、だめ！」

「おまえ、本当におれのことばかり見てたんだな。バルメルトウに乗ったとき、驚いた。初めて乗った気がしなかった」

「うっ……やめてよ、お願いだから……」

「安心しろ、どんな泣きべそ顔見たって冷めやしないから。ま

さかまだわかってないのか？ おれだっておまえだけを見てたんだぞ。金持ち嫌いのじゃじゃ馬を」

「っ」

「おれはずっとここにいる。おまえがいる、ここに」

一瞬息が止まるほどきつく抱きしめられた直後、リウは優しく引き離された。といっても彼の手はまだ肩にある。リウは、そうすれば自分が見られることはないともいうかのようにぎゅっと目をつぶり、顔をそむけた。

「思いきりの悪いやつだな」

笑い声まじりの吐息。

「二度と顔を合わせてくれないってことになるよ、おれは路頭に迷うんだが」

「……なに、それ」

リウはごしごしと涙をぬぐい、目を開けた。

見かけの鋭さの下に隠された優しさが露わになったまなざしが、リウを見つめていた。

「いまさらイシャーマの名や金が欲しいって言っても、無理だからな。おれが持つてるのはもうおれだけだ。ただ、いまならバルムもついてくる。おまえにもらった、おれの馬だからな」

リウは呆然とまばたいた。

目を細めたカズートの顔が赤くなる。

「……あのな。うん、とか、はい、とか、どっちか言ったらどうだ？」

リウは思わず笑った。

「それ、どっちだって同じ！」

笑った途端、最後に残った涙が目尻から落ちた。

「当たり前だろ、こっちだって後がないんだ。うちの牧の馬も出てくるってのに、別の馬に乗って、しかも勝ったんだぞ。おまえのところに以外、どこへ帰れっていうんだ」

まだ顔を赤くしたまま、カズートも笑った。

草原を風が吹いていく。

二度と乗れないと思っていたその風を、リウはまたつかまえた気がした。

《了》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0571r/>

ライドガール

2011年2月26日16時10分発行